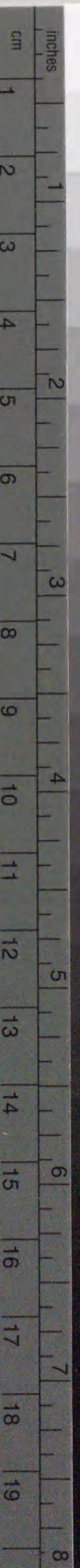


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

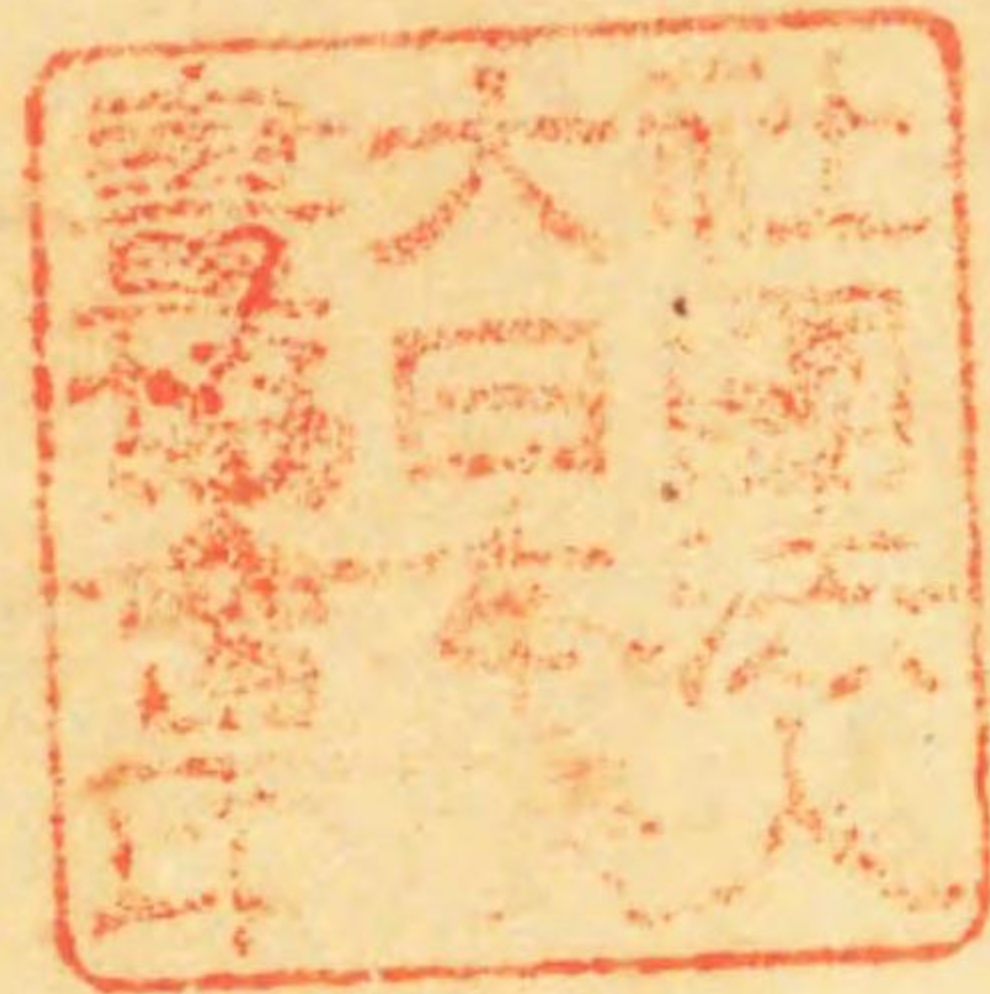
	Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
0									
1									
2									
3									
4									
5									
6									
7									
8									
9									
70									
1									
2									
3									
4									
5									
6									
7									
8									
9									
80									

210.58
1653d



00229773

19.7.22
778



企書部



大日本維新史料

352

352

大日本維新史料

大日本維新史料

210.58
I 653d
II



229773

凡例

一、大日本維新史料ハ、弘化三年二月十三日ノ孝明天皇踐祚ニ起リ明治四年七月十四日ノ廢藩置縣ニ終ル。其ノ間二十五年六ヶ月ニ互レリ。大約二百冊ヲ以テ完結ノ豫定ナレドモ今後尙ホ既成ノ稿本ニ修訂ヲ加ヘ、史料ヲ増補スルヲ以テ、多少ノ増減ヲ免レズ。全部ヲ分チテ次ノ八編ト爲ス。

- 第一編 弘化三年二月十三日ヨリ嘉永六年十二月晦日ニ至ル
- 第二編 安政元年正月元日ヨリ安政四年十二月晦日ニ至ル
- 第三編 安政五年正月元日ヨリ萬延元年十二月晦日ニ至ル
- 第四編 文久元年正月元日ヨリ文久三年十二月晦日ニ至ル
- 第五編 元治元年正月元日ヨリ元治元年十二月晦日ニ至ル
- 第六編 慶應元年正月元日ヨリ慶應三年十二月晦日ニ至ル
- 第七編 明治元年正月元日ヨリ明治元年十二月晦日ニ至ル
- 第八編 明治二年正月元日ヨリ明治四年七月十四日ニ至ル

凡例

一、編纂ノ體ハ編年體ト爲シ、事ヲ以テ日ニ係ケ、日ノ詳ナラザルハ月ニ係ケ、月ノ明カナラザルハ年ニ係ケ、事ノ數日・數月ニ互レルモノ、及月日相近キ同種類ノモノハ、便宜、合敘シタルモノモ尠カラズ。

一、每條ノ首ニ綱文ヲ置キ、以テ事件ノ大要ヲ提舉セリ。綱文ハ簡約ヲ旨トシ、強ヒテ文辭ヲ修飾セズ。天皇ノ御言動ヲ除ク外ハ、大抵敬語ヲ略ス。又、朝廷ノ行事・令達等ヲ敘スル場合ハ、主格タルベキ朝廷ノ文字ヲ省キテ、直チニ其ノ事ヲ記シ、朝廷ニ上ル稟請ノ類ヲ敘スル場合ニ於テモ、亦朝廷ノ文字ヲ表ハサズ。

一、綱文ヲ立ツル事件ハ、維新ノ政變ニ關スルモノヲ主トセリ。而シテ其ノ提舉スルト否トハ、一ニ史料ノ有無ニ因レルガ故ニ、間々體裁ノ一貫セザルモノアルハ、已ムヲ得ザルニ出ヅ。

一、綱文ノ排列ハ、朝廷ニ關スルモノヲ首ニ置キ、幕府・諸藩・雜ノ順序ニ列ネタリ。但、明治元年以後ニ在リテハ、必ズシモ此例ニ據ラズ。

一、朝廷ノ諸儀式ハ神事・朝暮關係ノ典禮ニ限リ之ヲ舉ゲ、恆例ノ年中行事ハ、總テ初出ノ所ニ舉ゲ、爾後其ノ事項ニ依リ、或ハ史料ノ有無ニ依リテ之ヲ省略セルモノアリ。幕府ノ典禮・儀式及年中行事モ、亦之ニ準ズ。

一、朝官職ノ任免ハ、三公以下權大納言以上及議奏・武家傳奏ヲ初メ、臨時・新置ニシテ重要ナルモノニ限リ之ヲ掲グ。但、特殊ノ人物ニ在リテハ、必ズシモ此ノ例ニ據ラズ。又、位階ノ昇叙ハ、從一位以上ニ限リ、贈官位ハ盡ク之ヲ掲ゲタリ。武家ノ官位宣下ハ、特別ノ場合ニ限リ、之ヲ掲グ。

一、幕吏ノ任免ハ、布衣以上ニ限リ、之ヲ掲グ。但、臨時・新置ノモノハ、必ズシモ此ノ例ニ據ラズ。

一、皇族・公卿及將軍並ニ其ノ一族ノ薨去・逝去ノ場合ハ、廢朝或ハ幕府ノ遇密ヲ令シタルモノニ限リ、之ヲ掲グ。

一、諸侯及其ノ世子ノ朝覲・參府及襲封・致仕・死歿ハ、概ネ之ヲ掲ゲタリ、

一、人名ハ當時ノ稱呼ニ從ヒテ之ヲ記シ、官職・身分・貫籍・變名・前名・後名・雅號・贈官位等ヲ、適宜ニ、或ハ冠シ、或ハ註セリ。

皇族ニハ、諱又ハ官號ヲ用ヒタリ。

公卿・堂上・殿上人・將軍・諸侯ニハ、氏及諱ヲ用フ。但、諸侯ノ冒セル松平姓ハ、明治元年正月以後其ノ本姓ニ復セルモノニ在リテハ、之ヲ用ヒズ。

諸大夫以上ノ者ニハ諱ヲ用ヒ、官又ハ受領名ヲ註ス。士ニハ氏及通稱ヲ用ヒテ諱ヲ註ス。明治二年七月八日以後ニ在リテハ、凡テ諱ヲ用ヒ、諱ノ不明ナル者ハ通稱ヲ用ヒタリ。

祠官ニハ氏及諱ヲ、僧侶ニハ法名ヲ用ヒタリ。
庶民ニシテ、氏及屋號ヲ有スルモノハ、之ヲ記セリ。

一、藩名ハ、城邑名ニ據レドモ、鶴岡ヲ庄内、松前福山ヲ松前ト爲スガ如ク、慣用ニ從ヘルモアリ。支封ニシテ固有ノ城邑名ナキモノニハ、宗藩名ヲ冠シテ、某藩支藩ト記セリ。又、同名ノ藩ニハ、各其ノ國名ヲ註記シテ之ヲ區別セリ。

一、城邑及城代・遠國奉行ノ所在地・開港場ヲ除ク以外ノ地名ニハ、概ネ國郡名ヲ註ス。但、地名ハ、史料若クハ既成ノ地誌ニ據リ其ノ位置ヲ註シタルヲ以テ、或ハ現今ト同ジカラザルモノアルベシ。

一、人名・地名等ニシテ、同音異字ノ混用セラレタルモノ、例ヘバ莊・庄、坂・阪ノ如キハ、便宜、之ヲ一定セリ。又、同一人名・地名等ノ續出スル場合ニハ、適宜、ソノ註記ヲ省略セリ。

一、西洋諸國ノ國名・人名・地名・船名等ノ固有名詞ノ稱呼ハ、原語ノ明カニシテ既ニ一般ニ通用セルモノハ之ニ據リ、然ラザルモノハ主ナル史料ニ見エタルモノニ據リ、其ノ表示ハ「」ノ内ニ片假名ヲ以テ記スルヲ通則トシ、原語ノ明カナルモノハ之ヲ附記セリ。但、慣用ノ略稱、或ハ用字アルモノ、例ヘバ英・米、又ハ倫敦・巴里等ハ、之ヲ用ヒタリ。

一、引用史料ノ體裁ハ、概ネ原本ノ舊ニ仍レリト雖モ、時トシテ文書中ノ改行ヲ缺字或ハ連書ニ改メ、或ハ其ノ一部分ヲ省略シ、系圖ニ在リテハ、必要ノ人物ノミヲ摘出シ、又、日記ノ日附ハ、冒頭ニ必ズ月名ヲ記入セルガ如キ、便宜、裁酌セル所ナキニシモアラズ。

一、史料ノ文ニハ、凡テ句讀ヲ施シ、人名・地名等ニハ、便宜、傍註ヲ加ヘ、又、本文中ニ間々割註ヲ加ヘテ、文意ヲ補足セシ所アリ。蠹蝕ニハ、凡テ其ノ字數ヲ推シテ□ヲ填シ、字數不明ナルモノニハ□□ヲ填シ、又、意義ノ疑ハシキモノ、或ハ原本ノ誤謬ト認ムベキモノニハ、左傍ニ(マ、)ト記シテ疑ヲ存シタリ。

一、同文ノ史料數通アル時ハ、其ノ最モ重要ナリト思惟スル一ヲ引用シ、他ハ書名ノミヲ末尾ノ()内ニ附記ス。但、史料本文ニ附隨セル端書及添書等ハ、必要ニ應ジ、小活字ヲ以テ之ヲ示シ、其ノ下ニ書名ノミヲ記入セリ。

一、引用史料名ハ、凡テ「」ヲ以テ之ヲ圍ミ其ノ内ニ記ス。書名ハ原題ニ據ルヲ通則トセルモ、便宜、之ニ人名藩名等ヲ冠セルモノアリ。史料名ノ下ニハ小活字ヲ以テ其ノ出處ヲ註セリ。但、原本寫本ノ別ナク、凡テ何某所藏本ト記シ、刊本ニ在リテハ、之ヲ省ケリ。尙ホ書名ノ原題ノミニテ其ノ内容ノ性質不明ナルモノニ在リテハ、適宜、其ノ性質ヲ出處ト竝ベテ註記セリ。

- 一、註・案・連絡文等、編者ノ記入セル文ニハ凡テ○ヲ冠シ、或ハ()ヲ加ヘテ、原文トノ區別ヲ明カニセリ。
- 一、史料ノ排列ハ、事件ニ對スル重要性、或ハ關係如何ヲ參酌シテ之ヲ定メタリ。是レ史料ノ種別夥多ニシテ、一概ニ律シ難キヲ以テナリ。
- 一、西洋諸國ノ史料ハ、其ノ原文ノミヲ掲ゲテ譯文ヲ附セズ。又、其ノ排次ハ、之ヲ末尾ニ置ケリ。
- 一、欄外ノ見出シハ、檢索ノ便宜マデニ、人名・物名・要領等ヲ提示スルニ止ム。之ヲ以テ萬般ヲ盡シ、又、取捨ノ意ヲ示シタルニ非ズ。
- 一、曩ニ本會ノ刊行セル維新史料綱要所掲ノ綱文ト本書所掲ノ綱文ト、其ノ記事ノ内容ノ相違抵觸セルモノニ在リテハ、本書所掲ノモノヲ以テ正シト爲ス。
- 一、本書ニ於テハ、綱文ノ正確又史料ノ整備ニ萬全ヲ期シタリト雖モ、維新ノ事績タル廣範圍ニ互リ、史料モ亦夥シク存スルヲ以テ、遺漏誤謬ナキヲ保シ難シ。從ツテ稿成ルノ後ニ發見セル遺漏誤謬ハ、大日本維新史料補遺ヲ刊行シテ増補訂正ヲ行ハントス。

大日本維新史料 第二編ノ一

目次

安政元年

正月

元 日	四方拜、出御。節會例ノ如シ。臨期、出御ナシ。……………	一
同 日	在府ノ諸侯、登城、征夷大將軍徳川家定ニ謁シ、正ヲ賀ス。 <small>元日ヨリ三日ニ互ル。</small> ……………	八
同 日	水戸藩、藩士ニ令シテ豫メ米國艦隊再來ニ對スル幕府ノ方針ニ基ヅキ、必戰ヲ期シ、武備ニ精勵セシム。……………	五〇
二 日	征夷大將軍徳川家定、賀正ノタメ高家由良貞靖ヲ京都ニ、年頭代參ノタメ同土岐頼永ヲ日光東照宮ニ遣ス。……………	五二
同 日	京都所司代脇坂安宅、參内、正ヲ賀ス。……………	五九
同 日	露國使節應接掛筒井政憲・同川路聖謨等、勘定組頭中村爲彌ヲ露國艦隊旗艦……………	五九

「バルラダ」ニ遣シ、舊臘^晦露國全權侍從武官海軍中將「エウフィーミー・プ
ウチャーチン」ノ提出ニ係ル修好條約試案ヲ返却セシム。「プウチャーチン」
之ヲ納メ、更ニ修好條約草案及其趣意書ヲ提出ス。…………… 一六〇

三 日 親王・公卿等、參内、正ヲ賀ス。…………… 一六四

四日、外様公卿等、參賀。…………… 一六九

五日、千秋萬歲、非藏人參賀。…………… 一六九

四 日 露使應接掛筒井政憲・同川路聖謨・同荒尾成允・同古賀謹一郎等、再ビ露艦
「バルラダ」ヲ訪フ。使節「プウチャーチン」、他國ニ開港ヲ許可セバ、露國
ニモ之ヲ許シ、更ニ通商條約ヲ締結セバ、マタ其利益ニ均霑セシメンコト
ヲ請フ。聖謨、之ヲ諾ス。…………… 一七二

同 日 露使應接掛筒井政憲・同川路聖謨等、書ヲ長崎掛勘定奉行石河政平・同松平
近直ニ致シテ、應接ノコト略終ルヲ告ゲ、且樺太境界見分使ノ急派ニ斡旋
ヲ請ヒ、特ニ同地上陸露國守備兵ノ處置ニ關シテ、老中阿部正弘ニ建言セ
ンコトヲ求ム。…………… 一七六

同 日 熊本藩在府家老有吉頼母等、藩命ヲ以テ相模警備地ノ視察ニ赴ク。尋デ、

萩藩在府家老浦靱負等、同ジク相模警備地ノ、岡山藩江戸留守居村上小四
郎等、同ジク安房・上總警備地ノ視察ニ赴ク。靱負等七日、小四郎等十
四日、各江戸ヲ發ス。…………… 一八三

五 日 露國軍艦「ヴォストーク」、長崎ヲ去リ、上海^清ニ向フ。…………… 一八二

六 日 露使應接掛筒井政憲等、勘定組頭中村爲彌ヲ露艦「バルラダ」ニ遣シ、開港
通商・利益均霑ニ關スル覺書及樺太境界劃定ニ對スル答書ヲ使節「プウチャ
ーチン」ニ交付ス。…………… 一八四

同 日 米國特派使節兼東印度・支那・日本海艦隊司令長官海軍代將「マシユウ・カー
ルブレース・ペリー」、護衛兵百餘人ヲ率キテ泊村ニ上陸、首里王城ニ至リ、
琉球中山府總理官金武按司・同布政官棚原親方ト北殿ニ會見シテ、正ヲ賀
シ、マタ貨幣ノ交換ヲ求ム。…………… 一七四

七 日 白馬節會。…………… 二〇五

同 日 露國使節「プウチャーチン」等、長崎西廳ニ應接掛筒井政憲等ヲ訪ヒ、退去
ヲ告グ。…………… 二二二

八 日 露國使節「プウチャーチン」、書ヲ應接掛筒井政憲・同川路聖謨等ニ遣シ、談
判ニ對スル不滿ノ要旨ヲ擧ゲテ他日再來ノ意アルヲ告ゲ、旗艦「バルラダ」

ニ乗ジ、「オリヴァーツア」・「メンシコフ」二艦ヲ從ヘテ長崎ヲ去リ、琉球ニ向フ。……………三三

九日 權大納言飛鳥井雅久ヲ罷ム。尋デ^{十一}本座ヲ聽ス。……………三七三

同日 長崎奉行大澤定宅・同水野忠篤、露國使節「プウチャーチン」退去ノ顛末ヲ幕府ニ報ジ、且定宅ノ交代歸府ニ關シテ指揮ヲ請フ。……………三七三

同日 熊本藩相模警備地總帥長岡監物、藩兵ヲ率キテ江戸ニ至ル。……………三七六

舊臘十一日、監物、藩地ヲ出發ス。……………三六一

十日 是ヨリ先、米國特派使節「ペリー」・「マセドニアン」・「ブンダリア」・「レキシントン」・「サザムプトン」四艦ヲシテ那霸^{琉球}ヲ去リ、江戸灣ニ先航セシム。……………三六一

三日、出帆ス。是日、「ペリー」・旗艦「サスケエハナ」ニ乗ジ、「ポーハタン」・「ミシシッピ」二艦ヲ從ヘテ同ジク江戸灣ニ向フ。明日、一艦「サツプライ」、同ジク上海ニ向フ。……………三六七

十一日 神宮奏事始、出御。……………三三三

同日 幕府、若年寄本庄道貫ヲ以テ海防掛ト爲ス。……………三五五

同日 幕府、令シテ外船浦賀ニ渡來滯泊ノ際ハ、人心鎮靜ノタメ諸藩ノ調練及大森・角筈等ニ於ケル演砲ヲ中止セシム。……………三三九

同日 是ヨリ先、外國船數艘、遠江・駿河二國ノ沿岸ヲ伊豆方面ニ通航ス。是日、浦賀奉行戸田氏榮、外船約七艘伊豆沖出現ノ報ニ接シ、急テ幕府ニ申シ、且警備四藩^{會津・彦根・川越・忍}ニ令シテ防備ヲ嚴ニセシメ、又監視船及應接吏員ヲ同方面ニ派遣ス。外船、見ハレズ。明日、依テ其警備ヲ常態ニ復セシム。……………三四二

同日 幕府、在府ノ浦賀奉行伊澤政義ニ令シ、急ニ任地ニ赴カシム。^{十三日、江戸ヲ發シ、十四日、浦賀ニ著ス。}……………三七七

十二日 賀茂奏事始、出御。……………三六二

同日 露國使節應接掛筒井政憲等、舊臘二十四日以降ノ應接經過ヲ幕府ニ報ジ、特ニ樺太境界見分使派遣ノ急務ナルヲ陳ズ。……………三五五

同日 町奉行、豫メ外國船浦賀渡來ノ際ニ於ケル著服・板廻狀・市中巡邏等ノ心得ヲ支配組年番方并非常取締掛ニ達示シ、マタ堀江町名主熊井理左衛門等八人ニ異國船動靜注進船用掛ヲ命ズ。……………三九七

同日 萩藩主毛利慶親、米國艦隊再渡ノ際ニ於ケル非常處置ニ關シテ指揮ヲ請フ。幕府、批シテ穩便ヲ旨トセシム。……………四〇一

- 同日、萩藩、在府藩士兒玉采女等ニ、幕府ノ命ヲ待チ、相模警備地ニ出兵セシムベキヲ達ス。尋デ、更ニ出陣ノ心得ヲ示シ、嚴ニ輕舉妄動スルヲ戒ム。……………四〇四
- 十三日 幕府、松前藩主松前崇廣ニ令シ、不日樺太境界見分ノタメ吏員ヲ派遣スベキヲ以テ、同地上陸ノ露人ヲ穩便ニ處置セシム。……………四〇八
- 同日 老中阿部正弘、熊本藩主細川齊護・萩藩主毛利慶親・柳河藩主立花鑑寛ヲ召致シ、外國船浦賀渡來ノ際ニ於ケル幕府ノ對策ヲ告ゲ、豫メ各其藩士ニ諭シテ輕舉妄動スルコトナカラシム。……………四三三
- 同日 萩藩、府下砂村抱屋敷ニ新設セル鐵砲角場ノ竣成ヲ幕府ニ申ス。……………四三九
- 十四日 幕府、賄頭村垣與三郎ヲ以テ勘定吟味役ト爲シ、海防掛・松前蝦夷地用掛ヲ兼ネシム。……………四三二
- 同日 米國特派使節「ベリー」、旗艦「サスケエハナ」ニ乗ジ、「ポーハタン」、「ミシシッピ」二艦ヲ從ヘテ、再ビ江戸灣外ニ至ル。是夜、三艦、強風ヲ避ケテ伊豆大島沖ニ假泊ス。先發ノ一艦「サザムプトン」、灣内ニ進入シテ小柴沖武藏國久良岐郡ニ投錨シ、同「マセドニアン」、針路ヲ誤リテ長井村相模國三浦郡海岸ニ坐礁ス。浦賀奉行戸田氏榮、支配組與力近藤良次・同佐々倉桐太郎ヲ「サザムプトン」ニ遣シ、返航ヲ求ム。

肯ゼズ。……………四四一

- 同日、會津・彦根・川越・忍等諸藩、各戍兵ヲ派シテ警備ヲ嚴ニス。……………四六三
- 同日 浦賀奉行、管下ニ令シテ、濫ニ米艦ニ接近スルヲ禁ジ、且浦賀ニ出入スル旅人ヲ譏察セシメ、又米艦平穩ノ狀ヲ告ゲテ市民ニ堵ニ安ンゼシム。……………四九二
- 十五日、町奉行、マタ管下ニ令シテ、濫ニ米艦ニ接近スルヲ禁ズ。……………四九三
- 十五日 幕府、關東諸國ニ令シテ外國船渡來ニ方リ、人馬ヲ濫ニ徵發スルヲ戒ム。尋デ十七日近國ニ令シテ在町ノ取締ヲ嚴ニセシム。……………四九六
- 同日 幕府、小倉藩主小笠原忠徵・松代藩主眞田幸教ニ、豫メ米人應接地警衛ノタメ出兵ヲ命ズ。明日、之ヲ停メ、後命ヲ待タシム。……………四九六
- 是ヨリ先、幕府、米使應接地ヲ鎌倉ノ寺院ニ定メントシ、浦賀奉行ニ命ジ、豫メ其地ヲ檢セシム。米艦來ルニ及ンデ、此議ヲ止ム。……………五二二
- 同日 町奉行、府下ニ令シ、米艦平穩ノ狀ヲ告ゲテ市民ノ動搖ヲ戒メ、マタ物價ノ昂騰ヲ制ス。尋デ二十日米穀ノ圍持及不正取引ヲ禁ズ。……………五二六
- 同日 是ヨリ先、町奉行、豫メ市中取締掛・非常取締掛等ニ、外船浦賀ニ渡來セバ、市中ヲ巡邏スベキヲ命ズ。米艦内海進入ノ報アルヲ以テ、是日、巡邏ヲ開始

露國使節應接掛筒井政憲・同川路聖謨等、長崎各所ヲ巡視ス。是日、佐賀藩

所管神ノ島砲臺ニ到リ、藩士ノ大砲操練ヲ覽ル。……………五四三

同日 熊本藩、在府藩士長岡銓太郎等ニ、幕府ノ命ヲ待チ、相模警備地ニ出兵セシ

ムベキヲ達ス。尋デ、藩主細川齊護、豫メ同警備地總帥長岡監物ニ警備ノ

心得ヲ諭シ、特ニ部兵ノ輕舉妄動ヲ嚴戒セシム。……………五四

同日 米國特派使節「ペリー」、旗艦「サスケエハナ」以下三艦ヲ率テ、大島沖ヲ發

シテ長井村相模國三浦郡沖ニ至リ、先發ノ「マセドニアン」是夕、離礁ス。以下三艦ト合

シ、同所ニ假泊ス。……………五七五

十六日 踏歌節會。……………五八四

同日 米國特派使節兼東印度・支那・日本海艦隊司令長官海軍代將「マッシュウ・カー

ルブレース・ペリー」、旗艦「サスケエハナ」ニ乗ジ、「ポーハタン」、「ミシシ

ッピ」、「マセドニアン」、「ブングリア」、「レキシントン」五艦ヲ率テ、長井村

沖ヲ發シテ江戸灣内ニ進ミ、小柴沖ニ投錨シテ先著ノ「サザムプトン」ヲ併

ス。浦賀奉行戸田氏榮・同伊澤政義、支配組與力近藤良次・同佐々倉桐太郎

ヲ遣シ、浦賀回航ヲ促ス。艦隊參謀長「ヘンリー・アダムス」、良次等ト「ボ
ーハタン」艦上ニ會シ、之ヲ拒絶ス。……………五九三

同日 是ヨリ先、幕府、儒役林緯・大目付井戸弘道・町奉行井戸覺弘・目付鶴殿長銳・

儒者松崎滿太郎ニ令シテ浦賀ニ至リ、米國特派使節「ペリー」ト應接セシ

ム。十五日ニ至リ、弘道ノ出張ヲ停ム。是日、緯等ニ令シ、來ル十八日ヲ以テ其途ニ就カシム。

十九日、浦賀ニ著ス。……………六三二

十五日、緯等、浦賀出張ニ依リ、登城ス。……………六三三

十七日、幕府、緯等ニ朱印狀ヲ授ク。……………六三九

同日 幕府、更ニ江戸内海警備ノタメ品川御殿山ヲ金澤加賀藩主前田齊泰ニ、高輪

ヲ津山藩主松平齊民ニ、芝ヲ福井藩主松平慶永ニ、羽田ヲ德島藩主蜂須賀

齊裕ニ、生麥・鶴見ヲ明石藩主松平慶憲ニ、大森ヲ松山伊豫藩主久松勝善ニ、

鐵砲洲・佃島ヲ姫路藩主酒井忠顯ニ、深川・洲崎ヲ桑名藩主松平猷ニ命ジテ

之ヲ守ラシメ、高松藩主松平頼胤ヲシテ遊軍タラシム。尋デ、大森ヲ齊裕

ニ、不入斗・大井ヲ勝善ニ、神奈川ヲ慶憲ニ守ラシメ、マタ願ニ依リ、慶永・

齊泰ノ警備地ヲ交換ス。……………六七五

同日 前水戸藩主徳川齊昭、登城シテ海防及米國特派使節「ペリー」應接等ノ議
ニ參ズ。二十二日マデ、連日登城ス。…………… 六九六

十八日、福井藩主松平慶永、書ヲ齊昭ニ致シ、米露二國使節ノ應接ニ關シテ所見ヲ陳ズ。…………… 七六八

同日 鳥取藩、一番手人數ヲ本牧武藏國久良岐郡警備地ニ派遣ス。明日、更ニ二番手人數ヲ出陣セシム。…………… 七三二

十七日 幕府、儒者林圖書助ヲ以テ二之丸留守居ト爲ス。…………… 七四五

同日 幕府、豫メ外船江戸近海進入ノ際ニ於ケル登城・出兵等ニ關スル心得ヲ三家家老及在府手明ノ諸侯ニ達示ス。…………… 七四九

同日 浦賀奉行支配組頭黒川嘉兵衛等、米艦「ポーハタン」ニ艦隊參謀長「アダムス」ヲ訪ヒ、浦賀ニ於テ應接スベキヲ以テ同地ニ回航センコトヲ諭ス。肯ゼズ。折衝、數日ニ互ル。…………… 七五七

同日 水戸藩主徳川慶篤ノ弟松平八郎麿、米艦視察ノタメ浦賀ニ微行ス。二十二日、歸府ス。…………… 七五四

同日 英國商船一艘、那霸琉球ニ寄港シ、英國人宣教師「モルトン」英國人宣教師兼醫師「ベツテルハイム」ノヲ上陸セシム。尋デ二十三日退帆ス。…………… 七七八

十八日 和歌御會始。…………… 八〇〇

同日 幕府、豫メ三番頭及使番等ニ令シ、米艦江戸近海進入ノ際ハ、特ニ府内巡邏・濱庭警衛ヲ嚴ニセシム。…………… 八〇八

同日 徳島藩、先手人數ヲ大森・羽田警備地ニ派遣ス。…………… 八二〇

同日 露使應接掛筒井政憲・同川路聖謨等、長崎ヲ發シ、歸府ノ途ニ就ク。…………… 八二四

十九日 幕府、目付永井岩之丞等ニ令シテ本牧・羽田・大森等ノ諸藩警備地ヲ巡見セシム。明日、鳥取藩本牧警備地ニ至ル。…………… 八三〇

二十日 幕府、江戸海岸ニ邸第ヲ有スル諸藩ニ令シ、穩便ニ兵備ヲ整ヘシム。…………… 八三九

同日 幕府、令シテ明石藩主松平慶憲ニ神奈川へ、松山伊豫藩主久松勝善ニ不入斗・大井へ各一番手人數ヲ派遣セシム。明日、明石藩、出兵ス。…………… 八四三

同日 是ヨリ先十四日相模警備地ノ川越藩一番手人數、出デテ鳥ヶ崎臺場ノ警備ニ就ク。是日、同藩二番手人數、藩地ヲ發シテ同警備地ニ赴ク。…………… 八七二

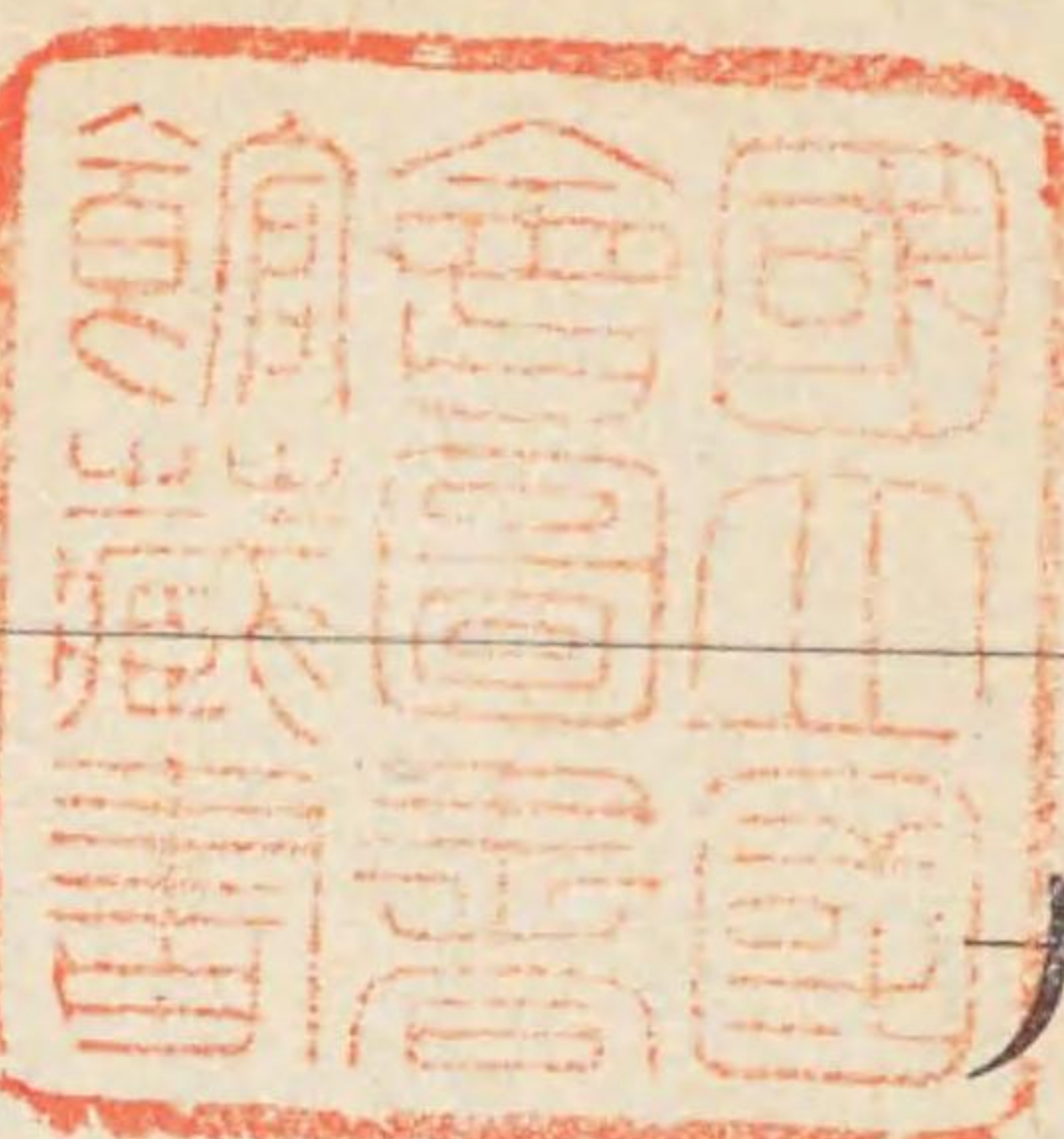
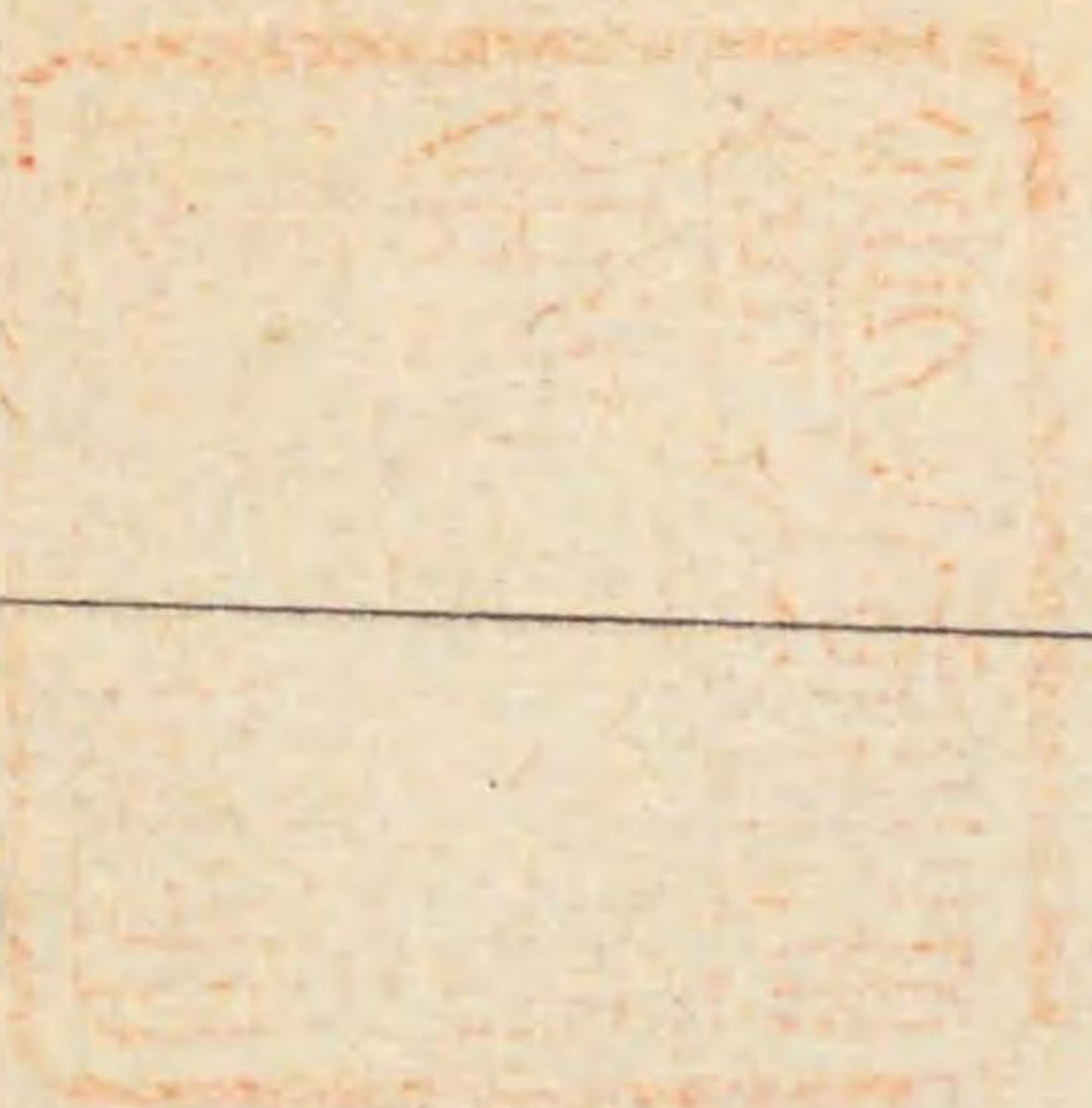
同日 三田藩主九鬼隆徳、病ニ因リテ退隱シ、嫡子精隆、家督ヲ承ク。…………… 八七六

目次 安政元年正月

川路聖謨長崎日記寫真版
松平慶永書翰寫真版

一一

(目次終)



大日本維新史料 第二編ノ一

安政元年甲寅

紀元二五二四年
十一月二十七日
安政ト改元
(西曆一八五四年)

正月

小盡
朔辛丑

元日辛丑 四方拜、出御。節會例ノ如シ。臨期、出御ナシ。

〔公卿補任〕

四方拜、出御如恆例、奉行藏人頭左中辨(總司)光愛朝臣、元日節會、奉行光愛朝臣、

〔非藏人日記乾〕○東京帝國
大學所藏本

正月一日、辛丑、晴、申刻後眩々雨、當番議奏右大將殿、(備置奉覽)厥外摠參、(三條實隆坊城俊明)傳奏兩卿參侍、

一四方拜、丑半二刻過、

出御、寅半二刻前、入御、奉行職事頭辨光愛朝臣、其餘參集、中殿布設、

六位侍中之沙汰也、御塞之後、蔦杉戶鑑、奉行職事番頭江被授、出御之後、職事衆被參進、

此時番頭開之、直閉之、如例、且車寄南行當并虎開格子
之下等、臨時行灯出之、

一攝家中御禮、自參臺殿御參也、近衛家諸大夫江賜御祝酒、同列兩人、廣之、重以、盃酌役之、御參以

安政元年正月元日

四方拜及元日節會奉行

四方拜出御

攝家參賀

一

安政元年正月元日

二

前、議奏衆江申屆、參臺殿江相廻、昇降自奏者所、事訖而歸參之儀、同御屆申入、令退出、

一朝餉供進、中殿內侍塞有之、

一左大臣殿・九條大納言等御參、(九條尚忠)

一節會也、奉行同朝臣以下至六位侍中、悉參侍、內辨左府公、外辨公卿以下參侍、

一節會陣被始、戌刻、直宴會也、臨期不被爲在 出御之旨、議奏右大將殿被申渡、宴終、子二刻過、

一七箇門之鑑、陣官人申出、奉行職事江申入、取次方請取、相渡、下侍議所納殿等之鑑、夫々官人依申出、渡之、

一南殿御後東西之辛戸御膳宿等開之、六位侍中被示、

一金燭中一基、手燭二基、番所前設之、臨時行燈、虎間格子之下二置之、

一直廬之構雖有之、(備司改題)因爲殿下御不參、御拜借之品無之、

一宴終、御塞被解之後、番頭爲火元點檢、御殿廻、無異之旨、議奏衆へ申屆、

一虎間獻、秀邦・公昌、奉行附爲邑・義香等役之、

一大福茶梅干三番所江被出、外樣衆江菱葩雉子燒服紗牛房銚子提等被出、

一入夜内々衆、御盃參侍、外樣衆江御銚子被出、

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

節會
臨期出御ナ

關白三公等
參内

正月一日、辛丑、晴、申刻後雨、四海萬歲春珍重々々、家内安全幸甚々々、自去夜 内裏伺候、

四方拜具之由、奉行光愛朝臣言上、丑終刻、於朝餉御服著御、子候御前、了 出御于東庭御座、實麗

著束、取御劍、御拜了 入御、例年、初刻也、此後予退出、子時寅、家祝如例年、内侍所奉御鈴料、神拜等

亦如例年、和宮新年恭賀申上、巳下刻、參 内、新年恭賀付勾當掌侍申上、小時、關白・左大

臣・右大臣・内大臣・左大將・二條大納言・九條大納言・近衛大納言・中納言中將等、自長橋車

寄參上、新年恭賀被申上、於常 御所 御對面、右大將被申次之、賜二獻、陪膳源大納言建、益供豐房、

藤原助胤、予候詰、須臾、出御于御學問所、御對面如例、了退出、子時申、中將、節會參陣、

申終刻、著束帶、闕腋袍以下如例、木地螺鈿劍、紫綵、緒、巡方帶、銀魚袋、具靴、紅梅袴、隨身四人、其實二人、白張二人等召具參 内、酉刻

計、予亦參内、今夜節會也、小時、陣始、内辨左大臣、陣後、不 出御、續内辨中山大納言、予、亥

刻計、退出、御盃候、諸役早出、後聞、續左、中將、内辨堂上、後早出云々、

今日散狀

公卿

内辨、陣後早出

左 大 臣 尙忠

陣後早出

九條大納言 幸經

三條新中納言 公隆

臨期不參

右 大 臣 忠熙

續内辨

中山大納言 忠能

右衛門 督 愛長

臨期不參

内 大 臣 輔熙

權中納言 公遂

左大辨宰相 俊克

臨期不參

新大納言 雅久

新中納言 宗弘

左宰相 中將 季知

安政元年正月元日

三

安政元年正月元日

臨期不參

式部大輔以長

宮内卿行遠

新侍從三位雅典

四

少納言在光朝臣

辨

次將左

定章朝臣

定功朝臣

公總朝臣

實在朝臣

公董朝臣

實麗

隆詔朝臣

隆賢朝臣

宗有朝臣

為兄朝臣

奉行職事

光愛朝臣

今日、左大將殿中納言殿等太刀進上如例年、中將大夫等同進上了、

〔橋本實麗日記〕

○東京帝國大學所藏本

四方拜出御

正月一日、辛丑、天晴、四海萬歲春幸甚々々、家内安全珍重々々、今曉四方拜、出御、為候御

劍舊臘奉子上刻、沐浴、着束帶、如常平雄參内、先參常御所、參之旨告於奉行職事光愛朝臣、

其後息所、流例也、同時人々參集、丑刻計、御裝束具則被言上、須臾有出御催、仍於便所、洗手、

候于中殿簀子額間邊、御格子上額間計、又晝御座御茵返裏之儘、東庭御裝束如例、山科三位綾小路三位等被參御服、了供御手水、陪膳胤保朝臣、益供豐房源常典、了掌侍出自夜御殿、置御劍

晝御座、御茵南、柄次出御、予走進取御劍、立御筵道北、南向余光愛朝臣獻御草鞋、胤保朝

節會

臣候御裾、予從御步橫行、先是、親賀編前、重實等朝臣、日野等延榮、梅小徳定輯、源常典等、取脂燭、入御々屏

風中、中御門經之獻御笏、御屏風閉之後、予越御筵道立南北面、御拜了、有御咳聲、職事開御屏風、

本役人獻御草鞋、次入御、一如出御、事了退出、於此出御無異、于時寅斜也、直神拜如例年、

先家君申上年賀、家祝如例年、今日依佳例、一傳於桃花太刀一腰宛、又彼兩殿御禮御參也、依之

予實梁等出迎之事、舊臘示給、而予不參上、依爲和宮申上御禮、賜御祝如例、今夜節會也、

予為候陣之間、舊臘奉申半刻、着束帶闕腋袍半臂以下如例、木地螺鈿劍紫綫平緒巡方帶付魚袋

銀、平雄彦隨身四人、其實二人、紅梅袴白張二人、傘靴胡床等相具、參内、自高遣戶昇殿、先參常御所、

告于奉行光愛朝臣、則璽扶持可存被示、承諾、同時人々參集、戌斜、陣之儀被始、着陣人々左

大臣此後早出、九條大納言幸、此後早出新中納言宗、三條西季相左宰相中將季等云々、不見及、今夜臨期不出

御、又申斜、依小雨降、節會雨儀也、外任奏被返下比、下殿、降高遣左將、定章、野宮定功、花園公總、藤野非實在

公董等朝臣、右將、予、野宮隆詔、藤野非隆賢、中御門宗有、藤野非為兄等朝臣等、於日月花門外壇上、著靴、入同門、著

胡床、門北殿左西上南面、右東上南面、於斜者、陣後壁寄立、流例也次中山大納言忠、續内辨被著宜陽殿兀子、次内侍臨檻、亞相微唯、

謝座昇殿、著座、予此後早出、于時亥刻計也、諸役早出、後聞、續左、

今日散狀

内辨、陣之後早出、臨期不參左大臣尙忠、臨期不參右大臣忠熙、臨期不參内大臣輔熙、臨期不參新大納言雅久

安政元年正月元日

五

節會ニ雨儀ヲ用フ

散狀

安政元年正月元日

陣已後早出

九條大納言幸經

陣已後、續內辨

中山大納言忠能

權中納言公遠

新中納言宗弘

三條新中納言公陸

御酒勅使已後早出

雜事三獻已後早出

宣命使

右衛門督愛長

左大弁宰相俊光

左宰相中將季知

式部大輔以長

宮內卿行遠

新侍從三位雅典

少納言 在光朝臣

辨長順

次將 左

定章朝臣實城朝臣理

定功朝臣

公總朝臣

實在朝臣

公董朝臣

實麗

隆韶朝臣

隆賢朝臣

宗有朝臣

爲兄朝臣

奉行職事 光愛朝臣

〔雅俗日簿〕○山科言成日記
宮內省圖書寮所藏本

參內

正月一日、子刻、於里亭著束帶、

參內、四方拜

出御依御服之參上之旨、屈于奉行頭辨光愛朝臣、

御前綾小路三位被參了、

丑半刻過、御服被出之旨、右大將被示、萬里小路中納言誘引、予先之懸裾、於上手、挿笏於腰了、參進常御殿、於下段、女房衆被渡御服、賜之渡殿上人了、於朝餉御服重替了、此間 出御之旨、

御服參仕奉

職夏被告了、予、御前卿等、侍渡廊、良久召御服人云々、參仕奉仕如例、了退、加惣詰列、直出

御、下御東庭、諸臣降地、御拜、了職事開御屏風、藏人頭供御草鞋、五位職夏、奉取替御笏與御

檜扇了、予參仕、自御劍將實麗朝臣、左方膝候參進、奉刷御袖、了退便宜所、平伏、上御之後、

上長橋、入御之後、歸于番所、職夏退出之事被告了、了退出、寅一刻過、今曉如每年、朝之間議

奏加勢德大寺亞相被勤云々、

早且狩衣切袴、家公已下列座、先大福茶、三度、次口祝、先是、年祝申、家公在御祝答、眷屬祝詞

從家公賜口祝、不相變恐悅、尙可無盡斯者也、眷屬拜領了、自

次齒固穗俵之粒、祝之、次屑蘇酒三度、了祝飯如例、次家僕男女、自家公賜口祝、予等列座、了土

藏開、齒固、了掃除始、家僕奉仕云々、歲旦七絕吟之、今曉於宮中

除夜時移業務身 忝昇鳳闕夙迎春

歸亭祝著開歡宴 萬國太平冀歲神

辰半刻許、衣冠奴袴、參于陽明、以諸大夫、年始恐悅言上并御父子御出迎參上之旨申上了、家公內、

依歡樂御斷之旨、人々參集、第一新中納言宗弘先賜御祝、次御對面云々、御父子御列座、從右府公賜

口祝了、直御 參內云々、御門流先之參內、於宜秋門內奉出迎、大納言殿御參之時申合、奉從參內殿、太刀

馬折紙五位人披露云々、頃之殿下已下追々參上云々、以議奏年始申上給云々、御祝被出、直召御前云々、

安政元年正月元日

關白等參賀

近衛家ニ參

諸臣被出御祝、良久御退、御禮之後、御退出、四辻中納言・子等於准后御出迎申了、其序、予准后御方年頭御祝義附御帳、御退出之後、退出、歸家、于時未半刻許、歸宅後降雨、申刻許、家公於里亭御束帶、節會御服御參云々、御前按察前中納言參仕云々、亥刻許、御退出、無出御云々、節會雨儀云々、傳聞、參仕公卿、

内辨左府尙忠公、陣後早出新大納言雅久、臨期不參云々、九條大納言幸經、陣後早出歟、續内辨中山大納言忠能、權中納言公遂、新中納言宗弘、三條新中納言公睦、右衛門督愛長、左大辨宰相俊克、左宰相中將季知、式部大輔以長、臨期不參歟、宮内卿行遠、新侍從三位雅典、侍從三位斷替云々、

在府ノ諸侯、登城、征夷大將軍德川家定、正二位○内大臣二謁シ、正ヲ賀ス。日元

ヨリ三日
ニ五ル。

〔西丸日記〕○維新史料編纂會所藏本

正月朔日、

將軍白書院
出御

一今辰下刻、御白書院

出御、

著座

水戸侯及大
廊下諸侯
年賀太刀目
錄獻上

水戸〔德川慶篤、水戸藩主〕中納言殿
松平〔前田齊泰、金澤藩主〕加賀守
松平〔齊良、津山藩主〕越後守
松平〔慶永、福井藩主〕越前守
松平〔池田慶徳、鳥取藩主〕相模守

右、年頭之御禮、御太刀目録ヲ以被申上之、次ニ越後守・越前守・相模守御太刀目録持參申上之、御盃頂戴、吳服臺ニ拜領之、

一尾張中納言殿御在國、〔德川慶頼、和歌山藩主〕紀伊中將殿御幼少ニ付、名代之以使者、御太刀目録被獻之、老中披露之、

松平〔緒須賀齊裕、徳島藩主〕阿波守
松平〔頼胤、高松藩主〕讚岐守
○安政
年録

右、年頭之御禮、壹人ツ、御太刀目録持參申上之、御盃頂戴、吳服臺ニ拜領之、

松平〔慶倫、津山藩主〕三河守
松平〔頼學、西條藩主〕左京大夫
松平〔久松勝實、伊豫松山藩主〕隱岐守

尾張紀伊兩
侯ノ使者太
刀目録獻上

大廣間溜問
詰諸侯賀
上刀目錄
太刀目錄
大廣間溜問
詰諸侯賀

安政元年正月元日

井伊掃部頭(信濃、淺井藩主)
 松平攝津守(後見、高須藩主)
 松平肥後守(谷保、會津藩主)
 松平大學頭(賴廣、守山藩主)
 松平播磨守(賴綱、常陸府中藩主)
 堀田備中守(正篤、佐倉藩主)
 松平下總守(忠順、忍藩主)
 松平兵部大輔(慶應、明石藩主)
 松平越中守(益壽、桑名藩主)
 松平民部大輔(忠定、忍藩世子)
 藤堂大學頭(高澤、津藩世子)
 松平宮内大輔(賴興、高松藩世子)
 初め 酒井雅樂頭(忠順、河津藩主)
 初め 阿部伊勢守(正弘、關山藩主)
 牧野備前守(忠雅、長岡藩主)

帝鑑問詰
侯年賀諸
目錄上太刀

安政元年正月元日

右、同斷御禮、壹人ツ、御太刀目録持參申上之、御盃頂戴、吳服廣蓋ニテ拜領之、畢
大廣間

右、同斷御禮、壹人宛御太刀目録持參申上之、御盃頂戴、吳服臺ニテ拜領之、

松平和泉守(家全、西尾藩主)
 松平伊賀守(忠徳、上田藩主)
 久世大和守(廣興、關原藩主)
 内藤紀伊守(信親、村上藩主)
 青山下野守(忠良、篠山藩主)
 酒井左衛門尉(忠毅、庄内藩主)
 小笠原左京大夫(忠微、小倉藩主)
 松平掃部頭(頼升、守山藩世子)
 松平備後守(前田利義、大野寺藩主)
 榊原式部大輔(政恒、高田藩主)
 堀田攝津守(正衡、佐野藩主)
 大久保加賀守(忠繁、小田藩主)

將軍大廣間
渡御
譜代諸侯交
代寄合高家
等年賀

在國在邑病
氣幼少諸侯
目ノ使者太刀
錄獻上

將軍白書院
出御

安政元年正月元日

渡御、御襖老中開之、御次間御譜代大名・外様萬石以上之内、交替寄合出禮之分、(表脱力)高家・御留守居・大御番頭其外諸大夫・法印法眼之醫師奥醫師 狩野董川・布衣并寄合・御番衆・諸役人、一同御禮、相濟入御、

但、諸大夫・法印法眼之醫師迄、吳服拜領之、且、御目見以上之面々にも、御流被下之、
一在國在邑病氣幼少之面々も、名代之以使者御太刀目錄獻上之、大廣間は老中出席、御奏者番請取之、

○溫恭院殿御實紀・安政年錄、マタ本書ト略同一内容ノ記事ヲス。

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

正月朔日、

一御白書院

出御、

御先立

御太刀

御刀

阿部伊勢守

御上段 御着座、

水戸中納言殿

松平加賀守

松平越後守

松平越前守

松平相模守

右、水戸殿加賀守順々被出席、御禮御太刀目錄伊勢守披露、直ニ

御左之方被着座、次ニ越後守・越前守御太刀目錄持參、御敷居之内ニ御禮、

御左之方着座、相模守ハ御太刀目錄持參、御敷居之内ニ置、外ニ御禮、

御左之方着座、

御太刀目錄何も御奏者番引之、

御盃

御吸物

御捨土器

水戸殿給仕

安政元年正月元日

水戸侯及大
廊下諸侯
年賀太刀目
錄獻上

安政元年正月元日

加賀守給仕

越後守給仕

越前守給仕

相模守給仕

右、何も吸物出、

御酌

御加

御前に被 召上、御加有る、其御盃三方ニ載之、上カ二疊目御酌控在之時、水戸殿出座頂戴、加有る、盃を持御次間に被退時、伊勢守取之、三方ニ載之、御酌に渡之、御前に被 召上時、中座有る御禮、被歸座、御加有る、御控之節、

吳服臺出、

三疊目之上より四疊目にかけて、南北に長く置、

御加有る、其御盃三方ニ載之、上より三疊目之下御酌控在之時、加賀守出座頂戴、此節、數之御土器出、

加賀守歸座之節、

明三方引、

吳服臺出、

四疊目之中より五疊目にかけて、南北に長く置、

御前に有之數之御土器ニ被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、四疊目御酌控在之時、越後守出座頂戴、歸座之節、

吳服臺出、

御敷居之内二疊目、東西に長く置、

御前に有之數之御土器ニ被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、四疊目御酌控在之時、越前守出座頂戴、歸座之節、

吳服臺出、

御敷居之内二疊目、東西に長く置、

御前に有之數之御土器ニ被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、六疊目御酌控在之時、相模守出座頂戴、歸座之節、

吳服臺出、

御敷居之外、東西に長く置、

安政元年正月元日

尾張紀伊兩
侯ノ使者太
刀目錄獻上

安政元年正月元日

一六

右畢の御銚子入、御吸物等引之、過る何レも御禮、年寄共御取合申上之、退座、畢る御褥敷之御刀掛出之、

一尾張中納言殿紀伊中將殿、名代之使者を以御太刀目錄獻上之、伊勢守披露、

御太刀目錄何も御奏者番引之、

數之御土器

御捨土器

御酌

御加

御前に被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、四疊目御酌控在之時、

松平 阿波守

松平 讚岐守

京都に御使御暇後ニ候得共登城有之

右、壹人宛御太刀目錄持參、御敷居之内ニ御禮、御盃頂戴、吳服拜領、

御太刀目錄御奏者番引之、

阿波守

吳服臺出、

讚岐守

吳服臺出、

何も御敷居之内ニ疊目、東西に長く置、

御前に有之數之御土器ニ被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、六疊目御酌控在之時、

松平 三河守

松平 左京大夫

松平 隱岐守

井伊 掃部頭

松平 攝津守

松平 肥後守

松平 大學頭

頻

松平 播磨守

堀田 備中守

松平 下總守

一七

大廣間溜間
詰諸侯年賀
上太刀目錄獻

安政元年正月元日

安政元年正月元日

一八

松平 兵部大輔
 松平 越中守
 松平 民部大輔
 藤堂 大學頭
 初め 松平 宮内大輔
 初め 酒井 雅樂頭
 阿部 伊勢守
 牧野 備前守
 松平 和泉守
 松平 伊賀守
 久世 大和守
 内藤 紀伊守
 青山下 野守
 酒井 左衛門尉
 小笠原 左京大夫

右、壹人ツ、御太刀目録持參、御敷居之内ニ置、少將之内、侍從ハ外ニ御禮、御盃頂戴、
 吳服拜領、

御太刀目録何も御奏者番引之、

吳服臺出、少將ハ御敷居之内ニ疊目、侍從ハ外ニ置之、

但、東西に長く置、

松平 掃部頭
 松平 備後守
 榊原 式部大輔
 堀田 攝津守
 大久保 加賀守

右、壹人ツ、御太刀目録持參、御敷居之外ニ置、御禮、御敷居を隔る御盃頂戴、吳服廣
 蓋ニ御拜領、相濟る御銚子入、

御太刀目録何も御奏者番引之、

一大廊下ニ御奏者番並居、御太刀目録前ニ置、御禮、伊勢守披露、
 一大廣間

安政元年正月元日

一九

帝鑑問詰諸
 侯年賀太刀
 目録献上

將軍大廣間
 渡御

安政元年正月元日

渡御、

御先立

此節、伊勢守西之御縁より御向を通り、御襖障子之際ニ罷在、

但、外之年寄共々、西御縁を御向を通り、南之御縁類ニ着座、

御下段迄

出御、此時、御次御襖障子伊勢守ハ北之方、大和守ハ南之方、罷在、伊勢守披露、御次間、御譜代衆并

外様萬石以上之内、交替寄合出禮之分、表高家・御留守居・大御番頭、其外諸太夫・法印法眼

之醫師、但、奥醫師共、狩野董川始、布衣并若年寄支配之寄合・御書院番三千石以上之分ハ、御太刀目録前ニ置、諸役人・大御番・小

十人組、且又西丸之面々も一同御禮、相濟多御襖障子閉之、

一重多御上段

御着座、

御引渡、御土器組付、

御酌

御加

御前に被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、御中段西之方下より四疊目御酌控在之

譜代諸侯交
代寄合表高
家等年賀

阿部 伊勢 守

時、御酌代、

御酌

御加

御酌御下段二疊目控在之時、御勝手より御銚子出、二銚子ニ成、數之御土器出、松平主水正

始諸太夫兩人、御流・吳服頂戴、御勝手より又一銚子出、三銚子ニ成、萬石以上之諸太夫・

若年寄并御側衆・御留守居・萬石以下之諸太夫・法印法眼之醫師、但、奥之醫師共、狩野董川始、御流・吳服

頂戴、畢多御銚子入、

入御、

御先立

阿部 伊勢 守

一入御以後、

大友 式部

大澤 城之助

横瀬 左衛門

右、出座、吳服廣蓋ニ多頂戴之、

一重多七銚子ニ多、布衣之面々御流被下、九銚子ニ多、寄合御番衆・諸役人御流被下、御同朋

安政元年正月元日

表高家吳服
頂戴

安政元年正月元日

頂戴、畢る一銚子板縁以下、

右、罷出、御流頂戴、御銚子入、

一御白書院御次間、御小性組之面々並居、一同御禮、

觀世太夫

久志本準人(表御番醫師)

久志本右近(表御番醫師)

久志本左京

後藤

本阿彌

狩野

吳服師

幸阿彌

御扶持人

諸職人

一八頭之御杉戸際、

中條中務大輔(信濃、高家)

島山民部大輔(生徳、高家)

右、御太刀目錄前ニ置、御禮、

一御黒書院御勝手之方ニ、新御番組頭・表御右筆組頭・御膳奉行・新御番・奥御右筆・表御右筆

並居、一同御禮、

一大廣間御流頂戴之内、御白書院御縁頗ニ向、

宮原彈正大弼(信濃、高家)

武田大膳大夫(信濃、高家)

由良播磨守(真時、高家)

宮原攝津守(信濃、高家)

織田大藏大輔(信濃、高家)

武田左京大夫(信濃、高家)

横瀬美濃守(信濃、高家)

織田淡路守(信濃、高家)

高家吳服頂戴

安政元年正月元日

安政元年正月元日

二四

土岐出羽守(領水、高家)
 六角越前守(廣義、高家)
 京極丹後守(高福、高家)
 今川駿河守(高親、高家)
 有馬兵部大輔(廣業、高家)
 品川式部大輔(兵實、高家)
 戸田日向守(兵範、高家)
 由良信濃守(貞時、高家)
 大澤右京大夫(基綱、高家)
 中條中務大輔
 畠山民部大輔

在國在所諸
侯ノ使者太
刀目録獻上

右、壹人ツ、吳服臺ニ頂戴、伊勢守出座、

一入御以後、大廣間三之間ニ在、在國在所之面々名代之使者、御太刀目録獻上之、御奏者番請
取納、年寄共列座、

一出御以前、兎之御吸物御酒、於中之間、老中・若年寄中頂戴之、大目付相伴、

一松平讚岐守京都

御使御暇後ニ候得共、今日登城、御禮有之、右ニ付、着座ハ不致、御禮後直退散被致候、

一出御、四ノ貳寸前、

一入御、九半ノ三寸五分前、

一明二日、如例年御規式有之、

〔松平忠固日記〕○子爵謙澤
第一所藏本

正月朔日、

一年始之御規式、如例年有之、御土圭六半ノ三寸前、附人ニ在、若年寄月番(本住通也)安藝守出宅承之、

出宅、鬘斗目
半橋、

一登城、六半打壹寸廻り、

一出懸、例年之通、今日計燒火之間廊下ニ在、御奏者番ハ一寸膝突及會尺、中之間諸役人ハ之、
乍立及會尺、

一御機嫌、御側衆(久保忠海)駿河守(河守)何之、

一持出物、(東條、與在頭)平左衛門(渡)、

一昨日持歸候宅留濟大坂狀目録(茂助)取扱、持出、同人(渡)、

安政元年正月元日

二五

登城

年賀言上

- 一同斷駿府狀目錄權之丞取披、持出、同人に渡、
- 一同斷甲府狀目錄孫次郎取披、持出、同人に渡、
- 一松平淡路守家來、脚方手迄内意申聞候書付二持出、同人に渡、
- 一十二月中御禮書・御規式書等十五折一通持出、同人に渡、
- 一相互ニ居形ニある、嘉儀申述之、
- 一於御用部屋、御喰摘頂戴之、
- 一益御機嫌能被遊
- 御超歲恐悅之旨、一同泊方以（金川俊明、則家）伊豆守申上之、
- 一若年寄一同罷出、恐悅并祝詞被申述之、筆頭を被及挨拶、御側衆も一同罷出、右同斷、
- 一今日、晴光院様御住居 誠順院様御守殿に罷出候段奉、若年寄越中守・（本多忠徳）出羽守に申達之、
- 一明日、松榮院様 溶姫君様御住居、線姫君様御守殿に罷出候段奉、若年寄但馬守・（遠藤胤統）安藝守に申達之、
- 一御膳濟ニある、一同下部屋に相越、直垂ニ著替、出懸、一同中之間屏風仕切内にて一同著座、兎御吸物頂戴之、御酒三獻頂戴、相濟、茶出ル、若年寄・大目付も、例之通頂戴有之、畢る一同入懸ケ、大目付進ミ、御禮申聞候付、一寸膝突及會尺、御用部屋に出ル、

- 一表宜旨申上候、若年寄月番が月番に申聞之、
- 一御錠口明 出御之旨、泊方因幡守申聞、一同奥に廻り、太公望御杉戸際に列居、但、中啓持之、
- 一御座間御上段 御著座、御側衆左右ニある、助大和殿初一同、御兩卿方御前ニある中禮いとし、
- 二之間御縁頬に罷出、大和殿御柱際、其次非番順々著座、月番伊勢殿と一同之跡より被相越、獅子御杉戸内ニある、田安殿御太刀目錄御側衆より被受取、紀伊守殿前に被控、疊目折本紀伊守殿被爲見、助大和殿被伺 御前、伊勢殿に會尺ニある、田安殿御太刀目錄被持出、披露席に被披候頃、三人目（松平定室、老中）和泉殿が田安殿に御會尺、御同人御出禮、伊勢殿披露、御左之方に被著座、伊勢殿御正面御障子際ニある中禮被致被引、最前之處ニある、刑部卿殿御太刀目錄被受取、田安殿御太刀目錄若年寄引候と、伊勢殿御太刀目錄被持出、次第前同斷、刑部卿殿御出禮、披露相濟、中禮有る被引、御規式書・中啓等被持、月番座に被參、大和殿と被代合、
- 一夫が刑部卿殿御太刀目錄若年寄引候る、月番より御給仕に會尺有之、御熨斗始順々出御、兩卿方御盃・吳服頂戴、都る御次第書之通り相濟、御兩卿吸物引候と、御盃・吳服頂戴、忝被存旨、月番御取合、御兩卿被退座、御熨斗三方引候と、一同中啓持之、御縁頬に罷出、御目見申上、目出度と 上意有之、益御機嫌能被遊御超歲恐悅之旨、上座を被申上、末座を引、一夫が一同 御成廊下に相越、月番伊勢殿ニて東坡御杉戸前 御先立席に著座、非番一同御

安政元年正月元日

二八

控所を後ニ列居、御側衆 御先立ニシテ、出御之節平伏、月番伊勢殿 御先立ニシテ、御黒書院御上段ノ竹之御廊下通、御白書院ノ 出御、一同 御跡ニ付相越、月番御上段裏ノ被披平伏、一同ニシテ波之間ニ行形ニ下ニ居、御帳臺ノ被爲 入候節一同平伏、夫々月番始一同、西御縁ニシテ中禮いしし、助大和殿ニシテ御下段御柱際著座、一同助月番之次ニ斜ニ列居、月番伊勢殿ニ御下段舞羅戸際ノ御規式書中啓被置、鴈ノ御杉戸御闕際ノ被相越、水戸殿御太刀目録御奏者番より被受取、紀伊守殿前ノ被控、疊目折本被見之、助大和殿被伺 御前、伊勢殿ノ會尺、御太刀目録被持出、疊目ニ被置、鯉ノ御杉戸前ノ被披候と、備前殿（後野忠興、著也）ノ水戸殿ノ御會尺、御出禮披露濟シ、月番御障子際御正面ニシテ中禮して被引、次松平加賀守太刀目録伊勢殿被受取、次第前同斷被持出、疊目ニ被置被披候と、加賀守出座披露相濟、前同斷中禮、直ニ月番座ノ被參、大和殿と被代合、次松平越前守・松平相模守順々御太刀目録持參出禮、相模守太刀目録御奏者番引候と、月番若年寄ノ會尺、御盃御吸物等順々 御前ニ出、御規式書之通相濟著座之、吸物引候と、御盃・吳服頂戴、忝被存旨、月番伊勢殿御取合相濟シ、水戸殿始退去、月番、助月番と月番座と代合、夫々 御褥御刀懸出候と、尾張殿・紀伊殿名代之使者を以、御太刀目録獻上之、順々伊勢殿披露相濟候と、伊勢殿月番座ノ被參、大和殿と被代合、紀伊殿引太刀濟シ、非番を黒鷲御杉戸際ノ退、列居、

一 夫々伊勢殿若年寄ノ會尺ニシテ、數之御土器等出、松平阿波守初順々罷出、御太刀目録持參、御禮申上、御盃・吳服頂戴有之、表侍從之相濟、伊勢殿初順々出禮、

但、松平宮内大輔出禮之頃、紀伊守殿、伊勢殿と被代合、月番座ノ著座、備前殿出禮、吳服頂戴相濟、紀伊守殿と被代合、伊勢殿ニシテ御禮後小用等相濟、直備前殿と被代合候事、

一 自分見計、舞羅戸際ノ中啓・御次第書共、差置、御太刀目録を持控居、和泉殿吳服頂戴ニ被出候と、月番之後南向ニ控居、和泉殿被引候と、直月番之右之方ニ御太刀目六持進ニ出懸居、御銚子御下段下より一疊目ニ下リ候頃罷出、御下段下より一疊目、御式居際 御正面釘隠通ニ御太刀目録置之、御闕外一疊目ニシテ御禮申上之、右之方ノ摺寄、御長柄之口ニ載有之御盃を取頂、ツガセ頂、御盃を持引、

但、此節、御太刀目録御奏者番持引、

一 右御盃西御縁ニシテ、中啓之上ニ載セ置、又月番之右之方ニ出居、御勝手之方々吳服臺中奥御小性持出、御縁ノ置候と、御障子之方々貳疊目ニ出、但、此時中啓不持罷出、頂戴いしし引、時服中奥御小性引之、御土器を西御縁御屏風陰ニシテ、御同朋頭出居候ニ付相渡、中啓・御次第書持直、御數寄屋ノ相越、小用相辨、黒鷲御杉戸際ノ復座、

但、同列衆頂戴相濟、申合ニシテ御數寄屋ノ參リ、小用等相辨、其節西御縁ニシテ二重メニ付、中禮無之、波之間

安政元年正月元日

二九

一本襖を御目付明候に付、相越、

一夫が四品以上、御規式書之通順々相濟、高家數之御土器引、伊勢殿・助大和殿と月番座と代合、櫻之間 御先立席に被相越著座、一同を右を上ニ居直、櫻之間の方ヲ向、斜ニ著座、大廊下末之御目付より伊勢殿に會尺、同人が助大和殿に會尺ニある、同人御案内之御時宜被致候と、大廣間に 渡御、通御之節平伏、夫が月番 御先立、非番一同 御跡ニ付相越、大廊下下之御部屋前ニある御奏者番並居、太刀目錄前ニ置、御禮、月番伊勢殿一寸下居られ、何レも御年頭と披露、

一大廣間に 出御、御先立伊勢殿、御上段裏ニ被披、一同御跡ニ付相越、行形ニ控、御帳臺に被爲 入候節平伏、夫が一同西御縁通り相越、月番伊勢殿・助大和殿ニを西御拭縁ニ著座、非番ニを西御拭縁鶴溜角之邊ニ中禮、御正面ニあるも中禮いとし、南御縁溜詰之次に著座、筆頭が御次之方被見廻、宜と月番に會尺、

但、右會尺ニある、直ニ御襖ニ被懸候事ニ候得共、御小用有之候に付、程合宜節、御帳臺内が御側衆會尺を曲尺ニ兩人共被立、御襖際に相越、懸金を被外候上、御帳臺御側衆に會尺、

一御下段 出御之節、御襖被開之、諸大夫之面々其外一同、御規式書之通並居、御禮申上、月番披露、此節一同手を突罷在、右御禮相濟、御襖伊勢殿・大和殿被閉之、重る御上段 御著座、

將軍大廣間
出御

伊勢殿ニを月番座、大和殿ニを同列之並ニ被入、奥之衆不殘引候と、伊勢殿被伺 御前、西御縁之方若年寄に會尺ニある、御引渡等順々出、御規式書之通相始、夫が萬石以上・法印法眼之御醫師迄、御規式書之通御流頂戴、畢る御銚子入、伊勢殿御下段下が貳疊目に被出、御案内之御時宜被致、猶又西御縁之方に被寄中禮、夫が 御先立席に被相廻、入御、

一入御相濟、鶴溜之高家頭を□候頃、助大和殿御柱際月番座に著座、大目付會尺ニある、表高家御下段に罷出、御次第書之通吳服頂戴相濟、大和殿又同列並ニ復座、溜詰恐悅被申上、筆頭が挨拶有之、溜詰退散、夫が筆頭が詰衆に會尺、詰衆退散、夫が紀伊守殿ニを鶴溜に被殘、外一同ニ御用部屋に引、

但、此節、布衣之面々御流頂戴之内、□合壹人ツ、鶴溜に著座有之に付、最初紀伊守殿居殘、如本文、

一入御後、代合、於御用部屋、御雜煮并御料理頂戴之、

一於御白書院、高家吳服頂戴有之、月番伊勢殿出座被致候、

一大廣間御流濟寄候旨、御同朋頭申聞候と、鶴溜に一同出席、御庭之方を上ニいとし列座、御流頂戴不殘相濟、大目付使者宜旨申聞、一同三之間に相越、御襖之方上ニ千鳥のけよ伊勢殿・和泉殿・大和殿御襖之方、備前殿・自分・紀伊守殿板縁之方に着座、在國・在邑之面々名代之使者が、御太刀目錄御奏者番請取之、如例相濟る、大目付より使者是迄之旨申聞候と、

一同立、引懸、御奏者番に一人ツ、順々會尺いとし、四之間通引、夫々一同下部屋に相越、熨斗目半襦ニ著替いとし、御用部屋に出ル、

一御規式濟、恐悅并御盃・時服頂戴之御禮、泊方以伊豆守申上之、

一出御、四に貳寸前、

一入御、九半に三寸五分前、

一御召替、五打貳寸廻り、

一押付表宜旨申上、五半打五分廻り、

一表揃申上、五半打貳寸五分廻り、

一御吸物出、五半に四寸五分前、

一惣濟、八打五寸廻り、

一退出、御廣敷に罷出候段、月番より御留守居佐野日向守(政行)に、以丹阿彌被申達之、

一御用濟、月番計使被遣、一同退出、

一夫々御廣敷に一同參上、老女衆に逢、年頭御祝義、益御機嫌能被遊、御超歲恐悅之旨、筆頭ニ被申上、御喰摘出、順々頂戴之、畢、退散、例之通老女衆送有之、

○正月二日・三日、諸侯ノ參賀ニ關スル史料ヲ次ニ收ム。

將軍夫人ニ
年賀言上

〔西丸日記〕

○維新史料編纂會所藏本

正月二日、

一今已上刻、御白書院に 出御、

一水戸(德川齊昭、前水戸藩主)前中納言殿名代之使者ヲ以、御太刀目錄被獻之、老中披露之、

右、年頭之御禮、御太刀目錄持參申上之、吳服臺ニ拜領之、畢、大廣間に 渡御、

著座

松平 左兵衛督(吉井信和、赤田藩主)

松平 安藝守(後野齊繼、廣島藩主)

細川 越中守(曾根、熊本藩主)

松平 大膳大夫(毛利慶親、萩藩主)

丹羽 左京大夫(長谷、二本松藩主)

松平 上總介(後野慶順、廣島藩主)

旗立 花飛驒守(後野、柳河藩主)

伊達 大膳大夫(宗徳、宇和島藩主)

右、同斷御禮、壹人ツ、御太刀目錄持參申上之、御盃頂戴、吳服臺ニ拜領之、

將軍白書院
出御

大廣間渡御

安政元年正月元日

丹羽越前守(長岡二本松藩主)

喜連川左馬頭(殿氏喜連川藩主)

右、同斷御禮、壹人ツ、御太刀目録持參申上之、御盃頂戴、吳服廣蓋ニ由拜領之、

右、同斷御禮、於御下段中央申上之、御太刀目録御奏者番披露之、於御次間吳服臺ニ由拜領之、畢由御下段迄 出御、御襖老中開之、御次間外様萬石以上・表高家・諸大夫其外諸役人一同 御目見、相濟由 入御、

但、諸大夫之面々、吳服拜領之、何處御流頂戴之、

一在國・在邑・病氣・幼少之面々名代之以使者、御太刀目録獻上之、大廣間は老中出席、御奏者番請取之、

正月三日、

一今已上刻、櫻之間に

立御、萬石以上無官之面々・大廊下萬石以下無官之面々、後座ニ柳原式部大輔・奥平大膳大(昌服・中津藩主)夫・井伊兵部少輔(直經、與政藩主)家來並居、御禮申上、畢由入御之節、御白書院御次御襖老中開之、御敷居際に立御、

將軍櫻之間
出御

上京 下京 大阪 堺 奈良

伏見 過書 銀座 朱座

五ヶ所割符之者共、當所町年寄惣町中、

右之者共一同平伏、過由御納戸構岩松滿次郎御目見、相濟由 入御、

○溫恭院殿御實紀、安政年錄、マタ本書ト略々同一内容ノ記事ヲ載ス。

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

正月二日、

一御白書院

出御、

御先立

阿部伊勢守

御太刀

御刀

御上段 御着座、

一水戸前中納言殿名代之使者ヲ以、御太刀目録獻上之、伊勢守披露、

御太刀目録御奏者番引之、

安政元年正月元日

右、御太刀目錄持參、御敷居之内ニ置、外ニ御禮、御次間迄退去、

御太刀目錄御奏者番引之、

吳服臺出、東西ニ長く置、

重る出座、頂戴之、

一大廣間

渡御、

御先立

御上段 御着座、

阿部伊勢守

大廣間詰諸
侯年賀太刀
目錄献上

類

松平安藝守

給仕 細川越中守

給仕 松平大膳大夫

給仕 丹羽左京大夫

給仕 松平上總介

給仕 立花飛驒守

給仕 立花飛驒守

初

右、壹人ツ、御太刀目錄持參、御下段御敷居之内ニ御禮、直ニ御左之方着座、

御太刀目錄何も御奏者番引之、

御引渡 御土器
組付

御捨土器

着座之面々にも引渡、足打ニ出之、

御酌

御加

御前に被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、御下段五疊目御酌控在之時、

松平安藝守

出座頂戴、歸座之節、吳服臺出、東西ニ長く置、

但、少將を五疊目、侍從を六疊目ニ置之、二人目頂戴有之内、

數之御土器

右、順々頂戴之、畢る御銚子入、御引渡取之、數之御土器ハ其儘置之、年寄共御取合申上之、着座之面々退去、過る御銚子出、

御酌

御加

最前より 御前ニ有之數之御土器ニ被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、御下段上ノ三疊目御酌控在之時、

伊達 大膳 大夫

丹羽 越前 守

右、壹人ツ、御太刀目録持參、御下段御敷居之内ニ置、其身ハ板縁ニ御禮、則御盃頂戴、吳服廣蓋ニ御拜領之、畢御銚子入、

御太刀目録御奏者番引之、

一 煩喜連川左馬頭御下段中央ニ御禮、御太刀目録御奏者番持出、御中段ニ置之披露、退座、於御次間、吳服臺ニ御拜領之、

吳服臺

但、年寄共御襖障子之際に着座、左馬頭頂戴、畢年寄共最前之席に着座、

御下段迄

出御、此時、御次之御襖障子伊勢守ハ北之方、備前守ハ南之方、罷在、伊勢守披露、御次間ニ外様萬石以上、表高家并諸太夫、其外御番衆何レも三千石以上之分、御太刀目録前ニ置、諸役人、一同之御禮相濟、御襖障子

外様諸侯表
高家等年賀

閉之、

一重御上段

御着座、

御引渡 御土器
組付、

御酌

御加

御前に被 召上、御加無之、其御盃御銚子ニ載之、御中段西之方下より四疊目御酌控在之時、御酌代、

御酌

御加

御酌下段二疊目控在之時、御勝手より一銚子出、諸太夫兩人出座、御流并吳服頂戴之、又一銚子出、三銚子ニ成、諸太夫相濟、御銚子入、入御、

御先立

阿部 伊勢 守

一入御以後、

安政元年正月元日

表高家吳服
頂戴

安政元年正月元日

織田(信實、表高家)次郎
 日野(資政、表高家)主
 前田(長徳、表高家)主
 上杉(義正、表高家)三郎
 長澤(資實、表高家)内記
 吉良(義方、表高家)源六郎
 前田(長政、表高家)鞆負
 中條(信汎、表高家)兵庫
 畠山(義貞、表高家)庸藏
 初(長頼、表高家)前田愿太郎
 初(家近、表高家)宮原保之丞
 初(信久、表高家)織田人太郎
 初(信實、表高家)武田采女

右出座、吳服廣蓋ニ御頂戴之、
 一重多七銚子ニ御、布衣之面々御流被下、九銚子ニ御、御番衆御流被下、御銚子入、

一御白書院御次間、

澁川(天文方)助左衛門
 山路(天文方)彌左衛門
 御代官
 安西(天工頭)久次郎
 無官醫師
 狩野(立骨、繪師)永徳
 狩野(守經、繪師)探原
 足立(天文方)左内
 山路(天文方)金之丞
 澁川(天文方)膳司
 吉川富之丞
 松田(天工頭)彌太郎
 松嶋(天工頭)重左衛門
 大野(天工頭)藤十郎

安政元年正月元日

在國在所諸
侯ノ使者大
刀目錄獻上

右並居、御禮御奏者番披露、

一大廣間三之間ニ在、在國・在所之面々名代之使者、御太刀目錄獻上之、御奏者番請取納、年寄共列座、

一御掃初御規式有之、備前守勤之、大奥關播磨守勤之、

一右ニ付、御年男備前守、月番本庄安藝守、五ニ三寸前之附人ニ登城、

一出御、四ニ五分前、

一入御、四半ニ三寸五分前、

一明三日、如例年御禮有之、

三日、

一御白書院

出御、御長袴、

御先立

御刀

阿部伊勢守

落連歌師
諸職人

萬石以下無
官者年賀

大廊下溜迄

出御、着座伊勢守、無官之面々、但、三千石以上之、御太刀目錄前ニ置、小普請組支配之面々、三千石以下之諸大夫、並居、

御禮伊勢守披露、後座ニ榊原式部大輔・奥平大膳大夫・井伊兵部少輔家老並居、御禮御奏者番披露、

一御白書院御次之御襖障子開之、御縁ニ江戸町々年寄、御小性組御番所より落縁ニ、

上京 下京 大坂 堺 奈良 伏見 過書 銀座 朱座

五ヶ所割符之者共、當所町年寄惣町中、

右並居、御禮御奏者番披露、

御先立

阿部伊勢守

一御連歌間北之御縁通ニ在、

煩岩松滿次郎

右、進物前ニ置、御禮御奏者番披露、畢、入御、

一萬石以上無官面々、

御太刀目錄 石川重之助

同 井上良之助

萬石以上無
官者年賀

將軍大廣間
渡御

番披露相濟、御正面ニ中禮之上、月番座大和殿と被代合著座、右使者引太刀相濟、非番
黑鷲御杉戸際に著座、夫々松平左兵衛督御太刀目錄持參、御闕之内ニ置、外ニ御禮、退去、
引太刀相濟、吳服臺出、重の出座、頂戴相濟、退去、夫々伊勢殿月番座助大和殿と被代合、
非番右を上ニ居直り罷在、伊勢殿ニ櫻之間、御先立席に著座、大廊下末之御目付に會尺
ニ、伊勢殿大和殿に會尺、同人被進出、御案内之御時宜被致、大廣間に、渡御、其節平
伏、月番、御先立、非番御跡付ニ、伊勢殿大廣間御上段裏に被披、非番大廊下末ニ行形
ニ下ニ居、御帳臺に被爲、入候節平伏、伊勢殿始御縁頰に相越、鶴溜之角ニ中禮、御正
面ニ中禮之上相廻ル、

大廣間詰諸
侯等賀太
刀目錄上

一御廣間御上段、御著座、月番御柱際、非番二之間南御縁に、御庭を後ニ溜詰之次に順々著
座、月番被伺、御前、大目付に會尺ニ、松平安藝守に立花飛驒守迄、壹人充御太刀目錄持
參、御下段御闕之内ニ御禮、直ニ、御左之方順々著座、御奏者番壹人充御太刀目錄引之、
末座迄著座相濟、御太刀目錄引切候と、月番若年寄に會尺、夫々御規式書之通、いづれも
御盃・吳服頂戴、著座之面々引渡、引候と、月番御下段被出、御盃・吳服頂戴、難有旨御取
合、上意有之候と、月番後座著座之面々一同引、又月番若年寄に會尺ニ御銚子出、御
下段疊目に控候時、大目付に會尺、四品之面々御太刀目錄持參御禮、御盃・吳服頂戴、濟

外様諸侯表
高家等年賀

多敷之御土器引候と、伊勢殿大和殿例之通御下段に被出、御襖被開之、
一御下段迄、出御、御次間ニ外様萬石以上・表高家并諸大夫、其外御番衆、何も三千石以上之分
御太刀目錄前ニ置

諸役人一同御禮、此時月番何も御年頭と披露、上意有之、御襖被閉之、

一重の御上段に、御著座、月番御柱際、助大和殿非番之列ニ被入著座、御上段御小性等御帳
臺に引候と、直月番若年寄に會尺、伺、御前無之、御規式書之通御引渡始、其外出揃、
御前に被、召上、御配代御下段ニ控在之時、御勝手より一銚子出、二銚子ニ成候と、月番に
大目付に會尺ニ、諸大夫之面々兩人宛罷出、不殘相濟、御銚子入、月番伊勢殿御下段に被
出、御案内之御時宜被致、直、御先立之席に被相廻、入御、

一入御後、鶴溜之高家手を上ヶ候頃、昨日之通助大和殿御柱際に著座、同人進物番に會尺、吳
服臺出、表高家頂戴、濟の助大和殿非番之列ニ被入著座、溜詰恐悅申上、筆頭ニ被及挨拶、
退去、筆頭詰衆に會尺、詰衆退散、直一同引、大和殿鶴溜に被殘著座、夫々七銚子ニ成、
布衣之面々御流頂戴、九銚子ニ成、御番衆御流頂戴、都御規式書之通相濟、今日を代り合
御料理頂戴之間合無之、濟寄ニ一同鶴溜に相越、右を上ニ列居、

一夫々大目付使者宜旨申聞、一同大廣間三之間に相越、二之間御闕際に御襖の方を上ニして、
筆頭千鳥りけし伊勢殿・和泉殿・大和殿御襖の方、備前殿・自分・紀伊守殿御縁の方ニ著座、

在國在邑及
病幼諸侯使
者太刀目録
獻上

安政元年正月元日

四八

在國・在邑・病氣・幼少之面々使者太刀目録請取、濟る使者是迄之旨大目付申聞候と、一同立引、々懸、御奏者番に壹人宛下ニ居會尺、大廣間・四之間通、柳之間・紅葉間前通り引、々懸、芙蓉間に列座、

- 一出御、四に五分前、
- 一入御、四半に三寸五分前、
- 一御召替、五半打三寸廻、
- 一表揃申上、四に三寸前、
- 一惣濟、九に二寸五分前、
- 一於御用部屋、御雜煮并御料理頂戴之、
- 一御規式濟恐悅、一同泊方以織部正申上之、(當房、御參)
- 一明三日、判初用候筆、部屋番持出、以坊主差出候に付、明日入用之旨申付、渡之、
- 一御用濟一同退出、
- 三日、
- 一如例年、今日無官之面々年頭御禮有之、月次五ツ御太鼓なる出宅、殿斗目半襦、
- 但、出懸、直下部屋なる長襦著替いゑし候、

登城

無官者等年
賀

安政元年正月元日

四九

- 一登城、五半に二寸前、
- 一御機嫌、御側衆(五田重吉)隱岐守より伺之、
- 一御用部屋なる御喰摘頂戴之、
- 一今日之御次第書、御謠初御次第書共二折持出、鍵次郎に渡、
- 一今日 出御前、五十三間なる御馬 御召初有之事、
- 一表宜旨申上候段、若年寄月番安藝守が月番に申聞之、
- 一御錠口明 出御之旨、御側衆大内記申聞、一同奥に廻り、月番伊勢殿東坡御杉戸前 御先立席に著座、非番御控所前如例著座、
- 一出御之節平伏、月番 御先立、非番ハ御跡に付相越、御黒書院竹之御廊下通、御白書院御上段裏に月番被披、非番波之間に如例一寸控、御帳臺に被爲 入候節平伏、夫ハ西御縁通り、中禮無之相越、今日ハ御白書院出禮之者無之、御帳臺ニ 御見合被遊候事、御襖之和泉殿・紀伊守殿ハ直御下段御柱際に著座、月番初手明之非番櫻之間へ相越、月番御障子際に著座、非番ハ御床を後ニ御塗縁際に月番と向合著座、月番大廊下之方被見渡、備前殿に會尺、同人より御襖之兩所に會尺、紀伊守殿 御正面なる中禮、鯉之御杉戸被閉候と、和泉殿 御正面に被出、御帳臺之御側衆に會尺被致、鷺之御杉戸際へ立御、手を突謹々罷在、大廊下無官

安政元年正月元日

五〇

之面々其外並居、御禮、月番何も御年頭と披露、御奏者番・三家老之披露相濟、御立戻被遊候と、和泉殿・紀伊守殿御襖如例被相勤、御下段に立御、町年寄其外御禮、畢る 入御、

但、月番ハ御次一同御禮之内、黒鷲御杉戸際ニ被致中禮、急き西御縁通り細廊下に被相越、入御之節被致 御先立候、

篤と 入御之御様子ニある、和泉殿・紀伊守殿にも被立、一同引、中間に伊勢殿被待合、一同下部屋に引、半襦に著替ひまし候、

水戸藩、藩士ニ令シテ豫メ米國艦隊再來ニ對スル幕府ノ方針ニ基ツキ、必戰ヲ期シ、武備ニ精勵セシム。

〔水戸藩達〕○公爵徳川團順所藏本
國事記所載

○正月元日藩士へ

甲寅正月元日、一役達、○松字
事記
元日、御達、○松字
日記

諸向に

去夏中渡來之異國船、又々當年渡來可致旨、書翰指上候に付、相房邊御備并内海御警衛向等、

必戰ノ覺悟
ヲ持スベシ

元費ヲ節シ
武備ヲ專ニ
スベシ

於 公邊精々御世話被爲在、尙去冬中被仰出候振も有之上ハ、一統別る致覺悟、忠勤可心掛筈之處、當年異船渡來いまし候とも、先ハ平穩ニのミ事濟可申哉と見越候多、致弓斷候向も有之趣相聞、如何之事ニ候、異船渡來之遲速、亂妨之有無ハ、彼方心得ニ有之儀、此方におゐては、詰ル處必可爲接戰覺悟ニある、十分ニ御備相立不申候あり、公邊并御家之御瑕瑾而已ニえ無之、神國之御恥辱ニ相成候儀ニ候間、在江戸之面々并在水戸年番之面々も、今日にも兩君様急御出馬被爲在候ハ、一同甲斐々々敷御供仕、於 御馬前忠勤相勵、扱又御領中何れ之浦々に黒船渡來も難計候間、兼る御備被仰付候族を勿論、其外一統防禦筋之儀精々心掛、衣食住等ニ付、花美無用之費可成丈相省き、實用之儀武備專一ニ相嗜、年來之御恩澤ニ奉報候様可仕旨、被 仰出候、
但、御家中次男三男等を勿論、小役諸手代等之儀も、火急之出陣被 仰付族も可有之、且勳功之多少進退之剛臆等も、勿論夫々御沙汰可有之候條、平日篤ト相嗜、其節ニ至リ不覺悟無之様、可相勵候、

〔松字日記
水戸藩史料〕

〔水戸原田成徳日記〕○公爵徳川
團順所藏本

正月十二日ハ十六日迄、日々御秘書へ出ル、（元カ）
正月二日達、去夏中渡來之異國船○中
略、

安政元年正月元日

五一

右之通、支配、末々迄可被相達候、

○参考

〔松字日記〕○水戸藩士西野宣明日記

子爵温恭院殿三所藏本

正月元日、御側向海防御秘書掛被仰付、栗田權太夫・經島伊左衛門・關十兵衛・伊藤十郎兵衛・横山兵藏・加治將次郎・平松茂助・原田兵介 以上頭取ニテ、原滋衛門・三浦贊男・安島彌次郎 右三人御小納戸ニテ被仰付也、右、贊男・彌次郎頭取再勤被仰付也、

異國船萬一内海へ乗込、異變之儀も有之候節ハ、兩君様急御登 城被遊候間、夜中ハ早拍子木、晝ハ急辻觸相廻候間、兼お相達置候通り、火事具指袴着用、非常御行列付之通相立、御供可仕旨、被仰出候事、

老公過日異國船の來る事をうれしくおほしめして、御詠草御下被遊候也、三千年の先よりおもふあやうき汝今はうつ、小見る世なりけり、右ハ、兼々御歎息被遊候處、日夜御用談之餘、御染筆被下置所也、

御筆藏秘篋也、

臣 宣 明 押花

二日 寅 征夷大將軍德川家定 正二位○内大臣 賀正ノタメ高家由良貞靖 ○播磨守

宣下御 禮副使 ヲ京都ニ、嘉永六年十二月十六日、之ヲ命ズ。年頭代參ノタメ同土岐頼永 守 出羽 ヲ日光東照

宮ニ遣ス。

〔老中申渡〕○温恭院殿御實紀所載

○嘉永六年十二月十六日高家由良貞靖へ

京都御使

來年頭 禁裡江 御使可相務候、

右於芙蓉間、老中列座、和泉守申渡之、

〔老中申渡〕○維新史料編纂會所藏本

西丸日記所載

○正月二日高家土岐頼永へ

日光廿日 御名代

右被 仰付旨、於芙蓉之間、老中列座、伊勢守申渡之、

高家 由良 播磨 守
代 土岐 出羽 守
京極 丹後 守

〔幕府沙汰書 安政元年 温恭院殿御實紀〕

〔松平忠固日記〕○子爵温恭院殿所藏本

正月二日、○中 略、

一夫々大目付使者宜旨申聞、一同大廣間三之間に相越、二之間御闕際に御襖の方を上ニして、筆頭を千鳥りけよ、伊勢殿・和泉殿・大和殿御襖の方、備前殿・自分・紀伊守殿御縁の方、著座、在國在邑病氣幼少之面々使者太刀目録請取、濟る使者是迄之旨、大目付申聞候と、一同

安政元年正月二日

日光御名代

高家 由良 播磨 守

安政元年正月二日

五四

立引、々懸、御奏者番に壹人宛下ニ居、會尺、大廣間・四之間通、柳之間・紅葉間前通り引、々懸、芙蓉間に列座、

高家
代 土岐出羽守
京極丹後守

日光廿日

御名代可相勤候、

右月番被申渡、書付被相渡、相濟直一同下部屋に相越、半襦ニ著替、御用部屋に出ル、

〔幕府沙汰書〕

○東京帝國大學所藏本

正月七日、

御座間

京都御使
高家
由良播磨守
日光廿日 御名代
同 土岐出羽守

金五枚
時服貳

右就御暇 御目見、

但、播磨守に 御判物・御朱印・奉書・證文等、於羽目之間、老中列座、伊勢守相渡之、畢

由良土岐御暇登城

ゑ出羽守拜領物、於同席老中出席戴之、播磨守拜領物無之、出羽守に今日ハ御渡物無之、

○西丸日記・安政年録・溫恭院殿御實紀、マタ本書ト略々同一内容ノ記事ヲ載ス。

〔松平忠固日記〕

○子爵澤榮一所藏本

正月七日、○中

一御座間御上段 御著座、御側衆左右ニゐ、伊勢殿尙又女房奉書紀伊守殿に被相渡、月番始

一同二之間御縁に出、月番御柱際外如例著座、月番被伺 御前、三人目と泉殿に會尺、同人

より若年寄に會尺ニゐ、京都 御使之高家由良播磨守、日光 御靈屋 御名代之高家土岐

出羽守、順々罷出、月番披露御取合等、御座間書付之通相濟、出羽守引候と、月番獅子御

杉戶外ニゐ脱劍、紀伊守殿に女房奉書被受取、御前に被持出候と、非番一同太公望御杉戸

際に復座、伊勢殿にも被引、白鷺御杉戸際に假座、夫ハ御兩卿方 御對顔相濟、再御側衆左

右にて一同罷出、御目見例通相濟引、○中 畢引懸、月番と羽目間ニゐ、土岐出羽守拜領

物、由良播磨守に渡物等有之、外引、々懸、中之間大澤右京大夫御禮謁之、

但、羽目間と列座之格ニゐ、月番計ニゐ相濟、

安政元年正月二日

五五

由良土岐將軍ニ賜謁

土岐由良ニ拜領物渡物ヲ交附ス

安政元年正月二日

五六

〔伊勢日光〕
持參之留○内閣記録
課所蔵本

嘉永七寅年、

御服中也、

御靈屋に年始爲 御名代土岐出羽守被差遣候間、可被相談候、且又日光御門跡に三種二荷被進之候條、可被得其意候、恐々謹言、

正月

片
連判

三好阿波守殿〔長門日光奉行〕

御靈屋に年始爲 御名代土岐出羽守被差遣之候、且又日光御門跡に三種二荷被進之候、委細出羽守可爲演說候、此由可有洩達候、恐々不備、

正月十五日

連判

信解院

人馬徵發ノ
朱印狀

御朱印
人足八人馬五疋、從江戸日光迄上下可出之、是を彼地に土岐出羽守被差遣付る被下之者也、

嘉永七年正月十五日

右
宿
中

〔大程村〕
〔大程村〕
人足四拾五人、從江戸日光迄上下可出之、是を土岐出羽彼地に罷越付る相渡之者也、

嘉永七寅

正月

右
宿
中

〔大程村〕
此箱壹固御樽二荷、從江戸日光迄急度可持參者也、

寅

正月

右
宿
中

渡物書付

ツマ
渡物書付

正月十五日、

えめ此間 列座無之、

土岐出羽守

- 一 御意之書付 一通
- 一 御朱印 人馬 一通
- 一 奉書 三好阿波守に 一通

安政元年正月二日

五七

安政元年正月二日

五八

一奉書 信解院に

三種二荷 一宿次證文

一人足宿次證文

以上

一通

一通

一通

〔諸用留〕○内閣記録 課所藏本

土岐出羽守届申聞候書付、

正月十六日、

右、今朝日光表に發足之旨、以使者申聞之、

土岐出羽守

土岐出發

〔西丸日記〕○維新史料編纂會所藏本

正月廿四日、○中 略

御座間

日光廿日 高家 御名代

土岐出羽守

歸府

右、就歸府 御目見、

○神宮代參ノコト所見ナシ。蓋シ、前年大將軍徳川家慶薨去セシヲ以テ、本年ハ特ニ此 事行ハレザリシナラン。由良貞靖、將軍宣下御禮ノタメ參内ノコトハ、正月二十三日、賀

正ノタメ參内ノコトハ、同二十七日ニアリ。各條參看スベシ。

京都所司代脇坂安宅淡路守○ 龍野藩主 參内、正ヲ賀ス。

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

正月一日、辛丑、晴、○中 略

一明二日、諸司代參 内ニ付、出向之交名、傳奏衆江附進之、○中 略

二日、壬寅、晴、○中 略

一所司代龍野侍從安宅朝臣參 内也、午半刻、昇車寄而參着于鶴間、兩役衆出會、其後更ニ傳 奏衆誘引於候所、如例、車寄屏風棚無之、立捨置、 手水、蚊手計、相廻、

一出向堯寬・重直役之、

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

正月四日、甲辰、雨、自去夜伺候、卯終刻、退出、今日龍野侍從役宅依行向也、近習公卿加勢退出、已終刻、著狩衣、龍野侍

從亭向諸司 謁之、關東新年慶申入、先萬里小路中納言亭向、 相役同伴行向也、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記 宮内省圖書寮所藏本

正月四日、○中 略、傳聞、今日議奏衆所司代行向年始、

安政元年正月二日

五九

所司代脇坂 安宅參内

實久等答禮 ノタメ所司 代邸ニ赴ク

露國使節應接掛筒井政憲肥前守〇西丸留守居・同川路聖謨左衛門尉〇勘定奉行等、勘定組頭中村

爲彌時萬〇後出羽守ヲ露國艦隊旗艦「パルラダ」Palada 舊艦以來、長崎港ニ碇泊ス。ニ遣シ、舊臘晦日

露國全權侍從武官海軍中將「エウフィーミー・プウチャーチン」Российскій

Полномочный Генераль-Адъютантъ Вице-Адмираль Евимий Путгинъ

ノ提出ニ係ル修好條約試案ヲ返却セシム。「プウチャーチン」之ヲ納メ、

更ニ修好條約草案及其趣意書ヲ提出ス。

〔長崎日露對話書〕〇東京帝國大學所藏本 蝦夷地國境談判應接記所載

正月二日、中村爲彌魯西亞船に罷越候節對話

但、御徒目付長坂半八郎・御普請役・御小人目付相越、

爲彌

一昨日も、元旦之爲祝儀、肥前守・左衛門尉初に品々被差贈忝候、

使節

一聊之品差上候處、御丁寧之御挨拶痛入候、

爲彌

一此品、聊あゝら、自分も年玉ニ差遣候、

使節

一肥前守様・左衛門尉様へ年始として參上可致處、上陸不仕候ニ付、難罷出候、依之手札貳枚

差上候、

爲彌

一此間之書面預り歸り、肥前守・左衛門尉初篤と一覽いゝ候處、右を全見越之義ニ有、たと

へる申候得え、未々花も咲不申木に實を結候節之約束を致候と同様ニ有、當時更ニ難取

用書面ニ候間、相返候、

使節

一書面之趣、御兩使ニ御決着不相成段を不得其意事ニ候、御兩使を重キ御役人之義、何事

ニ不寄御對談可相成ハ勿論ニ可有之、一昨日も申候通、政府々之書翰を、通信通商之儀一

ト通申述、此書面を、右ニ付之事情を委敷陳述いゝ候義ニ有之候間、此ヶ條ハ當節御

決着、是々之ヶ條を御老中方へ御申上之上御沙汰と申様ニ、御挨拶有之度候、

爲彌

一通信通商有無之取極さへ無之候處、右ニ付之委細之條目を前以取極候事、いりふくて出

使節提出ノ
修好條約試
案ヲ返却ス

安政元年正月二日

六二

來可申哉、通信通商有無之取極出來之節ニ至差出、相當之事ニ候、

使節

一右書面之振合を以通商御免可相成哉、又右之趣ニおととも不相成哉之譯ケ承度候、三
五年相立、彌通商御免相成候とも、唐紅毛之振合ニおハ何分望無之候、

爲彌

一只今口上之趣を、委細肥前守・左衛門尉へ可申聞候、おろし書面ハ先相返候、

使節

一明後日迄、御預り置被下度候、

爲彌

一拙者一存を以預り歸り候書面故、兎も角も一先相返候、

使節

一御請取無之ニおいてハ、此書面持參、直ニ當表出帆、江戸へ罷越可申候、

爲彌

一右様詞を盡し申談候茂不取用、出帆可致との義ニ候ハ、差圖ハ不致候得共、出帆を勝手
次第之事ニ候、併出帆と申聞候を全く偽リニ可有之、實ニ出帆いさ候義ニ候ハ、拙者

返却ノ談判

使節更ニ老
中宛書面ヲ
差出ス

寸分も此座を動き不申、何方迄も此舟ニお同行可致候、

使節

一書面御請取難被成候ハ、別段御老中方に差上度書面有之候、

爲彌

一只今相返可申旨談し候書面不請取、直ニ書面可差出趣を不相當ニ付、請取かさく候、

使節

一最前之書面御請取不相成上を致し方無之候間、別段封し置候書面差出候間、封之儘御兩
使より御老中方に御上ケ被下度候、

札ケ下

(朱書)
此談論中、十二月晦日差出候書面を、
差戻候儀ニ御座候、

爲彌

一封之儘ニ候上を、其段兩人へ可申聞候、

使節

一御老中へ封候を差上候書面を漢文ニお候、外蘭文之書面御兩人様に差上度候、

爲彌

一承知いさ候、

安政元年正月二日

六三

應接掛宛書
面ヲ差出ス

安政元年正月二日

六四

使節

一右書面取調仕候間、暫時御休息被下度候、

爲彌

一此程手覺書を以申達置候書面、彌存寄無之候ハ、明後四日、本書可相渡候、

使節

一漢文之譯をも御渡ニ有、蘭文と引合、得と一覽いさ候上ニ無之候有、否難申上候、

爲彌

一明日、漢文可相渡候、

使節

一兼々申上置候上陸場之儀、如何ニ候哉、

爲彌

一番船等之儀、此程之通ニ有存寄無之候ハ、幾日ニ有も上陸不苦候、

使節

一番船之儀御免無之候有上陸望ニ無之、右様之御取計ニ有、往々御國之爲不可然事ニ候、

爲彌

上陸地ノ件

一右等之儀也、所奉行之取計向も有之事ニ有、肥前守・左衛門尉重役ニ候共、所奉行國法を守候見込を爲改候義と相成兼候、

使節

一警固又も番船等付候事ニ候ハ、長崎市中不殘上陸場ニ被仰付候とも、決る上陸ハ不致積決着いさ候、

爲彌

一番船等之儀也、國法ニおいて申立通りニ取計參兼候、

使節

一異國人御取扱振之儀、以後御改革無之候有、深御國之御爲御案ニ申上候、重き御役々江戸御越ニ有、上陸場程之小事御取計出來兼候段也、何故ニ候哉、

爲彌

一我國ニも夫々嚴重之法則有之、たとひ小事ニ候とも、事柄よおいてハ、重役人ニも取計いさかき廉有之、其意味も貴國トハ元來言語文字も不通事故、難申聞候、

使節

一上陸之節、番船之儀也一旦御承諾有之、此節にいさ難相成段御達有之候ハ、心外之義ニ候、

安政元年正月二日

六五

外人取扱ノ改善ヲ求ム

安政元年正月二日

六六

爲彌

一番船之儀、一旦承諾之趣を、其許に全く心得違ひ、此節より難相成段達候譯に無之候、

使節

一甚迷惑に存候、吳々も外國人御取扱之義に、往々之處、篤く御勘辨可有之候、

爲彌

一國之法則、自由にも難相成候、

使節

一明日是非漢文之書面御差越可被下候、其節、蘭文に御老中方へ差上候書面之趣意可申上候、

爲彌

一心得候、

使節

一明後日ハ、西御役所へ罷出候積、御約束申上候得とも、品々入御覽度品も有之候間、フレカツト船へ御役々御入之儀相願候、

露船へノ來訪ヲ求ム

爲彌

一右を、此間委細申述置候通、再度之儀如何可有之哉、あつ折角被申聞候事故、一應可申聞候、

(魯西亞始末 通航一覽 續輯 有所不爲齋雜錄)

○修好條約試案ノ内容ハ次ニ掲グル日露修好條約草案ト略々同一ニシテ、嘉永六年十二月晦日、同書提出ノ條ニ之ヲ收ム。

〔露國海軍少佐ポシエト書翰〕

○永持徳一所藏本 魯西亞始末所載

○正月三日露使應接掛宛

正月三日、齋藤榮助・森逸八請取蘭文和解武通之内、(朱書)御老中方へ差出候封書寫之由、

俄羅斯和約章程

和解

箕作 阮甫 武田 斐三郎

アヂユダント・ゼネラル官名布恬廷、大臣筒井肥前守様・川路左衛門尉様の尊侯茂奉問、
兼和議章程及び其理解淺記を、(俄文體譯書翰カ)書札の譯文茂尊覽み供したるは、
(カビテイン (Kamitain-reitain) ロイテナント・ポツシート (Lochet))

一千八百五十四年第一月三十一日

フレガット バルラス船號に於て、

安政元年正月二日

六七

條約草案提出ノ件

安政元年正月二日

六八

○異譯

條約草案提出ノ件

寅正月三日、御普請役森逸八・御小人目付齋藤榮助、彼船に罷越候節、差出候蘭文和解貳通、使節ホウテイヤチー子儀、筒井肥前守様・川路左衛門尉様に、御禮御挨拶申上、取極及び示辨書草稿之翻譯、昨日差出候故、何卒御老中に御届被成下候様仕度奉存候、

曆數千八百五拾四年正月和曆三月十九日

船將次官
ボスシエト 名入

嘉永七年寅正月三日

於フレガット船バルラス號船

右之通、文意和解差上申候、以上、

寅正月

西吉兵衛印
森山榮之助印
檜林榮七郎印

〔日露修好條約草案〕

○水持徳一所藏本
魯西亞始末所載

正月三日、森逸八・齋藤榮助御請取貳通之内、（朱書）「昨、御老中方へ差出候封書寫之由、」

俄羅斯和約章程

和解

箕作阮甫
武田斐三郎

條約草案立定ノ概旨

修好

國境

大坂箱館ノ開港

俄羅斯全國之帝及び日本國の帝、將後日のため、兩帝國和睦を約し、眞實な交誼を結はん
と欲して、其國疆を定め、且後來の干係を處置にへた和約の章程を爲て、其局を定めんと決
せり、されば爲よ、俄羅斯帝を、アヂユタント・ゼネラル・ヒーセ・アドミラル・リツトル
以上布括廷を以て其全權欽差と記し、日本帝を、其大臣筒井肥前守様川路左衛門尉様に命し
て、全權欽差まらしむ、上は擧たは雙方の欽差、各々兩帝國之利害を商議し、相共ニ專斷し
て、下に云へは箇條を立定せり、

第一條 今より以後、俄羅斯全國之帝と日本帝との間和好を締ひ、子孫永遠相共ニ懇篤な交
交を爲にへし、

兩帝國の所轄之内、俄羅斯・日本の人民、その撫恤防護を受け、其人太平の澤を蒙るのに取ら
に、又其所有之物を傷らざはへし、

第二條 不和の禍原を杜くするため、今や俄羅斯と日本との疆界を定め、日本所領之界を、北
ハエトリユプ島又エト 及び薩哈連フツ又カラ 北南端に在るアニワ港を限と定めたり、薩哈連島の
兩國分界の線に延引を爲はと取く、和好を締へは兩國官員會同して、其所在地方を劃し、且
此和約章程を載せざる處に、其時及び填寫にへし、

第三條 日本政府俄羅斯の軍艦商船の爲メニ二港を開港せ玉ふべし、其一を本大島の大坂、其

安政元年正月二日

六九

一ハ蝦夷島の「ハコダテ」に於ては、爾來俄羅斯の船艦茲に寄泊し、又風波の損傷を修繕し、更ふ食料薪水其他有用之諸物を備へ、之を謝せしむる日本に定價を準し、俄羅斯國産之品物を以て償ふべし、

交易

漂民撫恤

兩國交好を結び、若し彼是交易の約一決せり、此兩港を又交易場と給はべし、俄羅斯を、此二港及び長崎港を除くの外、日本其他之港に寄ることを許さず、但し風濤破船之難に逢ひ、又食料薪水不足して進むべきやうなり、近港に寄せざる事を得ざる如きは、已に得ざる時を此例に在り、此の如き者ありし時、其地の官員より、其船艦人名、殊を漂民を撫恤保護したるは、食料薪水其他の諸物及び船艦修繕の費へを、彼二港の内より之を償へし、又俄羅斯人・日本人も、總て漂民を彼二港に送はし、

居留地

第四條 上云へは二港に於て、商館を置くは然らば、地を擇び玉ひ、俄羅斯人に許し、其地の居室囤積場及び種々之物品を蔵むべき家を營はるむべし、商館内の俄羅斯人を忽て其風俗に従ひ、政度を變せしむ、法教も自由を奉信せしむるを許さず、日本に正理なきは、日本の政府よりも之を禁制せしむるべし、來寄せし船艦を、必に互に相交せ、又商館と自由な往來相交はべし、

信教ノ自由

貿易商程

第五條 和好を結ばば兩國之官員會同して、廣く商販の章程を定め、上に云へは兩港に於て

交易をなはし、

阿片輸入嚴禁

俄羅斯政府より嚴重に其臣民に令して、法制を戻さば商販、殊は阿片の如き有害の交易をなはすと禁じ、もし俄羅斯人此法制を犯ししむるは、日本政府を盡く其物貨を取り上げ、罪人として俄羅斯商館に送はし、然らば時を之俄羅斯國に返し、國法を以て罪を處はべし、

領事

第六條 俄羅斯政府は二港に各一館長を置き、日本國に在留する俄羅斯人を制しめ、日本政府の官員に接するも亦此人を以てせしめ、日本人彼館長に其位爵に相應する敬禮を加へたはふべし、館長と港の鎮臺及び政府諸員と相交はば、其禮全く平等なはべし、是を館長を俄羅斯政府方面の任する權官なれば也、館長病ありし、又嚴存せざるは、或は時を、俄羅斯商館諸官員の中より、最も齡の長はるものを選ば、權り新館長と爲はし、已に然らば、又之を敬崇はし、

罪人ノ處罰

第七條 俄羅斯人、日本國境内に於て、刑罰を受くる罪過を犯ししむる時、之を俄羅斯に送り、本國に法制を以て罪はし、微少之罪ありし、俄羅斯人に制はし、館長の意に任し、且俄羅斯國の政度を従ふべし、若館長然らばしと思は、之を俄羅斯に送はる可なり、日本人若し俄羅斯人に向てなせば罪過を、日本政府より國法を以て之を罪はし、

第八條 兩帝國已に其境域を接し、今又和好を通はる故を以て、交易を論説く、日本政府

利益均霑

安政元年正月二日

七二

批准

み於て、從來も他國も許さむと茂善と為にへた諸事の時、俄羅斯臣民も同く其寛典
ふ膺らさるからさ正理ゆれ、上よ云へは和約章程ふ載せたは箇條ふ論なく、其外のお
とたりとも、必らに俄羅斯諸民ふ恩波の及んよと茂欲に、
俄羅斯全國の皇帝と日本國帝^軍と、互に和約章程之本書を取りかこにへし、但し、一歳を過る
之後にまは茂爲にへし、方今を、兩國の全權欽差の取替せは書茂以て、權りふ其用ふ充ツと
云ふ、

一千八百五十四年正月十八日
三十日

長崎ふ於て、

「フレガット・バルラス」^船中よ書、

○本書ニツイテハ、正月六日、筒井等、露使ニ答書交付ノ條所收ノ附錄算作阮甫西征紀行ヲ參看スベシ。

○異譯

魯西亞國中獨立支配之酋長ある帝と、日本國將軍ある帝と、向後和平眞信、此兩帝國之間ニ決結せんと欲し
て、兩國之間の境界、及び此末之都合等之義、取極書ふ因て極んと決定仕、是の爲ふ、魯西亞國帝此度アシユダ
ントゲ子ラール、フイーセアドミラル、エンリツドル^名ボウテイヤテイ^名ネをして、此重き任ニ當て命を下
し申候、日本帝あるを、則筒井肥前守様・川路左衛門尉様又其任あるの趣、此双方の重き任ふて兩帝國相互之有
益を勘考し、其重き任の任ある處を以、左之ヶ條を決申候、

第一 向後常よ、魯西亞國中獨立支配之酋長ある帝と、日本國帝及び其^(臣)信下とも、和平信交可有之候、

條約草案決
定ノ極旨

修好

國境

大坂箱館ノ
開港

交易

難船救助

居留地

信教ノ自由

貿易章程

第二 不和の原因引出ぎ、るの防之爲、今般魯西亞と日本と之間之境界分定候事ニ候、日本領之境界を、北手にお
るてエトロフ島、アニワ港ニサガリン之南端カラフトを定申候、此今言所の嶋ニおるて、魯西亞領日本
領の境界筋を事延引なく、其場所其地ニあり、双方決心相互ニ納得之事ニ及び、尙此取極之無相違處を決可申
候、エトロフの北ニ當るの惣千島及びサガリン島南端之外を、都魯西亞領ニ屬候、

第三 日本政府よて、魯西亞軍船商船之爲、二港御開可有之、此二港、一は日本大坂、今一は蝦夷箱館ニ有之度候、
是等之船々を、此末其所の内よ入、碇を卸し罷在、其患難海害を凌、修覆^(修)を加へ、且新よ其用具を整へ、其
他必用之事を辨し談合し、以て日本人定の價を以勘定仕、或魯西亞の品物を以て交易仕、事を濟し可申
候、

第四 双方決定の事よ依て、格別ニ商賣取極方決定致し候ハ、必商賣之爲ニも二港可相用候、右申立置候二港と
長崎之港之外ニあり、魯西亞船參申間敷候、尤或暴風、或は船損破、或は食用之品等不自由之時宜ニ至候節
之格別、其余止事を得ざる時之外を、必其近隣の港ニ入込候様之義仕間敷義ニ可有之候、斯の如き患難の
時よ、日本場所々々之司よて、其船々人々、就中難船の者よ、夫々御扶助御世話可有之候、食用及び其
他の品々相求候時、且船修覆^(修)の時に至て、夫々價を以て相拂、其御開の港よて事を辨し可申候、將又其場
所は、魯西亞國日本國双方の漂民連越候様可有之候、

第五 雙方決定の義ニ付、納得之上、右申立置候港ニあり商賣相違義ニ付、商法向取極之義、尙委敷相極可申候、
常ニ其商館と相互ニ勝手次第相交可申候、

安政元年正月二日

七三

安政元年正月二日

七四

領事派遣

第六

魯西亞政府よて、其臣下末々迄命を下し、自今以後御國法ニ背候商賣、及び格別可恥之阿片商法杯、堅仕間敷様、嚴禁を立置候、此法則ニ萬一逆候者魯西亞隨屬の内より有之候時ハ、日本御政府ニ其品物御取上ケの御定ヲ立置のれ、其法を犯候者魯西亞國に御差返ニ相成候前、右一件魯西亞商館に被仰知可被下候、勿論、其罪人義々、國法通取計可申候、

罪人ノ處罰

第七

日本國よて、都魯西亞隨屬之者、御取扱御規定有之可申、就右二港、何れも魯西亞政府ガコンシユル官差出置、此者御役方と御談交等都可仕候、日本人ガ右コンシユル義を其身分相應ニ取扱、疎意無之様可有之候、其港之御奉行及び日本政府其他之御人物を、右コンシユルと之御應對工合を、双方相互ニ御同様之格を以御交可仕、則右コンシユル義ハ、魯西亞國主之目代ニ有之候、コンシユル義、萬一病氣又ハ詰合不申候時ハ、新官申付候迄之間ハ、魯西亞商館之役人之内、老輩之者其代を勤メ、則取計振之定等、其任ニ當り可申候、

利益均霑

第八

魯西亞國主之趣意ニ必適之義を以て、取扱可申候、將又時宜ニ依、其心得違之者ハ其罪人魯西亞國ニ差送可申候、但、聊之心得違之者有之候ニおるハ、コンシユル之配下魯西亞隨從之官役ニ其取捌致し、勿論魯西亞國主之趣意ニ必適之義を以て、取扱可申候、將又時宜ニ依、其心得違之者直ニ魯西亞國ニ追返候様ニ可仕、日本隨屬方ガ魯西亞隨屬之者に對し候ハ、罪極まり候時ハ、日本政府ニ御國法通り御戒可有之候、

兩帝國互ニ相隣、今又信を以御交之故を以、都魯之法則有益等之義、商賣向ニ勿論、其他日本之御政府ニ

曆數千八百五拾四年正月 和曆西曆十八日

嘉永七年寅正月二日

フレガット船バルラス 號船

於長崎

右之通り、文意和解差上申候、以上、

寅正月

西 吉 兵 衛 印
森 山 榮 之 助 印
檜 林 榮 七 郎 印

〔露國使節プッチャーチン書翰〕

○帝國圖書館所藏本
徳川幕府書類外國事件書所載

○嘉永六年十二月二十日老中宛 提○正月二日、

正月五日差出候御老中方に上候封書添書寫之よし、○慶西
亞始末

正月五日、爲彌に申談置候御老中方に上候封書之添書寫之由よて差出ス、○外
國書

因

貴國欽差之二位大臣、不敢收此干渉、

兩大國和約之大約二冊、本大臣即理應敬遞

貴國老中、請收寬閑、順候平安、

大日本國老中

安政元年正月二日

七五

條約草案ノ
受納ヲ求ム

安政元年正月二日

大魯西亞國御前大臣布恬廷

一千八百五十四年正月十八日 魯一月六日
蘭一月十八日

我嘉永六年十二月二十日

右和 解 ○魯西亞始末ニ
ハ此譯文ナシ。

御國御差遣被成候御兩人の重臣方ニハ、御取上被成兼候ニ付、兩國和親約定ニ懸り合候大略の貳冊を、私儀 御國御老中方に差出候間、御取上、ゆるく御覽被下度、且々御容體相伺候、大日本國御老中
大魯西亞國御前大臣布恬廷
一千八百五十四年正月十八日

〔露國使節プウチャーチン覺書〕○永持徳一所藏本
魯西亞始末所載

○正月二日露使應接掛筒井政憲等へ

〔袋紙〕
正月四日爲彌船中對話之節請取候書面

俄羅斯書翰和解 一通

條約草案ノ
趣意

國境

開港

交易

日本全權欽差顯貴大臣筒井肥前守様川路左衛門尉様ニ奉る、
俄羅斯政府此願ひ已に明告したれハ、今及て俄羅斯全權大臣と日本全權大臣と、章程を相
共ニ交付せる此外、他ニ遣は所なし、
是ハ副へたる和約章程を、是より後兩國和好を締ひ、後來相共ニ國益ならむを、議定せ
むと欲せるの本趣を以て記載せるものなれ、故ニ和約章程の箇條を以て下條を定む、

第一條

兩帝國の經界を議定し、相共ニ所領を侵奪せる處とあるへし、

第二條

俄羅斯日本兩國此和約を固守して、不快の對面ある間のため、其會晤ハ何處の所ニあ
るべきや否を定め置へし、然るとたハ指諭を玉ひたる港口ニあざされハ、他の地ニ來泊せる
處とあるを、但し、和約章程ニ載せる事ハ、此例ニあらはに、

第三條

兩帝國交易のよとよ就てハ預め章程を定めおき、兩國より歲月を期し、別額ニ交易章程を決
議して後、交易を始むへし、此を以て法に反れる商販を防ぎ、且これニ依て生くる所ニ不法
なく、日本港を安のよしをせんことを、俄羅斯全權大臣此殊ニ忽にせざる所あり、

安政元年正月二日

兩國臣民ノ
待遇及罪人
ノ處分

第四條

安政元年正月二日

上件此目的に依て、和約章程の内種々此法律を載せたる、即ち兩國臣民此待遇、且交易其
他此法則に戻れるものを罪せる所置此如き是也、

第五條

利益均霑

和約章程に定めたる正理と特旨の外、日本國より他國に許したまふ寛典あるは、俄羅斯臣
民も又是を許し給ふるを、此志願を日本全權大臣も其嗜好ある事を嘉しと考たまふなるを
し、殊に其政府にて、俄羅斯國の隣國の好みあるを以て擇み取たまはんと欲するよし、大
臣諸君自ら言ひたまへり、且俄羅斯國の日本と平等からむ事を願ふ、

日本此全權欽差速副する處此和約章程に署したまわき、俄羅斯政府に於て其願ひを達せる
事を歡喜し、且諸君も、日本と俄羅斯と和約を締ひ、懇切に交好せんことを欲したまふ此意
も、自ら明のからん、

若し速に經界を定め、俄羅斯此爲め二海港を開くを遅延し給は、日本政府に騷擾を生し、
大なる困難も及ひたまふへし、

薩哈連ラフト島此經界を、春内兩國より官員を送りて、容易に之を定むへし、此事若し三五
年を過るときは、俄羅斯人日本此地に繁殖するに至るを以て、重切なる禍害を生かへし、

唐大島ノ經
界ヲ速ニ定
ムベシ

擇提島ノコ
ト

且全權欽差謂らく、彼和約章程此諸箇條を決定したまふ迄、エトルプ島を日本所領にあら
にせしむたまふへし、此箇條を一々極て密に完成して、寛典を受くる此告を得るまで、俄羅
斯全權大臣日本を去るよとあたわは、幾度も日本港を來り問ふへし、御老中より俄羅斯宰相
「ガラーフ爵子スセローテ」に答へたまへる書翰此中依れり、當時此形勢をなりて、異國
此交易交好、皆舊律に拘泥するをせあたはにせよと知たまふぬれ、此一事をかし
たまふよと、豈に難からんや、今一言をよに附き、

交易を宰相へ此返翰に記せる年月より早く開きたまはんと、是欽差大臣此願ふ處なり、
俄羅斯より早く他國に交易此章程をあたたまふなむ、此隣れる大國に告るに非さむ、此
れを爲したまふへあらは、され又大臣此請ふ處あり、

カビテイン、ロイテナント官ボスシート譯

一千八百五十四年正月 十八日
三十日

長崎に於て、

○次に收ムル漢文ハ本書ト同意義ノモノナレドモ、前掲日露對話書ニ依レバ、是日、應接掛宛提出ノ露國使節
書翰ハ、蘭文ノミニシテ漢文ノコト無シ。蓋シ、三日ニ至リテ更ニ之ヲ提出セシモノナラン。前掲露國海軍少
佐「ボシエト」書翰參看スベシ。

將本國之意向意願皆當面鮮明、本大臣即應編文傳遞貴二位大臣、兩國將來遵守之條約、本大臣
所編修、以永遠安安兩國之和睦各項利益、此和約者、一則即永遠建定兩國疆界、俾兩國再不可

安政元年正月二日

漢文
國境

安政元年正月二日

八〇

開港交易

罪人ノ處置

利益均霑

唐大定境

擇捉島

通商開始ノ時期ヲ早メラレタシ

相犯、一則以堅固兩國結交之事紀、斷皆可致于相和之緣、即便約定相交公文往來之處、如此則除遇有緊急之外、不許本國人到貴國別港口、一則即先約定貿易之情形、俟到所定期、貿易之章程批准後、商事即行矣、一則以杜貿易不核例之各弊、本大臣即設處治犯法之一條、一則至于本國商人之各項利益、即約定於別國為同理、此意願者、有節有義、自然可見矣、二位貴大臣筒井川路雖著貴國之意、謂是國同理、二位貴大臣若無推延、即應允此如所遞之和約條款、是即可謂貴國實欲辨別本國於別國、及永遠堅固兩相交之憑據、蓋定疆界及開貴國兩港口之事、延緩已久、即怕貴國將來必有不安艱難之患、至于カラフト卑地之邊界、兩國所派之員、春時即可以定矣、此事再不可推延、久怕本國人犯貴國之疆域、建立居處、即難返矣、於此本大臣應直述、該和約條款決定以前、エトロフ海島、即不得定為屬貴國下、本大臣即亦不能棄貴國疆域、且應屢面來至貴國港口、以聞知該條約可足決定之款、此事亦不可難矣、蓋貴國貴老中達本國首宰相回札、一經承認、因一字當日之情形、貴國再不能取舊關涉通外人之例矣、盼望通商之事、比貴國老中所推之期、早可啓矣、至到終本大臣即應宜疏、倘遇貴國將來約定貿易之章程、於別不論何國本國之決定以前、是即必應籌為凌辱傷心之事、

御前大臣布恬廷

○漢文和譯

國境
和親

通商

利益均霑

開港

私國之趣意心願之筋ヲ以、一々面談相分リ候上者、私儀早速書面相認、御兩人ノ重臣江相願差出申候、兩國此後相守ヘキケ條約束之事共、私儀取調候永久兩國之和親ヲ約定シ、夫々利益ニ相成候事共ニ御座候、右和親約定一ケ條ハ、永久兩國ノ境界ヲ取極、兩國ヲシテ相犯シ掠メ候事無之様致度候、又一ケ條ハ、兩國和親ヲ取結候義ヲ堅固ニ致シ、何レモ不和ニ相成候緣故ハ斷絶シテ、相互ニ親交セル書面致往復候場所ヲ約定致シ置、然ル後者無餘儀急迫之事有之逢候外者、私國人ハ御國之別ニ湊江罷在候儀者為致間敷候、又一ケ條ハ、私國前方ヨリ約定交易之致方ハ、御國ニ而御約定之時節ニ至リ候ヲ相待、交易之作法御許シ之後、通商之事早速相始申候、又一ケ條ハ、交易取極之作法ニ睨與相叶不申、種々之流弊之起リ候ヲ塞キ候為、私儀法度ヲ犯シ候者ヲ取捌候一ケ條ヲ設ケ候、又一ケ條ハ、私國商人共ノ夫々利益ニ相成候約定ハ、何レ之國トモ同様之筋ニ御座候、此心願ハ程合之宜有、義理之正敷有テ、自然分明ニ相知レ候事ニ候、御兩人之重臣ハ御國之御趣意ヲ顯シ、私國ハ境界相接ル故ニ、他ノ外國トハ譯柄モ別段ニ候様被申候得共、乍然私國ヨリ願求候ハ、素ヨリ他之外國與同様之筋ニ而、多分之願ニ者無之候、若御兩人之重臣方、年月延引之事無早速御承知被下、差出候和親約定之ケ條之通り被成下候、(度候方)左候得者、御國ニ而私國ヲ他之外國ト辨別被成候ハ、永久兩國之親交ヲ堅固ニ被成候證據ト可申候、其譯合ハ、境界ヲ定候事、並御國交易場之湊貳ケ所御取

安政元年正月二日

八一

唐太島

擇捉島

通商開始ノ時期ヲ早メラレタシ

極被下事、餘リ延引ニ相成候而ハ、御國此後安泰ナラス、御難儀之事モ出來可申哉與深ク心配仕候、カラフト陸地之境界之儀者、兩國ヨリ差出候役人ニ而、當春之内取極申度候、此事者久敷延引被成間敷、餘リ延引ニ相成候へ者、私國人共御國之邊界ヲ犯シ掠メ、居宅ヲ拵立候得者、早速爲引拂難致歸國事モ可有之之心配イタシ候、此譯合故ニ、私儀約定之箇條ヲ申述候、御決定以前者、エトロフ島之儀者、御國之御領地與取極候事ニモ不相成、私儀御國之邊界ヲ御棄被成候様ニモ難致候、此上者（度ノ誤）云々御國之湊江罷出候而此約定之儀ヲ御相談イタシ、彌取極リ之上者、右箇條者相加へ可申候、此事ハ六ヶ敷事者有御座間敷候、御國御老中ヨリ私國之者（官ノ誤）宰相江之御返翰落手致一覽前（條）、天下四海今日之人情勢ヲ以、得與勘考致シ候得共、通商之儀者萬國一體之事候間、御國之舊法ヲ御取用ヒ、外國人御取扱之御先例ニ拘リ其儀ハ相成兼可申與存候、依之何卒通商之事御許シ有之度存候、此度御國御老中御延引之年限者、可成丈ヶ早々ニ御聞定可被仰下候、其上者私ヨリモ直奏可致候、若御國交易之作法ヲ御約定被成、其砌ハ別ニ何レ之國私國之差別ヲ不論シテ、一樣ニ御決定可被下、イマタ御決定以前之所ニ而、萬一（イ）境界侵凌之御耻辱之事ニ、御心配出來申間敷候難計候間、得與御勘考被成候様奉存候、

一千八百五十四年正月十八日

御前大臣布恬廷

（有所不爲齋雜錄）

〔川路聖謨長崎日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

中村爲彌前日露使應接ノ模様

露使ノ贈物

嘉永七年寅正月元日 くも雪 こへると門此のさきハ驚てふるさとく此ふ旅衣のあ 論辯
 季冬到首春。魯戎辭屈乞間頻。只希邊界平安定。永看太平擊壤民。々々髪を結せあらのく
 おもひたる故よ。記しよ。平比字二ツ有。追直にへ。○昨晦日ハ。中村爲彌をフレカ
 ツト船へ遣したるよ。歸遅く。飯をも不食。まち居たるよ。五時頃ハ歸了たるよ。家來申之。
 まづこゝろ落居たり。夫と申候。通詞一同呼出候。相尋候よ。云々比とよ。決着よから
 ぬ。通詞森山榮之助といふもの。死を決して。申談をもあしたるとの事也。此もの別段あるもの
 よ。左もあるへ。
 使節少も立腹比々きあく。爲彌をよとの外もてなく。通詞へも。酒給させ。爲彌へ隨ひ參
 たるもの共にも。画かと茂くま。爲彌にも贈物茂あしたり。茶出し其外
 書物也。筒井并自分へハ。オルコ
 ル一箱巾五寸長一
 尺五寸也。小茄子等とある早つけき入二ツ。子供のち遊ひ也以上よき菓子茂贈らむとするよ
 く。其のえり也との事也。御目見以上はえ。さ少々ああら有。其外一同へ年賀として奉ると
 て。牛棧四分一をり。白のあきむよ奇麗よつゝ。白木比臺へのせ贈りたり。其節云々之
 事有ニ付。今日も九ツ時よ筒井方によ合也。元日よをあく比如く。あまは此事也。爲彌お
 もひ込別段也。今戰爭あらず。命棧捨るもの多あるへきと。少も疑へあらぬ。日本士之氣別段
 かるもの也。○昨日贈物よ。さくら酒と云もの有。さくらハ。日本限たるとおもふよ。通詞よ問たるよ。
 唐土朝鮮よハあ。西洋よハ有。其上よ實大也。其

實を以製せる酒めつら。歸り之土産と。仕舞置せたり。昨日中村爲彌よ。爲待置候ハ氣之毒也也と申たり。其内帆のけ外へ浅させせたるよ。目浅驚たる事之由。軍將出た一聲發したる時。四百人比のときも傳せり。トケイ早回り三度比うちよ。あけ候表。收候も出來候由。日本よても軍艦出來候ハ、この可被成候御傳へ可申と申たり誰よても。直よ銃炮の傳授とハする也。

中村ヲ露船ニ遣ス

二日 雨 おろろや船よ。牛浅くきたる挨拶よ。鮮鯛一折遣候。中村爲彌浅。おろろや船へ懸合として遣候。今日ハ所々へ年始として出る。長崎奉行御目付古賀謹一郎中村爲彌昨夜も歸りたるハ。四時前也。わき昔よ六ヶ敷御用よ撰えきた。多く出たり。さき共元日は四時まであつた。折えりめて也。○むろく木曾へ行たるとき。袖乃爲口此柄よするもの。至る柔よ。軽くして折きた。必用よ立へきもの也とおもひて。此度き登山よ少々買たり。カンハ。又ノウダイといふ也。木比皮。さくらよ似たり。こき浅ハツテイラ此楫よすへくと。紅毛在留カヒタンよせたるよ。こきカムフルホ楠比とよこゆと。左よあらに。甚くヂヤツチ此木也及ひエイケンホよ似たるやうよ覺ゆ。エイホ也。通詞共ハ控比類也といふ也。蘭學者箕作玄甫也。マキ比類よ。あといふハ從來舌官比誤也といふ。といふ書面浅出。さて申に。近頃松平肥前守よ右之エイケンホ也。銃炮臺其外よなる木あきと。いろくせらまたと。さき其ものよあらに。こき必エイケンホよ。軍用よ必用之ものあるへ。ハツテイラ此のよ。尤よるへくと申越たり。森山榮之助話を以尋今般參候魯人名前使節 (L'ITINER) 一人第布恬廷とよるは

事記外欄

露使年賀トシテ名刺ヲ差出ス

露使ニ鮮鯛ヲ贈ル

あ。眼さした、あら 船將 (Vihokochik) こまへ。至る穩當なる人なる。船將次官 (Diochert) こまへ蘭語よ通して。よふとの者也。ウンコースキつも笑居也。懸合事ニ少も不拘。ホスシエツト今般之通辯よあいた。諸懸合引受也。 (Touhapour) 此人無官なま。セキレターリス比と浅か。公用方取扱といふ。一通り之極才也。ゴンチャロフ 常よ使節の脇よ居。口出浅するもの也。謀主といふ妹よ。ホスシエツト ゴンセロフ也。わき船中ニ酒比酌などを。食物もちこひて。取持たるもの也。○中村爲彌夜四時魯船よ歸來る。同人并通詞とも。終日之心痛。實よ感服なり。中々以。わき可及所よあらに。○使節布恬廷。年賀として御玄關迄。參候義と心得吳候様き之事。ニ。朱唐昏へ。布恬廷とよるたる。名札浅差越候。フイウチヤチン

欄外記事

フレカツト船ノ名ハ、バルラス漢文ヲアテ字交よるもの之名カシケウイツト (Tonkestrut) ○本書ノ句讀點ハ、以下總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從フ。マタ次ニ收ムル魯使應接日記ハ、之ヲ本書ト比較スルニ、大差ナシト雖モ間々出入アルヲ以テ、繁ヲ厭ハズ併收ス。魯使應接日記ノ奥書 (筆者不明) ヲ見ルニ、「此一巻、某君より帳秘なまて他見を禁し一覽を賜ふ、蓋、左衛門尉日記浅手抄し、福山侯之覽ニ供せしを、某君乃借際せしも乃よも可有之歟」トアリ。本書前年十一月二十八日ノ條ニ、「日記ハ御城代と伊勢守殿に上ケ御用向之日記。共よ。四通り也」ト聖謨ノ記セルヲ見レバ、本日記ハ其中ノ一ナランカ。

〔川路聖謨魯使應接日記〕○宮内省圖書寮所藏本

筒井宅ニ會合

中村爲彌前日露船訪問ノ模様

寅正月元日、風又雨、年賀のことせれり、更に正月とも不存候々き御坐候、乍去雜糞計ハ有之候、いさゝの新春の志願く相見へ、九ツ時よ、筒井肥前守宅に、一同寄合、中村爲彌話ふ、昨日船中より、少々別間へ參吳候得と申候、軍將の部屋へ通し、其節軍船進退之調練を覗くせよ、軍將出、一聲發候得と、四百人之人一度出、再び笛を吹候得と、三本をくら高十間もあらむと見え帆柱へ、一同上、帆を考、走出に計にい、其速ある、早といふも大なり、詞も述のまくと申き、時計比早廻之針貳度廻り候内、の事畢、一度廻り候内、巻收候よ、日本も軍艦御取立有るは、かく可被成候なを申、丸きものへ砂をい、二度出入を、帆を全くかく、乃修行、長崎に蘭船參候時、日々修行、直出可申候、魯人を、日貳度、必、御臺場なぞ出來候も、日々之修行あき時、よき刀を拵候、劍術修行せぬと、寄合濟歸宅、夜四ツ時也、歸宅之上、御普請役來、呈書之、あま氣之毒ニ付、家來共を出候、聊心附遣候、○唯今迄、元日深夜かく調物い、一同寄合こと、

中村ヲ露船ニ遣ス

二日、くも、又雨、夕晴、梅、今日も中村爲彌に通詞森山榮之助を添候、フレカツ

露使ニ鮮鯛ヲ贈ル

ト船へ遣候、一昨日差越候書面受取置候、如何ニ付、且諭、○木曾山よ、をち來、又、ウダイといふ、カヒタン、先達、物産乃、詳也、問、尋、以、西洋人、船、樫、重、日本、國、出、詳、賞、以上、森、其、節、覺、書、之、越、た、其、木、ハ、カ、ム、ル、ホ、楠、の、や、う、に、思、へ、と、も、甚、デ、ヤ、ツ、チ、及、び、エ、イ、ケ、ン、ホ、相、似、た、る、や、う、に、覺、ゆ、と、あ、る、筈、云、エ、イ、ケ、ン、ホ、マ、キ、ノ、類、と、覺、え、と、森、山、榮、之、助、ハ、樫、之、字、と、覺、と、申、な、れ、ば、其、事、を、以、尋、ね、た、る、ニ、ハ、舌、官、の、從、來、之、謬、傳、な、り、と、玄、圃、申、候、飛、州、高、山、の、御、代、官、は、被、仰、付、候、ハ、直、に、折、る、右、之、通、ハ、ハ、ツ、テ、イ、ラ、の、あ、ひ、ふ、え、い、は、御、用、立、る、き、の、也、大、木、ハ、折、る、や、た、ら、ぬ、と、云、ハ、元、旦、を、祝、し、魯、人、よ、り、牛、を、く、れ、候、揆、搦、と、い、つ、も、よ、り、鮮、鯛、一、折、ツ、遣、候、候、積、左、衛、門、尉、玩、器、ハ、至、る、嫌、ひ、な、る、あ、る、人、費、意、外、の、事、な、る、よ、り、と、取、よ、せ、と、ま、ら、ぬ、と、紅、毛、人、乃、仕、入、の、ふ、左、衛、門、尉、の、先、達、を、遣、した、印、籠、又、は、惣、蒔、繪、の、太、刀、を、と、ち、天、地、を、隔、い、や、く、き、の、な、り、俗、に、申、氣、乃、あ、れ、と、事、事、に、左、衛、門、尉、乃、名、汚、さ、歎、歎、歎、

中村露船ニ於テ決意ヲ示ス

老中宛書翰ヲ受取ル

川路宅ニ會合

長祥寺會議露使提出ノ章程ヲ觀ル

思ひ直候故、先達申上置候上刀をも遣した事なれハと、則最上出來たる直弼（露力）の脇差并小柄小刀を遣候、夫漆器を添候積、○夜四時、中村爲彌歸來、一昨日之書面返却い候を、魯人憤候、不受取由申之、品々辯論之上、此書面不受取内、榮之助一同一寸も動き不申、出帆候ハ、勝手次第とて、決心して居込るに困候、返却之書面受取候よ、御目付方之者共迄、其けしきふき、心配いた候よ也、夜五ツ頃まで待せ候、其内、書面なとをみせ候、御老中方之書翰封書ふ相渡、爲彌受取來、今日の氣き、爲彌榮之助申聞候を具承候、兩人之雄辯俊才且決心之程感歎仕候、○肥前守左衛門尉方、年賀とて參候様之由、朱唐紙に布恬廷とありて差越候、

三日、朝晴、夕雨、六半時、安禪寺 御宮御靈屋大恩寺 御靈屋に參拜以り、○四時揃る、宅ふよ合有之候、夜四ツ時前相濟、三ケ日といへ共、支配向并通詞榮之助休なく、

〔古賀増西使日記〕○世良太一所藏本

安政元年甲寅正月元旦、陰雨、午後會長祥、觀昨夕中村携還章程等、予爲下旁訓、文官話且拙、贅牙難讀、書内及立寺理瘞携眷造屋、夷疑開市之願無確答、心熬不過、突如投章程、近見卯求時夜也、第我諭文先而夷章程後、故中村尙得聘口給、俾之倒置、則經旬辯論、土崩瓦解、不得不唯夷是從、亦危矣、然章程之法、別無肆恣舉動、蓋列國通法、外番都同、特言之我邦、則爲挾

聖廟ヲ拜ス

章程ヲ返却セシム 國境ノ議

制不敬也、若進一層、使我有意于進取乎、是章程也、偶足供我藍本、五大州、何國不可往、何馬頭不可泊、彼既以之要我、々亦得以之要彼、嗚乎進退間、勝敗之機寓焉、坐上噉夷果、衆共云、元朝在三百里外僧寺、會議公事、嚼俄羅斯果、爲國初以來未曾有事、今日夷又椎牛遺余等、祝歲旦、暮肉到、一腿也、白衣裹、血水漬、俄然看之、均人屍、坐客皆愀然反面、而予不勝食指之動也、亦爲一好咲、夜聞主人自鳴琴、音之洪亮、果過倍常品、二更會罷回、初二、朝陰、午晴、拜年八家、午初回、途次拜聖廟、々甚隘、既到、教授向井外記迎于門、前導、杏壇門内布紅氈、廟配位多名、正位供香燭果餌、予盥嗽入拜、右有崇聖廟、又入拜去、外記送于門、生徒送于墻外、廟扁聯皆清商所獻、孔繁、廟邊掛金字清道旗、尤爲不典、夜立太中尾高畠三生來、乃會從史置酒、噉牛肉、聽自鳴琴、彷彿如入左衽之鄉、縱飲至二更後、是日中村再入夷船、却章程、夷愠弗受、論復激、遂屈而受、邊境之論、夷使初曰、若中分哈喇土、厄土島亦準此例、兩翁曰、厄土之屬我、與兀吝有約有証、夷使曰、兀吝非定疆之吏、其言不足憑、而有証之語、夷頗孤疑、今日夷使復申前說云、百年前島屬我、中村云千年前島屬我、是與呂覽黃帝同年之說同、足發人軒渠、而夷遂諷、中邨不辱使乎之名也、然伯德瑑東關之事、夷猶默然、論者亦懵然、曖昧朦朧中、以三寸舌護一大島、妙難言也、功可錄也、初三、雨、崎之大音寺安禪寺、有 霸府祖廟、官差例詣拜、今朝予東裝將往、聞鎮監未去乃止、

露使封書ヲ
老中ニ出ス

露船訪問ノ
議

古賀獨リ定
界五十度説
ヲ固執ス
五十度説ハ
世界ノ公論

安政元年正月二日

九〇

赴中島、昨日中村既退章程、夷遽乞呈一書于執政、緘之密、疑其改頭換面、仍言不詳封內言何事、必副蘭文然后受、夷進蘭字、迨今日譯解、果章程也、如衆攸料、唯書既緘、以政府爲名、不得不受耳、予致諭文漢字、大受蘭字點改、其國字則革自與屬吏議定、予獲免、國書外各票、皆以國字爲主也、從來明日將召夷、而夷却強乞來臨、與吾人議利害、曰一應酬、生一枝葉、似無已時、若乘船、乃本局近結、革奮首唱乘船之便、群屬噪然和焉、荒監云、兩君同載、萬一有變難救、不如一人以病辭、然同載議遂定、初更後回寓、中尾生請陪隨、予以額滿、俾謀諸中村、聽焉、僥倖也、初北境之議、衆茫洋耳、予曰、必以北緯五十度爲限界、革曰、論定界互市、公命所不允、五十度之言、予不能口也、且坐上人皆不知、朝中人皆不知、子一人之言、可以爲據乎、予曰、足下屢說全權、今皇邦版籍如是縮、而尙拱手默、全權之任、庸乎在邪、且五十度之言、全世界公論也、若不見信、請就洋圖以說、況緯度是大略之言、與定界自別、豈有所礙耶、革尙疑弗從、從託野鎮借蘭館輿圖數枚、雖少有伸縮、竟無南于四十九度者、較見信從、

〔大澤秉哲日記〕

○天日本古文書幕末
外國關係文書所載

寅正月元日、

一兩人衆へ昨日差出し候横文字和解有之、明日又々爲彌參り、右品差戻し候つもり有之候、
一上陸之儀、兩人衆番船無之、勝手儘通行いゝし候儀申立候、右番船相止候儀ハ不相成、場所

ハ宜候間、明日カも勝手次第可申渡評議相決候、明日申渡し有之つもり、

正月三日、

一爲彌・半八郎・榮之助本船へ參り、差出候書面、通商之事相叶候節、ハ、妻子迄も差置度抔申、其外種々申出候由、左も無之てハ、免有之ても斷候段、書付今日ハ難請取、差戻し相成事、

一右ニ付、御老中方へ差出度封書差出し、封之事ニ付、同人共持歸り、尤添書明日ニも差出候由有之候、
上陸人之儀、申渡趣無之々々相成のさく申候處、左候ハ、斷申聞候由、

〔水戸原忠成西遊記〕

○維新史料編
纂會所藏本

正月元日、雨、午後翁公逆旅へ會議、

二日、雨、○中是日も中村爲彌夷船ニ行なて辯論、

〔フリーチャチン日本來航記〕

○ゴンチャロフ著
東京帝國大學所藏本

フレガート艦ハルラダ號
高須某抄譯

（慶永六年十二月晦日）

斯クテ、余輩ハ日本人ト向來七八回評議會ヲ開キタリシガ、後チ式部官ノ中村爲彌ハ、通事ノ英之助氏及ビ四名ノ書記役ヲ隨エテ我が本船ニ來訪シ、彼我相交渉談話セル事項ヲ帳簿ニ記入セシメタリ、中村氏膝上ニ手ヲ下シ、額ヲ蹙メテ頻リニ言語シ始メシガ、我が提督ハ固ヨ

安政元年正月二日

九一

書翰呈出添
書明日ニモ
提出ノ由

中村爲彌ノ
來訪

提督書翰ヲ
提出ス

應接掛之ヲ
返却ス

中村受領ヲ
懇願ス

安政元年正月二日

九二

リ談判全權委員ニ向テ談議スル所アラントセルニヨリ、乃チ要件ヲ認メタル封筒ヲ中村氏ニ
交付シ、全權委員ニ贈ラシメシ、中村氏ハ即チ其ノ書面ヲ全權委員ニ交付シタリシカド、何
ゾ圖ラン、其ノ翌日^(實ハ正月二日)ニ至リ、委員ヨリ封筒ノマ、我が提督ノ下ニ突キ戻シタレバ、余輩ハ乃チ
茲ヨリ差出シタル書面ヲ其ノマ、突キ戻サル、理由ナケレバ、宜シク其ノ旨ヲ委員ニ報告セ
ラレヨト言ヒ出デケレバ、中村氏ハ、然シ委員ニ於テハ必ラズ之ヲ貴下ニ返戻スベシト拙官
ニ命ジケレバ、拙官ハ復タ之ヲ委員ニ傳達致ガタク候得バ、何卒領收セラレタク候、尙ホ御
書面ニハ如何ナル事柄ノ記入セラル、ニヤ、委員等ニ於テモ、江戸表ヨリ豫メ如何様ニ御答ナ
シテ可然哉、何等ノ指令モ無之候得バ、貴下ニ於テ委員等ニ對シ強テ答辨ヲ要求セラル、時
ハ、委員等ニ於テ心苦シキ次第不少候間、宜シク御諒察ノ上貴意ヲ得度ト、懇々言ヒ出デシカ
ド、余輩ガ承諾セザルヲ視テ、中村氏ハ、然ラバ直チニ江戸ノ御老中ニ宛テ此ノ書面ヲ差出サ
レタシト言フニゾ、余輩乃チ諾シ、又、是ニ於テ艦長^{ボシエット}ハ提督ノ命ニ依リテ、其ノ書
面ヲ引キ取ラントテ手ヲ之ニ觸レタレバ、中村氏初メテ心ヲ安ンジ、欣然滿面ニ喜悅ノ色ヲ
現シタリ、中村氏ノ瞻視、音聲及ビ舉動粗野ニシテ奇異ナリ、渠レ、^{ボシエット}及ビ余ヲ愛シ、
對談ノ際ナドニハ常ニ余輩ノ肩ヲ拍チ、手ヲ握リ、頗ル余輩ニ昵狎セリ、

「フレガート艦・パルラダ號」

○ゴンチャ
ロフ著

ФРЕГАТЪ ПАЛЛАДА. ОЧЕРКИ ПУТЕШЕСТВІЯ ВЪ ДВУХЪ ТОМАХЪ.

ТОМЪ II. СТР. 223-224. ПОЛНОЕ СОБРАНІЕ СОЧИНЕНІЙ

И. А. ГОНЧАРОВА ВЪ 12 ТОМАХЪ.

Послѣ семи или восьми засѣданій, началъ уже ѣздить на фрегатъ церемоній-
мейстеръ Накамура Тамея, съ Эйноске и съ четырьмя секретарями, записывавшими
все, что говорилося. Какъ быстро подчиненный улавливаетъ здѣсь роль начальника,
да и не здѣсь только! Накамура, какъ медвѣдь, неловко вѣзгалъ на мѣсто, гдѣ
сидѣли полномочные, сжималъ, по привычкѣ многихъ японцевъ, руки въ кулаки
и опиралъ ихъ о колѣни, морщилъ лобъ и говорилъ съ важностью. Но его постигла-
было вотъ какая бѣда: адмиралъ отдалъ ему, для передачи полномочнымъ, запе-
чатанный пакетъ, заключавшій важныя бумаги.

Накамура благополучно доставилъ его по адресу. Но на другой день вдругъ
явился, въ ужасной тревогѣ, съ пакетомъ, умоляя взять его назадъ... «Какъ взять?
Это не водится, да и не нужно, причины нѣтъ!» приказалъ отвѣчать адмиралъ.—
«Есть, есть», говорилъ онъ: «мнѣ не вѣрно возвращаться съ пакетомъ, и я не смѣю
уѣхать отъ васъ. Сдѣлайте милость, возьмите!»

И сами полномочные перепугались: «въ бумагахъ говорится что-то такое», при-
бавилъ Накамура: «о чемъ имъ не дано никакихъ приказаній въ Едо: тамъ поду-

安政元年正月二日

九三

МАЮТЬ, что они какъ-нибудь сами напросились на то, что вы пишете. Видя, что бумага не беруть, Накамурэ просить адресовать ихъ прямо къ Горочю. На это согласились.

Какъ онъ обрадовался, когда П—ть, по приказанію адмирала, дотронулся до бумаги рукой: это значило—взять. Онъ, съ радости, отвязать отъ пояса бронзовый флакончикъ для духовъ, который они всѣ носятъ (т.-е. кто важнѣе), и подальше П—ту. Мы всѣ засмѣялись. Въ этомъ Накамурѣ есть еще что-то дикое, впрочемъ, только въ наружности. Онъ похожъ немного, взглядами, голосомъ и движеніями, на звѣря. Онъ полюбилъ П—та и меня, безпрестанно глядиль насъ по плечу, подавалъ руку.

○本年十二月二十一日ニ至リ、政憲等、「プッチャーチン」ト下田ニ會シテ日露修好條約・同附錄條約ニ調印ス。同日ノ條參看スベシ。

三日 親王・公卿等、參内、正ヲ賀ス。

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

親王清華大臣參内

正月三日、癸卯、晴、議奏當番橋本前大納言殿、厥餘摠參、傳奏兩卿參侍、一親王方式御禮、中務卿宮・兵部卿宮・太宰帥宮等、從長橋車寄御參、一華族大臣方、德大寺前内大臣殿御參、於麝香間、御祝酒被出、於御内儀、有 御對面、其外

差筵御禮

御不參、御使有之、

一差筵之衆御禮、於御内儀、有 御對面、於便所、御祝被出、

一朝餉供進、中殿内侍塞有之、

一外樣番衆所江、雉子燒服沙牛房菱葩銚子提等、被出、

一大福茶棊乾、三番所江被出、如連日、

一入夜、内々衆御盃參侍、外樣衆江御銚子被出、

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

一條忠香等參賀

正月三日、癸卯、晴、家祝如例年、巳下刻、參准后御方、桃花等參新年慶申入、次參 内、依番也、中務卿宮・兵部卿宮・帥宮等、自長橋車寄參上、新年恭賀被申上、於常御所御對面、子申、賜二獻、陪膳德大寺大納言公、益供經之・藤原助胤、次德大寺前内大臣 自餘花族大臣、於同御所御對面、賜二獻、退出之後、三室戸三位・同新三位・隨光朝臣・和光等 各不參、御對面、賜一獻、陪膳以下候詰、未下刻、出御于御學問所、御對面如例、今夜宿仕、御盃候詰、

〔久我建通日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月三日、癸卯、晴、

一黃昏參 内、今日御盃也、都合二十九人之由也、先是、予商量之分四ツ折ニ書付、附議奏廣幡落

手也、予差出候分如左、四ツ折美の紙包、折カケ、所々申來分も同書付、三日、

右	衛門督	建通
左	大辨相	坊城俊忠
幸	相	正親町實忠
新	宰相	庭田重忠
山	科	三位
今	城	中將
野	宮	中將
花	山院	少將
高	野	少將
難	波	侍從
西	四辻	大夫

以上四ツ折

美乃紙包

一今日御盃中段參進、予第一也、獻之處、南廂願御障子ニ添、西杉戸内東西ニ著座也、是流例也、雖然、人々不審之様子也、予先規之通如此、御末廣拜領如例、

〔雅俗日簿〕

○山科言成日記 宮内省圖書寮所藏本

正月三日、今朝家内祝義了出門、〔正親町實忠女孺子〕新待賢門院以下、年始參賀、狩衣切袴、諸家年禮行向了、未刻

許歸宅、

申刻許、衣冠奴袴、諸々年禮了、秉燭、參内、

參内

今晚、御盃出座參朝旨、届于議奏橋本前大納言承知云々、御盃出座人々追々參集云々、貳拾九輩云々、酉半刻許、御盃御催云々、戌刻許、被召云々、如例廊下ニ列座、予、宮内卿次座、刑部卿上也、

良久更被召之旨申傳、天酌於御末廣茂可賜云々、次第傳言、自庇被召、中段御障子開在之、乍立

天酌奉受

入長押、膝候取天盃、膝候持參御前、奉受天酌膝退、於本所疊三帖目一拜、拜領如形、天

盃置疊三帖目、然多聊上江アゲテ二帖目ノ末ニ差上置三帖目雖定式、當時御内儀之說、天盃ハ成丈上

傳聞之間、存件義、於予ハ二帖目差上置了、何レニテ無難云々、膝退、進寄御三方邊、賜小土器、一拜、右廻立揚出庇、人々左廻

人々ハ三帖目ニ置云々、其義自霧隱參進之時ハ、左廻退可然、從庇參進之時ハ、右廻立揚可然、於南庇杉戸邊、東西相對獻取渡、巡々相替、

揚可然予存了、依之於予ハ、令右廻了、如之ニテ御前江尻不廻敷、於南庇杉戸邊、東西相對獻取渡、巡々相替、

於非藏人、包小土器、退出、干時亥刻許、

〔甘露寺勝長日記〕

○東京帝國大學所藏本

正月三日、癸卯、陰晴、時々雨、祝着如例、今日千秋萬歲來、酉刻、〔覺長〕家君令參内給、御盃御出

座也、天酌如例云々、戌半刻、御退朝、

〔藏人細川家日次案〕

○細川常典日記 維新史料編纂會所藏本

安政元年正月三日

九八

正月三日、癸卯、晴、

一親王・丞相・差筵等、御禮、役送助胤・常典、辰半刻、參勤、

一未刻前、於常御所、有 御對面、御陪膳德大寺大納言、手長經之、役送助胤、差筵前物役送

予一人也、進退如例、事訖未半刻比、令退出、

○正月四日、外樣公卿・殿上人等、參賀ニ關スル史料ヲ次ニ收ム。

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

正月四日、甲辰、雨、(傳)當番議奏東坊城前大納言殿、厥餘摠參、傳奏兩卿參侍、

一外樣公卿殿上人御禮也、未二刻過、

出御、有 御對面、先是、小御所御構殿奉行沙汰也、圓座敷設、外樣多人數ニ付、不足九枚御詰カ

借用、

一梅干三番所江被出、大福茶兩番所江被出、御銚子外樣江被出、如連日、

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

四日、甲辰、雨、自去夜伺候、卯終刻退出、○中午下刻、參 內、未下刻、出御于小御所、外樣

公卿殿上人御對面、候詰、入御、了退出、于時申刻計也、

〔甘露寺勝長日記〕○東京帝國大學所藏本

正月四日、甲辰、雨下、今日、外樣公卿殿上人奉拜 龍顏云々、

〔藏人細川家日次案〕○細川常典日記 維新史料編纂會所藏本

正月四日、甲辰、雨、

一外樣御禮惣詰、辰半刻、參仕議奏卿へ申届、

一八景間天盃役送之事被示、常典 勤仕旨申届、

一未刻過、出御、四條大納言已下、拜 天顏了、入御之後、助胤御禮申上、

一於八景間、竹屋三位已下、賜 天盃、御陪膳大炊御門前中納言、手長長順、(兼)役送 常典、

一於内々番所、賜三肴、役送助胤・予、進退如例、事訖申半刻、令退出、

○正月五日、千秋萬歲・非藏人參賀等ニ關スル史料ヲ次ニ收ム、

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

正月五日、乙巳、雨、當番議奏萬里小路中納言殿、其餘參集、傳奏兩卿參侍、

一關白殿御參、

一千穰萬歲依雨御延引、可爲來九日之旨、議奏卿被申渡、

一松室重將・同重則・同重晃等、初參御禮願之交名、奉行西洞院信堅卿江、宗堂附進、御落手

也、

安政元年正月三日

九九

千秋萬歲降
雨ニテ延期
非藏人等參
賀

外樣公卿
上人御禮

安政元年正月三日

一〇〇

一小番差替之四折、同卿へ同人附進、
一奉行西洞院殿々、千秋萬歲御延引觸到來、

九日、己酉、晴、當番議奏東坊城前大納言殿、宿替右大將殿、傳奏衆參侍、議奏衆參集、
(廣禮忠禮)

一前内大臣殿御參、
(德大寺實隆)

一千秋萬歲也、五日依雨、今日被仰出、於參臺殿、有其儀、出御、兩役衆、近習衆、内々外様衆、六位侍中

等、被詰、同列番頭已下兩三輩相從參、此間、御通之御盃有之、先是、圓座敷設、小番所々々

相尋、六位侍中等員數相揃、修理職江相渡、參臺殿簀子江令敷之、小兒圓座議奏衆江御尋申

入、階之南江令敷之、其外殿上人圓座、階之北江令敷之、如例年、近習雲客衆圓座員數番頭相尋、兩番所へ、内々外様者を以相尋、

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

正月五日、乙巳、陰、辰刻後雨、○中、今日千秋萬歲依雨延引、來九日、被仰出了、未下刻退出、

九日、己酉、晴、自去夜伺候、未下刻、於長橋車寄千秋萬歲御覽、候詰、其後兩役召 御前、賜御烟草入、有御雜話、賜酒餅、如例年、申終刻、退出、

〔久我建通日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月九日、己酉、晴、○中、

事記外聞

一去五日、千秋萬歲依雨御延引、今日ニ相成候、非初番之間、惣詰之輩差袴可然旨、(廣禮忠禮)源中納言ト令相談候、併念ニ父卿右大將へ可被尋申入候、

○欄外記事

袴之儀、文政七八年比ニ有之由、矢張差貫著用可然旨也、近習も各差貫俄ニ著用ニ相成候由、外様之輩各御斷有之由也、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記 宮内省圖書寮所藏本

正月五日、從昨日至今日春雨滂沱、○中

今日千秋萬歲依雨儀俄御延引、於微雨ハ押可被行雖、御時宜雨滂沱、來九日已刻可被行云々、式觸々改、

今日惣詰、參仕之人々江ハ口達云々、番頭四辻黃門專商量云々、

九日、○中、

一禁中千秋萬歲云々、去五日、依雨儀御延引、今日被行云々、

三番所共惣詰、著奴袴云々、

〔甘露寺勝長日記〕○東京帝國大學所藏本

正月五日、乙巳、雨下、今日、千秋萬歲參入云々、然而依雨儀御延引、來九日被 仰出旨也、此

安政元年正月三日

一〇一

千秋萬歲延引ハ異例

事文政十三年以來無之由傳聞畢、家君今日御當番也、初番并千秋萬歲惣詰ニ付、御奴袴也、

九日、己酉、晴天、略、去五日御延引千秋萬歲、今日參入云々、

〔藏人細川家日次案〕○細川常典日記
維新史料編纂會所藏本

正月五日、乙巳、雨下、

一千秋萬歲、催助胤、御通予等、巳刻參仕、

一午刻頃、依雨御延引、可爲來九日、議奏卿被申渡、直令退出、

九日、己酉、晴、外様門跡、各不參、

一千秋萬歲也、去五日御延引、催助胤、御通予等、巳刻參仕、未刻頃

出御、時宜如例、御通出座、愛宕三位・基祥・助胤・予三獻有肴、事訖申剋前、令退出、

四日辰甲 露使應接掛筒井政憲・同川路聖謨・同荒尾成允土佐守
○目付・同古賀謹

一郎増
守○後筑後
儒者等、再ビ露艦「バルラダ」ヲ訪フ。使節「フウチャーチン」、他

國ニ開港ヲ許可セバ、露國ニモ之ヲ許シ、更ニ通商條約ヲ締結セバ、

マタ其利益ニ均霑セシメンコトヲ請フ。聖謨、之ヲ諾ス。

〔長崎日露對話書〕○東京帝國大學所藏本
蝦夷地國境談判應接記所載

〔實錄〕
寅正月四日船中對話

使節

一今般御渡之御書取、昨日漢文之譯文御渡ニ付、蘭語之譯と照合拜見いゝ候處、魯西亞も、

外國々と違ひ、格別之御取扱之由、相違無之事ニ候哉、

左衛門尉

一貴國ハ、境を接し候隣國之事故、外國々と違ひ、別段之御取扱振ニ無相違候、

使節

一難有奉存候、然ル上も、唐紅毛も別段之儀、其余之外國も通信通商を乞ひ、御許容相成節ハ、

魯西亞にも、必御沙汰有之候様いゝ度候、

左衛門尉

一通信通商之儀、外國に御許有之程ニ候ハ、魯西亞に御許有之候も勿論ニ候、

使節

一此後若々通商御許ニ相成、右ニ付取極之廉々、外國人に御許有之候程之儀も、魯西亞にも、

安政元年正月四日

露國ノ取扱

他國ニ通商
ヲ許サバ露
國ニモ許サ
レタシ

利益均霑

安政元年正月四日

一〇四

御許有之候様いさ度候、

左衛門尉

一若通商御免相成候節、取極之儀、外國人に許候程之儀も、魯西亞に御許有之候へ、是又子細有之間敷候、

使節

書面ニテ返答ヲ求ム

左衛門尉

一相心得候、然ルニ使節申さる、所、聊不審ニ存候、其譯を、政府之存寄を相分兼候得共、我々心得ニハ、此末和親いさ候場合にも相成候得を、貴國を、素境を接候大國之儀故、外國々ニ對し、一方之防も存する程ニ有之候處、只今申さる、所ニハ、未其意を得ざるよ似たり、

使節

諸外國暴行ニ及バン露國ハ日本ニ加勢セン

一御不審御尤ニ候得共、私心得おるを、隣國殊ニ御國之御爲を御忠告申程之儀故、外國之もの共萬一乱妨狼藉之儀有之候節ハ、いつく迄も御加勢いさ候心得ニ御座候得共、本國政府におゐてハ、御國之御取扱ケ様之事といまも存間敷候間、右ニケ條之御答を願、政

府に申遣候心得御座候、

缺乏品代料支拂方

一今一事伺度候ハ、追々申立置候我國之船々難風ニ逢ひ、無餘儀貴國何處之湊に駛入港いさ、夫々御救助を受候節、右代金不相辨候ハ不叶事ニ付、何處之湊を駛御差極有之度、其場所ニ書付を差出置、夫々拂方いさ候得を、甚便利ニ付、右場所承置度候、

左衛門尉

一其場所即今差極かさ、尤覺之爲メ、品書差置、追の議論相定候上、拂方いさ候得を、差支有之間敷候、

使節

一其度々拂方不仕、追々相嵩候ハ、當惑いさ候、

左衛門尉

一是迄之振合を以相考候得を、格別之事も有之間敷、貴國が我國地に參り、救助を乞候儀、是迄纔兩三度ニハ過へり、然る時ハ、此末も同様ニ可有之間敷、必心配を及間敷候、

使節

一近來ハ度々も可及と、懸念いさ候儀ニ有之候、

左衛門尉

安政元年正月四日

一〇五

安政元年正月四日

一〇六

薪水食料及
開港ノコト
ハ通商ヨリ
モ急務

一少々多く候迎、外國々と違ひ、貴國ハ隣國之儀、變災相救ふハ當然之事ニ候、
使節

一右代料等之儀、通商御免之御論定候上と申候ゑ、餘り遅々いたし、御氣之毒ニ付、通商御
免之儀、可成丈早々御沙汰相願候ハ勿論、右通商カも、薪水食料并港御取開之儀、尤無餘儀
事ニ有、差急候間、何分早々御工夫被下度候、

左衛門尉

一心得候、右之段、政府に可申立、

使節

一今日を折角御入來被下候儀故、込入候儀を不申上筈ニ候得共、右等ハ無餘儀事ニ付、申上候
儀ニ候、此上之處、御政府に可然被仰立、何分ニも願意御立被下候様相願候、

左衛門尉

一得と可申立候間、左様可存候、

使節

一是迄度々御面會、厚御取扱被成下、難有存候、右等之趣を勿論、御國御舊法御改被成候様、
精々申上候趣、委細政府に申立候間、必御法御改相成候様ニ相願候儀ニ御座候、

(魯西亞始末 有所不爲齋)
雜錄 魯西亞應接日記

〔露國海軍少佐ボシエト書翰〕

○東京帝國大學所藏本
標太境界談判一件所載

○正月五日露使應接掛宛

〔表紙〕
「寅」正月六日差出候書面

千八百五十四年 正月廿二日於長崎

俄羅斯書翰一通

和解

箕 作 阮 甫

俄羅斯全權欽差大臣、日本全權欽差大臣より白き、昨日フレガット船より來り給ひし時、下よ云へ
る二個の疑問の答を、筆記して送りたまわんおを希ふ、

第一

日本の政府、俄羅斯國を他國よりも先きよ撰擇したまはんおを希ふの意趣よ因て、全權
欽差をもへらく、日本より交易の港を他國の爲めよ開きまはら、俄羅斯國もほよ必ま
開きたまふるき也、

第二

爾來日本國他國の爲めよ交易を許したまは、我邦ハ隣國の好まあるを以て、交易を勿論、

利益均霑

安政元年正月四日

一〇七

開港通商

安政元年正月四日

一〇八

其他の諸事、我邦は越へて他國は許したまふ寛典あらえ、又俄羅斯臣民をえ、之に先つて寛典を蒙らあめたまひんや、

全權欽差大臣の命を奉じて

「カピテインロイテナント」官(Капитан-лейтенант)名ボスシート書(Лочерт)

一千八百五十四年正月廿一日

フレガット・バルラス 船

長崎に於て、

○異譯

「表紙」
「寅」正月六日差出候書面

千八百五十四年正月廿一日於長崎

魯西亞書面和解

魯西亞使節相願候と、日本重御役人方、昨日魯西亞船御滯座中、左之ニヶ條之御尋任置候儀、猶以書面申立置度候、

第一 日本御政府ニある、魯西亞國事と、他之國々よりと御手厚被爲成下候趣ニ候得と、外國之者共ニ通商の爲め御開御座候時と、魯西亞國にも一同通商開相叶候事と、使節必相心得候、

第二 日本ニある、此末外國之者共ニ通商御開御座候時と、隣國之好被思召、商用及び其他之儀ニ付、法則等之儀ニ

おいても、魯西亞國事を外國と別格ニ御免被成下、猶魯西亞隨屬之者共之ためにも一同之義ニ可有之候、

使節命ニ因る名相記候、

フレガット船バルラス船にて、長崎に於いて、

船將次官

ホ ス シ エ ト

曆數千八百五十四年 和曆二月二十一日

嘉永七年寅正月五日

〔川路聖謨長崎日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月四日 昨夜よき雨午後晴 魯人一條も。先天下之御都合宜可參躰かきと。後日天下之御爲可思と有り。と穩ま甘く爲行届たく。心配いさ居候處。今般書付相渡候義有之。一通を韓文。一通を横文字。一通をのあよと。其のあ書之方へ書判を据たり。右之書浅。魯船へ持參いさ吳候様申候得共。御國躰如何と斷たり。あるは再び珍敷ものかと一覽爲致度。且一且對話等をもいさ候もの之處。永く離別之事とあまひ。今一度も。是非よゆるくと罷越吳候様申之。いさと考居候御幸ニ付。右之書面と。懸合之節。其序よ爲彌よ爲持遣候。左候は、望ままりせ。ゆつらきもの見よ參可申と。過日のヲロコルを贈たる挨拶よ。脇差白さや。直た小刀 同上七十五歳之銘有 錦比袋よ入。青貝まき画之廣ふよのせ候。其廣ふ共よ遣たり。こまを。挨拶且みやけこころ。也。廣ふよ。立派なる物也。 八時前羽織袴よ。家來を野ふくよいさ。巡見之格よ

安政元年正月四日

一〇九

使節應接掛ヲ招待ス

川路等露船ヲ訪フ

て參。こまを繼上下等よてハ。却る御國躰いさゝのいゝと如此。例之通ふま茂見受候と。奏樂なる。船之上り口は。下官之もの共。こまを子に比上り口也。あむべら。茂敷。其よりこ。いゝも立派也。船に上り候るを。次官之もの共軍將等。こを出迎たり。其次之船をこ。船四段よて。四段め。土藏物置之如し。玄關ともいふへき所よ。使節フチヤチン出迎たり。己の部やに通したり。へやの入口よ。勤番之。士。銃炮茂もち立てり。さやまむれ窓此所に。新床茂つくり。花毛氈乃美々たるを敷。著坐するべく成せり。此毛せんハ。ヒロヲ。ト乃如きもの也。其上へ肥前守左衛門尉御目付荒尾土佐守古賀謹一郎坐せり。其外使節をく曲ろくこ。支配勘定御徒目付まで。曲ろくよ居流たり。使節此へやといふもの。疊十五疊をりる所は。花毛氈を敷つめ。此所こ草り。茂敷也。天井を白くぬり。左右板をめよ。惣戸棚之如し。板をめハ。チヤンといふ唐木よ似たるものよ。茂敷有。紫こよ。辯論有。都合五七度。こ左衛門尉申諭したり。こよこよて申へきとハ。魯人之船へ。御重臣之御二人等御出を。皇天を喜せ給ひて。永く泰平之證あるへ。昨夜此雨も午後かゝるまで晴。使節之喜び。可譬よもの。いさ此方に可被爲入と。左右へあけ並へたる。大炮之所に行。軍將一たひ聲茂發候と。太鼓茂つけ太鼓といふものよ似たり。夫茂敷打候やいさや。所々よ軍卒二三百人突とのけ出。大炮此繩をとき。調練をする也。トロン茂の候計。薬。其さまいゝも大騒動あま。一聲も立るとあ。臂此指を遣ふのと。大炮茂こ出。一發。内茂掃除。再ひく出。一發。畢いさこあへと

川路使節ト
對話ス

操練ヲ見ル

申候。船之第一番之上へ出た。此、よも二階有。こゝ共よ。五段あるへし。參る度ニ画こゝよも二階へ上りたるよ。使節をつらこゝのけ茂取。わり手茂と。こゝ茂のけさせ。まつらも肥前守も並ひ。こゝのけ茂すへたり。御目付其外之人々も。そこよ同く居たり。使節一たひ令して。將士あるへ。劍を拔。一聲茂發して。差圖すると。四百人たり之軍卒共。潮比とくのけ出。三本之帆をしらへ上りたり。橋百九十尺有。日本之曲尺と同し。尤十二は割たるも八間余か。此時も。一聲もものいふものかく。口ふへの如き聲の笛茂ふく也。其時二十八間もあるをしらへ上り候と。こゝ帆つな繩をこ茂傳へ上り候。其早きと。可譬ものかく。こゝあききたるをり也。此時前後三艘之ふまを同し。このまよ。大洋よ走出たらへ。帆桁茂東西に奔走。帆つあよ傳えり。上下するさま。全くは蜘蛛如し。こゝ帆茂のけ。帆を收めた。帆つあよ。襦袢のときもの。あけ有。夫茂のさ附る茂。庫之助きたるよ。將士出。笛いさこあたへと申候。軍將比部やに通たり。こゝよも。如前床茂まうけ。こゝの。さらさ比蒲團を敷たり。きまよ。極やえらの也。軍將といへ共學問するとこえ。書籍夥。こゝをりよ。火をち比如きもの有。禁すと甚し。使節其外之所よ。極寒といへ共火あり。さ共。三四月之暖氣のとくよ。仕あけたるもの也。烟草盆あり。たこ茂のむ場所有。キヤマン比さらよ。水茂い。其所よ燈茂置。夫よてのむ也。夫故よ。鼻たをこといひ。鼻へたをこを押しこ。臺所あり。惣銅あり也。こゝよ。琴茂十三才八ヶ月と。いふ童子と。將士とよ。彈たり。箱み段々有。下之段よ。象牙比手札の大サあるもの茂並へ。夫茂指よ。此童子比父也。海

安政元年正月四日

使節ト對話

うつし繪ヲ
觀ル

人、使節の影乃如くみ隨ひ歩行候書記壹人、是ハ十九才也といふ、美少年
なり、眼中不凡、格別ふこ也、此貳人横座ニ著座、以上

酒ハ櫻酒よき酒ふて、よき葡萄酒等なり、いはれもギヤマンふて、銀乃さト、同くまでの如きもの、
庖丁を用ひて食に、胸こきくかまひ處、酢味有酒ふて漸く落付き申候、次之間こて、魯西亞乃
歌を、數十人出て歌ふ事也、禪宗乃經文と少、あのを取之上ふて奏樂なり、いたも可驚歎事計
なり、公儀の御爲を思ひ、る酒出て、互に物語せむを思ふ心ふなると見え、顔を見合て笑ふな
る、其時あのみきひき口を開き、るのて手杖握ま也、左衛門尉なぞ人ふ手を握らる、今日を以
初とに、惣身粟を生、夫を畢り、再び使節の坐ふ來り辯論に、えけのな事ことおれと長く、いは
れも夫々左衛門尉挨拶及ひ候、日もくれまをえ、歸らむといふや、再會期いあさ、是非今少
く居らるる、るにるもの有とて、一日日本里數三百里を走るといふ蒸氣車こまよき機耐ふて車
を廻り也、尤火を附候、之雛形を廻りて申候、是又可驚也、のなり、又歸らむと申をるや、今志ばくと申候、うけ繪を
いま見せ申候、江戸乃の繪乃類ふあらに、巧十倍せり、九尺をりて取白布へ、あげうは
る也、いろく替と、おのほかららふのげ顯と、おのほからり消るの如く、引替候際ええ
不申、地球、晝夜、日月之蝕、ほうた星、五星の眞圖、日ふ添て世界乃廻る々々き、或は虎の子
こくともいふるき圖、子を口ふとて、えて行也、獅子虎象等之眞圖、いたも其物に向ひ、其のさそらに在

西役所ニ赴
ク

清國ノ擾亂
事情ヲ聞ク

露人トノ贈
答

るの如く、此内もまた、あふて、使節とをこりて、其餘之もの、船乃下り口まで送るまで、此
所甚混雜せり、今日船へ參るはくとおもひたふ、參りたる故、使節殊乃外ふ喜ひ、前ふ記
六ヶ敷のりすと、も如意ふりて、此上願筋なきよ申之、歸風たちある氣ききえと、
蒸氣船を、明日出帆之事を申た、日本船に乗うは、一三十間を航したる、俄に號令乃笛
乃音聞えと、夥敷帆柱乃上への事上たる如く航ふ暗夜ふて見えた、四五間參りて、
一時小星乃ことと航光乃花火の如くなるを所々ふせも、は、是書參りたる見送乃
禮な航る、海面者は如晝也、夫より水野筑後御役所に參り、御朱印並大切なる書物乃預置
るを受取候、大澤豊後守
も待居候、五子無事を祝、再び御用向乃相談致候、旅宿に歸りて、九ツ
時過なり、歸るやと、と思ひ、は、は、は、の如く覺候、今日筒井を、先ッ御用見切附
たをて、喜ひ大あらに候、○今日唐土戰爭乃事を篤と聞たり、南京迄を、一揆とも奪
て、追々進む々々きときたるに承候、北京も被奪、鞆鞆迄逃たるよと、不承と申候、○使
節の飲食其外な盆火鉢共ふり、をたを吞との、大羽皿へ火をもりたる所有
り、其所に行きのむな、火あを、さむのらむ乃心ふ、衣類を多く着たり汗甚
く、キヤマン小窓をたくして、板ふて光をたは、暖也とて、
也、紅毛加比丹の室かと、三四月頃のことと、通詞申候、扇を開て類涼を迎ふ、左衛門尉脇
ふ居る次官、は、軍師なるへと、
通詞共乃申候奴あり、扇乃ほき體故、汝ふ與へむと遣るに、殊之外喜ひぬ

使節ヨリノ贈品

予、通詞を以、親しき手ふれたる品をもち、長き親しきを思、やめておこしよ。時計を出し、其くさるをせしむ。ひ、うれしきふたり。予、おとと、ふところおおきき。やめておこしよ。時計を出し、其くさるをせしむ。予、左衛門尉に贈る。意外之事故、辭したまを聞入る。よめて意にまのせらひ。予、其外品々遣は候。其時右之くさるを、左衛門尉之時計にからく。予、附く。予、元乃と。共、其體を使節見て、時計一覽淺乞たり。左衛門尉三奉行被仰付候。實り用立候時計。早出。予、其多く迷惑。まれと、可辭。みおらさ。みせ候處、内外殊之外。見改め。其上時少々早くと。直く。予、爲る。客をせ。むる。頼。く。予、貳本。二。ハ。不宜候。今朝も別段之被下物、旁使節より、時計一ツを奉らむと。贈。予、過日。ブル。コル。之。返。禮。小。白。さ。や。脇。差。小。つ。ら。小。刀。并。銅。脇。差。其。外。を。錦。乃。袋。小。い。き。て。は。の。え。候。困。り。候。人。々。小。申。多。り。貫。候。返。禮。せ。よ。せ。い。ふ。た。せ。肥。前。守。今。日。ハ。過。暖。也。い。ひ。小。直。み。寒。暖。計。を。歸。り。乃。時。筒。井。え。一。同。に。羅。紗。乃。如。き。薄。き。織。物。を。く。ま。た。予。左。衛。門。尉。に。え。其。事。な。し。歸。り。予。時。計。の。箱。を。開。き。と。札。有。横。文。字。ま。ま。有。玄。市。小。よ。み。も。予。思。ふ。り。扇。を。ほ。の。り。も。魯。人。乃。謀。不。一。時。之。興。出。て。な。る。の。如。く。予。實。を。兼。之。目。論。見。取。ま。を。知。り。予。あ。巧。多。可。恐。々。々。

〔古賀増西使日記〕○世良太一所藏本

正月初四、牢晴、已會西衙門、論松前防秋始末、〔向略〕革道吾儕且夕苦心如是、而藩賊交兵、賊有所挂口、須飛書建白、衆從焉、予遣幹僕遺條縷一磁盒一平夷、酬前日所贈也、諸子皆同、而貨更

西役所會議

露船ニ至ル

川路使節ノ開港通商ノ議ヲ談ズ

演砲ヲ觀ル

精、午霽、舟楫既備、事々如前、〔論非、川路使節、露船〕唯四人服章套、從史減三分之一也、已、發埠、海色與晴空映發、岸旁菜花爛開、爲好景、挾岸兩藩戍營、以幕以兵、套例也、既近船、達其右、回出其左、船接、夷將夷官出迎、入次層、夷使出迎、入房、坐次如前日、而夷增麻夷另夷、我亦增四屬吏、十六人同在狹房中、氣積大蒸、加斜日入窗、予等恰背日坐、且本日約不議事、而夷爽約辯論過時、衆皆汗且悶、蓋夷狡、預言議事、以予等必不來也、所乞二項、曰、若開港、乞先列國、曰、商利諸事、乞與列國、無差、革曰、貴國獨有交界之義、若准外番互市、何曾後貴國、且萬一有外警、索其助一臂之力、夷使曰、貴邦若有寇、我固欲出力、只隣誼通市、必求其濟、喋々弗已、兩翁領焉、前兩款、後請我書爲証、而援兵一款、聞莫所聞、吁夷猾矣、窗有紅綠二幔、夷僮一引索、綠幔垂遮日、窓內列玻璃透明白章盤二枚、淡紅花瓶二座、淡紅長頸有把耳者二座、言欲獻我執政也、前日兩翁慮政官拖累、建言退之、故今日羅列、表言之不虛也、又老因煥問溫度、夷示驗器、恰六十四度、牙面扁孔、英制也、翁撫玩、便遺焉、革出時規、與夷對、便解塗金索子遺焉、每事迎合如此、其心腸尤難測、談畢出房、夷使曰、前日操上層砲、今日請操次層、乍播鼓、群卒走就左礮眼、送裝皆如前時、鼓聲發、上層又同操、意下層亦必爾、上層闊然易操、次層以下、頂板低、柱檄多、眼狹、車大、杖長、難操也、而運轉施放之捷、毫弗異上層、可謂熟已、只開擾之聲、雜火門汞聲、有微煙起、衆恐營兵疑而攻船、命止操、遂不觀右操也、迨出地平板上、問從史以

安政元年正月四日

一一〇

次層之間、如勿聞、蓋砌板密、聲不外漏故也、夷使又告操帆供觀、指揮者一呼、三四夷以銅笛傳令、笛曲管、末有小毬、以銅鑲攜帶、吹之、嚙亮遠聞、舶夫分走就三桅下、再吹笛、皆攀繩梯執桅索而上、捷于猿、其上桅斗、有出自孔、有自邊升、節々然也、每斗皆滿、乃左右分走于梁、腹于梁、繩于足、懸空匍匐、人解一結、帆下而張、是為曝濕帆之式、其降也、少從梯者、皆緣繩墜下、交臂抱三繩、或左一右二、或左二右一、由十五六丈上、一氣滑落、繩衣剛有聲而弗敗、仰望累々似串珠、或伏首倒墜、而帽履依然、其熟妙幾驚殺人、壯觀也、已而呼笛號令、再上、各伏梁伸手、結帆而墜下、是為收帆之式、又呼笛號令、復上、以滑車弔下中桅上段一節、而張下帆、是為風大減節之式、上節須十四五間、中桅總長有三十二間云、予等與夷使椅子船尾、步夷一々說其技、舶夫絕無烏鬼種、問諸夷使、言皆係祖國產、此言不必實、而近時廢烏鬼之說確也、聞收放各費二分時而已、亦神速哉、舌人言舶夫年甫十四就業、且有成否、長大後筋骨硬、決不可學、從來人道舶上操作、我舟夫十分成得、今日日擊、即大否、是親睹之益也、按操帆以繩技兼膂力者也、難也、矧其把鎗即為銃卒、發砲即為砲手、左右使令即為僕隸、是僕隸也、銃卒也、砲手也、舶夫也、以四役萃於一身也、難之又難也、意否則舶人必須四倍、過濫無統、其弊不可言、是夷等尤所注意、而邦人所未曾論到也、已而夷使引衆入上層舶帥房、窄甚、窗下有十三四歲夷童、按譜彈琴、々木匣形、排牙條、々面又鑲檀條、三々兩々、以指推之、條末曲上矩形、

彈琴ヲ聽ク

饗應

清國ノ擾亂
ニツキ質問

觸五十銅線作音、極清越、過我俗箏、可聞、非番樂之陋也、曲終、有偉男子來代、亦為巧手、即火船帥也、名骨聞童父在時、為該師船長、掛影乎壁、與童肖、再降次層、於方天井下、圍布罩大案、開讌、右首正面為夷使、其右為西舌人、為老、為步夷、為荒監、為予、為雲夷、為另夷、夷使之左為山舌人、為革、為良夷、為中村、為菊地、為骨夷、為麻夷、今日純用番禮、人供椅、唯兩百人地坐、食品無米飯魚湯、餘同前日、而器皿則遜前日、案心設柑子糖東西等、肉到、數小壘貯雲丹印土醬等、順次澆食、蓋瘦長及尖、其數三、其尖者高近尺、竹筒如、宴間步夷滿斟已蓋、來撞吾蓋、退自飲、猶獻酬之意、尤可怪也、予戲書問麻夷、唐山擾亂、今將如何、夷錯答、シケビチ五字、問是卿名歟、答我名、問卿學北京幾年、寓所謂俄羅斯文館者乎、答在北京十年、今為同士、問卿本貫、夷不解也、宴處即夷使房前、前日屬吏輩歇處也、夷使後即砲眼、故推砲尾以椅焉、予後即柁桿、即食厨、釘上以弔磁盆、板橫以置磁盆、孔板以掛玻璃蓋、又柁桿以板、孔板以蓋、桿旋于柁內、而蓋不動也、桅下絞車下亦同、船之上下四方、立錐地無不施巧也、燕久、復悶蒸、雲夷令人挈上玻璃罩、自吹掌示通風樣、時日曠燭到、予與荒監促歸、舌人言早回必掃興、請少忍、乃不復言歸、予午殮用意少喫、思饜蠻味、亦為格物一端、旋餉旋盡、腹已澎然漲、夷又携一壘來薦、酒氣悍、去塞、乃直昇污案、弗謝不敬、夷習哉、宴闌、口渴甚、一壘盛水在前、聞溜潮所獲、疑帶鹽精毒、而雲夷滿斟、予效焉、與井泉罔異、後聞從史見溜法、以長竹承

安政元年正月四日

一一一

影戲ヲ觀ル

安政元年正月四日

一一二

露、端結布囊、淋漓滴、舶夫迭來、以手桶連飲去云、又夷僮會歌次室、似諷經唄、予與荒監往觀、後壯前稚、逶迤而下、第三室則夷童跳舞云、不觀也、宴罷、夷使請陳影戲、導往船前、復倚而觀、面前張白布、現圓影徑六尺許、大我戲數倍、前畫漸淡、後畫漸分明、換易無歇時、我戲不及也、況戲嬉中寓術藝、其詼諧可笑者、只有大頭人走馬跳劍兩枚耳、餘皆山水物產故事天學、皆足資聞見也、合近三十枚、其兩夫殺二兒英故事、與其大陰真形出沒凸凹尤巧、將終、青紅圓紋、旋轉弗已、又至舶後、觀火車式、食案上既布綠絨、安歷鹿路、車與路共黃銅、車之前立烟筩、後引輜重車、四窗乘車各一、車輪皆合路、蕪酒精容車後、機發、三車環走弗止、爲奇觀、又玻璃筒盈水、革冒而指按、兩偶人互昇降、背生翼、即天人也、我玩具久在、不足珍、又導吾等于房、餉茶、人貺一絨布、顏色各異、骨夷既巨人、予並立、尺度之、高六寸、時夜已近二更、辭去、下舶、入我船、群夷出送如例、船距舶十餘間、每桅梁兩端、一舶夫點燭、數十燭一時齊舉、色綠煌耀久、如煙火戲、夜山生白、爲壯觀、亦送客夷禮也、遂上岸、再會西衙門、分朱章票而回、西亭立太五郎爲守舍、遲久之、談經時去、凡夷之指揮、皆准軍律、日間舶邊曝舶夫臥褥、逮暮收之、一褥一夫、初令各卸下、次令摺疊、抱而立、三令走入船內、儲焉、跬步不出令外、可謂得使衆之法也、聞夷以留影鏡照從史面、夸其巧、則可矣、屬吏某寫砲式于冊、夷址裂奪去、弗返、狹中可鄙也、火器豈獨夷之有、況有精于該夷者邪、又聞夷喜我提燈、伸縮弗置、贊其巧、我之巧、

火車式ヲ觀ル

退舶ノ後西役所ニ會ス

亦豈獨提燈哉、

〔箕作阮甫西征紀行〕

○子爵箕作祥一所藏本

正月四日、半晴半陰、夜雨、

露船ニ至ル
露人トノ交
歡

四半時十時 波戶場に到り、全權等此船に上るを待り、八時二時 前諸人此駕波戶場に來、余及ひ武田生、安穩丸といへば官船に坐、フレガットに近づけ、鼓樂起、今日客日此設此如く盛ならされと、人々甚と打解たは有様ふて、色々もて取らぬ、余をハドクトルと呼ひ、英文醫書を出し誇り示、又畫師某人此た免に、扇面此画を爲、余を見て画稿を出し示、長崎の風景を寫し、高鋒等に東經此度を記、頗る自得此色あり、又一小冊子を出し、余姓名を書きはを乞、姓名を書き與へられ、和蘭字ふて書きたはをも付きへると云へり、又横文を書きければ、讀て見て喜ひけり、又一人あり、余を引て甲板上に到、影画をえり、伯德珠勃爾觚、莫斯科窟此城關此景色、蘭墩、巴理斯此都府宮殿かとを始免として、虎獅子犀象此眞形、けむり此木葉上に生、漸く長大と取りて、後蝶に化せる状等、皆數多るに暇あら、其製作煩くければ記させ、奇巧人を駭きに足れり、然れとも江都ふて影画といへば者も、其奇巧取は、多くは彼に譲らると覺えぬ、酒ハマテイラウエイン、穀核ハ鯛此むりたはに酪をかけたは、甚と美取り、かまてらに、酪に沙糖を和したはを、絲此如く錯綜して絡

影畫ヲ觀ル

安政元年正月四日

一一三

安政元年正月四日

ひたほも、甚々好く、蒸餅ハ、今日此者ハ強硬ふてよあらに、

八日、晴、

朝より川路に抵り、我人の奉れは書翰等を寫さへたよ命せらば、別に一通此短文を譯し上
つは、其事ハ二條此疑問ふて、一ハ、此後他國より交易を請ひ來りて許容あらんにハ、俄羅斯
ハ隣國此好みあり、且つ隣交をも結ひたれハ、我を正席におた、先つ通商御免ありて、他國へ
及られた事、一ハ此後他國より來り請て、寛典を蒙らんとたハ、俄羅斯へも其餘
澤を及ぼされて、恩典を受んふとを請ず、此此事書つけふて賜ひ候様いふ度旨あり、官よ
り書付を望みおとく賜りけは、我人よりも、アニハ港此戍兵を退去せむへた號令此符を出
しけり、夜家書を脩む、

〔水戸原忠成西遊記〕○維新史料編纂會所藏本

正月四日、陰、

群官吏船へ行く、予も從ふ事を得たり、是日也、帆の揚卸、大砲の習練を觀し、饗終りて、其
舞戲寫影等を見せしり、國事の辯論也、其席ニ預らざればあるべからず、

〔大澤秉哲日記〕○大日本古文書館蔵本 外國關係文書所載

正月四日、

一兼る今日呼出候處、昨日相代り、本船へ（前井、川後、澤尾、古賀）四人衆參り候事ニ相成、參り可申候、
一今朝、昨日遣し相成候書面諭書和解遣しニ相成候由、今日役々參り候儀、至る先方宜由ニ
及承申候、

一蝦夷地へ被遣つもり持參之切符差立有之候、尤若く争有之ハ如何ニ有之とて、其段も役
々々急町便出ル、切符之方ハ刻附宿次なり、

〔浦乃藻く津〕○公館徳川園順所蔵本 逸齋叢談拾遺所載

一當正月四日、異船ハ諸官吏上下一同被相越、諸次第ハ舊臘十七日之如く、午上刻乗入、戌中
刻下船歸館、此日も種々奔馳有之、剩夜ふ入、彼うつし繪といふ物を取建、諸官を慰め、其
上種々異産貰受、各帶罷歸候、

〔フーチャチン日本來航記〕○ゴンチヤロフ著「フレガート艦ハルラグ號」高須某抄譯 東京帝國大學所蔵本

終ニ我ガ水師提督ハ、余輩ヲシテ中村氏ニ言ハシメテ曰ク、請フ、貴下全權委員ノ爲メ、告別
ノ禮トシテ饗宴ヲ開キ度候ニ付、フレガット船マデ御責臨被下度ト、適マ（安政元年正月四日）一月十七日屬シ、
日本人ノ方ニ佳辰ノ祝禮ヲ執行シケレバ、我ガ提督ハ上席ノ談判委員ニ訪問ノ名刺及ヒ火酒
牛肉提琴繪畫寫眞挿ノ類ヲ餽贈シタリ、同月廿日、委員等ハ我ガフレガット船ニ來訪シケレ

安政元年正月四日

筒井川路等
ノ來訪

露人提出ノ
書翰ヲ譯ス
其大意

筒井等ニ隨
行ス

安政元年正月四日

バ余輩ハ例ニ依リテ茶ヲ進メタリシガ、提督ハ乃チ談判ヲ爲シタリキ、此ノ日宴會前ニ、余輩ハ砲臺甲板ニ於テ、砲銃操練ヲ日本人ニ觀示シタルニ、彼等其ノ煩噪ヲ厭苦スルモノ、如クナリシ、特ニ筒井老叟ハ驚駭シテ昏迷ヲ感セルヤウナリシカバ、提督ハ速カニ命シテ其ノ演技ヲ罷メシメタリ、此ノ日ノ前夜、委員等ハ通事英之助ヲ余輩ニ遣ハシ、彼等一己ノ求メナリトシテ一挺ノ銃ヲ寄贈セラレタシト申シ出デシガ、(此ハ勿論江戸幕府ヨリ内意ヲ受ケタルニ相違ナシ)、而ルニ我カ提督ハ、此等ノ武器ハ平生最モ親近ニ交遊往來セル者ニアラザレバ、濫ニ相取與スベキモノナラズトテ、之ヲ謝絶セリ、

砲銃操練ノ了リシ後、余輩ハ帆檣操練ヲ日本人ニ觀示シタリ、右終リテ主客食卓ニ就キシガ、今回ハ其ノ席次ヲ歐洲大陸ノ習俗ニ倣ヒテ、四名ノ全權委員ハ式部官中村爲彌ト列坐シ、余輩主人ハ總テ七名之ニ對坐セリ、通事吉兵衛ト英之助氏ハ、復タ二名ノ委員ノ足下ニ當リ、床上ニ堅坐ス、飲食モ亦歐洲風ニ倣ヘリ、余ハ川路氏ヲ接待シ、而シテポシエツト氏ハ筒井氏ヲ接待ス、川路氏ハ食ヲ撰ミテ手下シ、各飲食ノ名稱ヲ問訊ス、筒井老叟ハ默然手ニ隨テ咀嚼シ、菽麥ヲ辨ゼザル如シ、賓客ハ既ニ余輩ト相親近シテ宴席ニ慣レタリケン、第一回ノ饗宴ノ際ヨリモ皆快ク酣醉健啖シ、健康ノ祝辭ヲ唱エ、絶エズ献酬シ居レリ、宴ノ央バニ、川路氏ハ痛飲爛醉ノ餘リ、眼花稍ヤ昏迷セシガ、筒井老叟ハ自若タリ、余輩ガシヤンバン酒ノ

緊要ヲ解クニ臨ミ、塞子ヲ拔キ離サントセシカバ、塞子ハ飛ンデ掀翻シ、酒ノ漲溢シケレバ、賓客ハ忽チ眼瞼ヲ擧ケテバツト目ヲ開豁セリ、英之助ハ固ヨリ洋食ノ宴會ニ慣レ、飲食物ヲ善ク諳熟シ居ルモノカラ、即チシヤンバン酒ノ本質ヲ委員等ニ説明シ居レリ、我カ提督ハ從容トシテ彼等ニ謂テ曰ク、談判事件ハ一刻モ早く抄取ルヨウ取計ハレタシ、而ルニ川路氏ハシヤンバン酒一盃及ヒ菓酒三盃ヲ飲ミ乾シタル後、頭ヲ卓上ニ垂レ、昏睡スルモノ、如シ、稍ヤ暫クシテ頭ヲ擡ゲ、孰レ數日ノ内ニ答辯可仕ニ付、追テ御面晤縷述可致ト、復タ事ヲ曖昧摸稜ニ付シ去リ、内實ハ余輩ノ困倦シ、一日モ早く露國ニ還ランコトヲ希望シ居レリ、要スルニ日本人ハ、兎ニモ角ニモ余輩ヲ疎外シテ、江戸ニ入レシメザランコトヲ務ムルモノ、如シ、而ルニ時勢ノ激スル所、日本人ハ已ニ米國人ノ爲メニ、三箇所ノ港ヲ開キテ交通ヲ便セシカバ、我ガ水師提督ニハ、今別ニ通商條約ヲ強テ締結セザルモ、日本ノ鎖國孤立ハ期年ヲ出デズシテ解ケント推定セリ、

安政元年正月四日

宴會ノ際、余ハ試ニ川路氏ノ携ヘ居リシ扇子ヲ把リテ之ヲ觀覽シケルニ、其ノ構造頗ル簡粗ニシテ、棕櫚(竹ノ誤解歟)ノ木ヲ以テ製シアリ、之ニ白キ厚紙ヲ糊貼シタルモノナリ、余ハ一覽ノ後之ヲ氏ニ還ヘシケレバ、氏ハ通事英之助ヲ經由シ余ニ謂テ曰ク、願クハ記念ノ爲メ貴下之ヲ携ヘ去ラレタシト、是ニ於テ余ハ其ノ好意ヲ謝シテ、而シテ懷中時計ノ鎖ヲ解キ、

筒井トノ贈
答
荒尾ノ贈品
中村ノ贈品
提督ヘノ贈
品山積

直チニ氏ニ酬答セシカバ、川路氏ハ通事ノ譯語ヲ聽キ了リテ、余ニ會釋シ、又謝辭ヲ叙ベシ、夫レヨリ川路氏ハ卓子ヲ立テ離レ、何ヤラ英之助ニ耳語シケルガ、此ハ他ニアラズ、川路氏及ヒ筒井氏ノ兩名ヨリ、余トボシエツト氏ニ煙管二箱ヲ寄贈セントテ、其ノ意ヲ吐露シタルナリ、想フニ余ガ時計ノ金鎖ヲ解キテ渠レニ贈酬シタレバ、渠レハ一本ノ扇子ニテハ其ノ餽贈品ノ餘リ粗末ナリト考ヘテ、斯クハ命シタルナルベシ、吉兵衛氏ハ例ニ依リテ余輩ノ傍ニ彷徨シ、輒然トシテ笑ヒ居レリ、其ノ翌日^{五日}、川路氏ハ又余ニ絹布三種及ヒ銅製ノ煙管ヲ寄贈セラレシガ、銅ノ光澤陸離トシテ黄金ノ如シ、曾テ聞ク、日本ノ銅ハ良質ナリト、光澤ノ此クノ如キモノ少ナカラサルハ、果シテ聞ク所ニ違ハズ、余ハ乃チ筒井氏ニ銀ノ食匙ヲ贈レリ、蓋シ氏ヲシテ之ヲ慣用セシメ、且ツ其ノ兒孫ニ使用法ヲ教ヘシメント欲セシナリ、筒井氏ハ復タ二箇ノ匣ヲ以テ余ニ贈リシガ、一ハ漆塗ニテ、一ハ木地ナリ、孰レモ行厨具ニシテ、其ノ細工珍奇ナリ、第三ノ全權委員^{金澤成忠}ハ、余ニ蓑袋^{タバコイ}及小柄^{コツカ}ヲ贈レリ、日本人ハ帶刀ノ上ニ小柄ヲ携帶ス、余ガ寄贈セラレシ小柄ハ、鳥ノ形體ヲ雕刻シ、日本ノ銘ヲ打チアリテ、其ノ細工頗ル巧緻ナリシ、中村式部官ハ又銅製ノ硯ヲ筆墨ト共ニ寄贈セリ、我ガ水師提督ニ寄贈セル日本ノ餽贈品ハ無數ニシテ、甲板船室ノ上下内外ニ堆積セリ、物品ノ容積ハ餘リ巨大ナラザレドモ、其ノ封袋ノ函匣ノ巨大ナルヲ以テナリ、就中美術品多キニ居リ、又我ガ露國ニ無キ所ノ珍物アリ、陶磁製ノ花瓶及ビ茶碗皆美麗ナリ、特ニ漆器ハ絶妙ナリ、几卓、庖架、階樓、屏障、人形、刀劍等ノ細工品、悉ク日本ノ韻致ヲ含メ、其ノ細工ノ纖巧精緻ナル、又驚クニ堪ユ、又醬油、酒、乾魚、蔬菜ノ類ヲ贈ラレシガ、就中醬油ハ十五樽程モアリシガ、余輩稍ヤ難有迷惑ヲ感セリ、宴會ノ後ニ、我ガ水師提督ハ川路氏ニ金時計ヲ贈リ、且ツ今貴下ニ贈リシ鎖ニ之ヲ繫グベシト云ヒケレバ、氏ハ種種々時計ニ就テ質問シ、且ツ從來提携シ居レル銀時計ヲ余輩ニ觀示シタリシガ、其ノ細工ノ粗拙ナル、恐クハ我ガ露ノ寒村僻地ニ入りテモ觀ルコトヲ得ザルベシ、余輩又筒井氏ニ較ヤ小ナル金時計及ビ絹布二種ヲ贈リ、他ノ二名ノ全權委員^{船屋古賀}ニモ反物二片ヲ贈レリ、斯クテ主客互ニ別ヲ告ゲ、午後八時、日本人ハ我ガフレガツト船ヨリ、ヤガテ十間程^{シユ}モ離レ去リシヤ否ヤ、我ガフレガツト船ニ於テ瓦斯燈ヲ點ゼシガ、光燄萬丈遠ク海水ノ四面ヲ燭ラシケレバ、日本人ハ大ニ感動驚異シテ、其ノ翌日^{五日}來訪シ、斯ル燈燭ハ余輩ノ未ダ嘗テ見ザル所ナルガ、抑モ何ヲ以テ燃料トナシ、如何ニ之ヲ使用セラル、ニヤ、願クハ御教示アリタシト言ヒ出デケリ、

〔フレガート艦バルラダ號〕^{○ゴレンチャ}
OFF著

ФРЕГАТЪ ПАЛЛАДА. ОЧЕРКИ ПУТЕШЕСТВІЯ ВЪ ДВУХЪ ТОМАХЪ.

ТОМЪ II. СТР. 226-231. ПОЛНОЕ СОБРАНИЕ СОЧИНЕНІЙ

И.А. ГОНЧАРОВА ВЪ 12 ТОМАХЪ.

提督川路ニ
時計ヲ贈ル

筒井等退船

Адмираль приказалъ сказать Накамурѣ, что онъ проситъ полномочныхъ на второй прошальный обѣдъ, на фрегатъ. Между тѣмъ наступилъ ихъ новый годъ, начинающійся съ январскимъ новолуніемъ. Это было 17-го января. Адмираль послалъ двумъ старшимъ полномочнымъ двѣ свои визитныя карточки и подарки, состоящіе изъ вишневки, ликеровъ, части быка, пирожнаго, потомъ послалъ имъ маленькіе органы, картинки, альбомы и т. п.

20-го января нашего стили, обѣщались опять быть и сами полномочные, и были. Пріѣхавъ, они сказали, что ѣхали на фрегатъ съ большимъ удовольствіемъ. Имъ подали чаю, потомъ адмираль сталъ говорить о дѣлахъ.

Передъ обѣдомъ имъ опять показали тревогу въ батарейной палубѣ, но у нихъ отъ этого, кажется, душа въ пятки ушла. Въ самомъ дѣлѣ, для непривычнаго человека покажется жутко, когда вдруть, четвереста человекъ, по барабану, бѣгутъ къ пушкамъ, такъ что не повертываясь: спибутъ съ ногъ; раскрѣпляютъ ихъ, отодвигаютъ, заряжаютъ, палятъ (примѣрно только, ударными трубами, т.-е. пистонами) и опять придвигаютъ къ борту. Почти пяти-аршинныя орудія летаютъ, какъ игрушки. Грохотъ орудій, топотъ людей, вспышки и удары пистоновъ, слова команды—все это *больно видѣть* и не *японскому глазу*. Видно было, что нашимъ гостямъ это удовольствіе не совсѣмъ понравилось. Старикъ Тутсуи испугался до дурноты. Велѣли скорѣе прекратить. Наканунѣ они засылали Эйноске просить, будто для себя, а въ самомъ дѣлѣ, конечно, по приказанію изъ Едо, подарить одно ружье съ новымъ прицѣломъ, да нѣсколько пушечныхъ пистоновъ. Но

адмираль отказалъ, замѣтивъ, что такіе предметы можно дарить только тѣмъ, съ кѣмъ находишься въ самыхъ дружескихъ и постоянныхъ сношеніяхъ.

Послѣ тревоги показали парусное ученье: въ нѣсколько минутъ отдали и убрали паруса.

Потомъ сѣли за столъ, уже не попречнему, а всѣ вмѣстѣ, на европейскій дадъ, т.-е. всѣ четверо полномочныхъ, потомъ Тамея, да насъ семь человекъ. Остальнымъ накрытъ былъ столъ въ каютъ-компаниі. Кичибе и Эйноске сѣли опять на полу, у ногъ старшихъ двухъ полномочныхъ. Блюда всѣ подавали по-европейски. Я помогаю управляться съ ними Кавадзи, а П—ть Тутсую. Кавадзи ѣлъ все съ разборомъ, спрашивалъ о каждомъ блюдѣ, а старикъ жевалъ, кажется, безсознательно, что ему ни подавали. Они охотнѣе и больше пили, нежели въ первый разъ, выучились у насъ провозглашать здоровье и безпрестанно подливали вино и намъ, и себѣ. Мы отпивали понемногу, а они добродушно каждый разъ выпивали всю рюмку.

Въ срединѣ обѣда Кавадзи сталъ немного волноваться; старикъ ничего. Подали шампанское. Когда пробка выскочила и вино брызнуло вонъ, они слѣдали больше глаза. Эйноске, какъ человекъ опытный, поспѣшилъ растолковать имъ свойство этого вина. Адмираль предложилъ тостъ: «за услѣпный ходъ нашихъ дѣлъ!» Кавадзи, послѣ бокала шампанскаго и трехъ рюмокъ наливки, положилъ голову на столъ, пробылъ такъ съ минуту, потомъ отряхнулъ хмель, какъ сонъ отъ глазъ, и быстро спросилъ: «когда онъ будетъ имѣть удовольствіе угощать

адмирала и насъ въ послѣдній разъ у себя? — «Когда угодно, лишь бы это не слѣдло ему много хлопотъ», отвѣчено ему. Но онъ просилъ назначить день, и когда адмираль назначилъ черезъ два дня, Кавадзи прибавилъ, что къ этому сроку и послѣднiя, требованныя адмираломъ бумаги, будутъ готовы. Кавадзи все твердилъ: «до свиданiя, когда увидимся?» Онъ надѣялся, не выскажемся ли мы, куда пойдемъ изъ Нагасаки. т.-е. не воротимся ли въ Россiю. Эйноске однажды началъ мѣрять столъ въ адмиральской каютѣ.—«Зачѣмъ?» спросили его.—«А чтобъ слѣдять такой же», отвѣчалъ онъ: «когда придется угощать васъ опять». Онъ думалъ, не обнаружимъ ли мы при этомъ случаѣ нашихъ намѣренiй; но имъ ничего не сказали: говорили только: «до свиданiя», а гдѣ, когда—ни слова.

Это пугало ихъ: ну, какъ нагрянемъ въ Едо? тогда весь трудъ полномочныхъ пропалъ, и ихъ прiѣздъ въ Нагасаки былъ напрасенъ. Имъ хотѣлось отвратить насъ отъ Едо, между прочимъ для того, чтобъ мы не стакнулись съ американцами, да не стали открывать торговлю сейчасъ же, и, пожалуй, чего добраго, не одними переговорами. Вы, конечно, знаете изъ газетъ, что японцы открыли три порта для американцевъ. Адмираль полагаетъ, что послѣ этого затворничество Японiи должно кончиться само собою, безъ трактатовъ. Китоловы не упустятъ случая ходить по портамъ, тѣмъ болѣе, что японцы, не желая допускать ничего похорого на торговлю по крайней мѣрѣ, теперь, пока зрѣло не обдумаютъ и не рѣшатъ этотъ вопросъ между собою, не хотятъ и слышать о платѣ за дрова, провизию и доставку за воду. А китоловамъ то и на руку, особенно дрова важны

для нихъ: извѣстно, что они, поймавъ кита, на океанѣ же топятъ и жиръ изъ него. Теперь плаваютъ множество китолововъ: какъ усмотрѣть, чтобъ они не торговали въ японскихъ портахъ, которые открыты только для того, чтобъ суда могли забѣжать, взять провизию, воды, да и вонъ скорѣй? Японцы будутъ мѣшать сѣзжать на берегъ, свозить товары; затѣется не разъ ссора, можетъбыть, драка, сначала частная, а тамъ... Извѣстно, къ чему все это ведетъ.

За обѣдомъ я взялъ на минутку вѣреть изъ рукъ Кавадзи посмотрѣть: простой, пальмоваго дерева, обтянутый бумажкой. Я хотѣлъ отдать ему назадъ, но онъ просилъ знаками удержать у себя «на память», какъ перевелъ Эйноске слова его. Я поблагодарилъ, но, не желая оставаться въ долгу, отвинтилъ золотую цѣпочку отъ своихъ часовъ и подаль ему. Онъ на минутку остановился, выслушалъ переведенное ему мое привѣтствiе и сказалъ, что благодарить и принимать мой подарокъ. Потомъ вышелъ изъ-за стола и что-то шепнулъ Эйноске. Это вотъ что: Кавадзи и Тсутсуи приготовили мнѣ и П—ту по два ящика съ трубками, въ подарокъ. Принявъ отъ меня золотую цѣпочку, онъ вѣроятно нащелъ, что подарокъ его слишкомъ ничтоженъ. Кичибѣ, не зная ничего этого, послѣ обѣда началъ вертѣться подлѣ меня и, по своему обыкновенiю, задыхаться смѣхомъ и кряхтѣть. Онъ раза два принимался—было говорить со мною, и наконецъ не вытерпѣлъ, и въ третiй разъ заговорилъ, нужды нѣтъ, что я не знаю по-голландски.—«Ихъ превосходительства, Тсутсуи и Кавадзи, просятъ васъ и П—та принять по маленькому подарку...» Эйноске не далъ ему кончить и увелъ въ столовую. Трубки

всѣ подарили П—ту, который, благодаря мнѣ, получилъ подарокъ въ двойномъ количествѣ.

На другой день Кавалзи прислалъ мнѣ три куска шелковой матеріи и четыре пальмовые чубука, съ мѣдными мундштуками и трубками. Мѣдй блещетъ какъ золото: и въ самомъ дѣлѣ въ японской мѣди много его. Тутсую я подарилъ серебряную позолоченную ложку, съ черной, фасона нашихъ деревенскихъ ложекъ, и пожелалъ, чтобы онъ привыкъ ѣсть ею и пріучилъ бы дѣтей своихъ, «въ надеждѣ почаше обѣдать съ русскими». Онъ прислалъ мнѣ въ отвѣтъ два маленые ящичка, одинъ лакированный, съ инкрустацией изъ перламутра другой деревянный, обтянутый кожей акулы, миниатюрный поставецъ, въ какомъ возятъ въ дорогѣ пищу. Это очень оригинальная вещь. Третій полномочный, которому я подарилъ ротте-гоппале, отдалъ меня подложной кошельковъ для табаку и черенковъ для ножа. Японцы носятъ разные наръчки на своихъ сабляхъ, и между прочимъ небольшіе ножи. Подаренный мнѣ стальной черенокъ былъ тонкой отдѣлки, съ рисованными цвѣтами, птицами и съ японскаго надписью. Накамура прислалъ мѣдную японскую чернильницу, съ кистью и тушью.

Подарки, присланные адмиралу, завалили всю палубу, всю каюту. Сами вещи не слишкомъ громоздки, но для всякой сдѣланъ особый ящичекъ, и такъ отчетливо, какъ будто долженъ служить цѣлый вѣкъ. Многіе подарки были очень замѣчательны, одни по изяществу, другіе по рѣдкости у насъ. Вазы и чашки фарфоровыя прекрасны, лакированные вещи еще лучше. Прислали столиковъ, шкапчиковъ,

этажерокъ, даже пѣвья ширмы, даябѣ, куколь, въ полномъ японскомъ костюмѣ, кинжалъ, украшенія къ нему и прочее. Еще прислали сои—это просто наказаніе! Одинъ изъ чиновниковъ подарилъ до пятнадцати кадочекъ съ соей. Прислали саки, какой-то сушеной рыбы, икры; губернаторъ—опять зелени, все это на прощанье.

Послѣ обѣда адмиралъ подаль Кавалзи золотые часы «къ цѣпочкѣ, которую вамъ сейчасъ подарили», добавилъ онъ. Кавалзи былъ въ восторгѣ: онъ еще и въ застѣданіяхъ какъ будто напрашивался на такой подарокъ и все показывать свои толстые, неуклюжіе серебряные часы, какихъ у насъ не найдешь теперь даже у деревенскаго дьячка. Тутсую подарили часы поменьше, тоже золотые, и два куска шелковой матеріи. Прочимъ двумъ по куску матеріи.

Въ 8 часовъ они отравились. Едва они отбѣхали саженъ десять отъ фрегата, какъ вдругъ на концахъ всѣхъ рей показались, сначала искры, потомъ затеплились огоньки, пока слабо, потомъ внезапно весь фрегатъ будто вспыхнулъ, и окрестность далеко озарилась фантастическимъ заревомъ бенгальскихъ огней. На палубѣ можно было увидѣть иголку—такъ ярко обливало зарево фрегаты и удалявшіися японскія лодки, и еще ярче отражалось оно въ водѣ. Это произвело эффектъ: на другой день у японцевъ только и разговора было, что объ этомъ: они спрашивали, какъ? что? изъ чего? просили показать, какъ это дѣлается.

○嘉永六年十二月十七日、政憲等、初メテ露艦「ムルラダ」リ「ン」チャーチン」ヲ訪フ。

安政元年正月四日

露使應接掛筒井政憲・同川路聖謨等、書ヲ長崎掛勘定奉行石河政平守土佐
 ・同松平近直守河内ニ致シテ、應接ノコト略、終ルヲ告ゲ、且樺太境界見
 分使ノ急派ニ斡旋ヲ請ヒ、特ニ同地上陸露國守備兵ノ處置ニ關シテ、
 老中阿部正弘伊勢守○福山藩主ニ建言センコトヲ求ム。

〔露使應接掛筒井政憲等書翰〕○永持徳一所藏本 魯西亞始末所載

○正月四日長崎掛勘定奉行石河政平等宛

應接略々終
 アニワ港ノ
 露國守備隊

以剪紙致啓上候、各樣彌御安泰被成御座、珍重御義奉存候、拙者共無異在勤、魯西亞船も相替
 候儀無之、穩いゝ罷在候間、御安心可被下候、然と魯西亞一條ニ付、追々申進候通、引續
 懸合およひ、昨今之處、先片附候模様ニ御座候、エトロフ・カラフト二嶋之儀、是迄之姿お懸
 合方いゝ候積り御座候得共、先達のカラフトニアニワ港に渡來上陸之異國船ハ、全魯西亞船
 ニ無相違、一牀右港ニと、御國人纔貳拾人程罷越居、外國人窺窺致候様子も相見、甚懸念ニ
 付、使節御國地に渡來以後、魯西亞本國も、守兵を遣し置候由、尤境界睨取極り候上ハ、早
 ヲ引拂可申由之申立ニ有之候、然ル處、カラフト境界取極之儀も、急速之御沙汰ニ難被及と

等閑ニ附サ
 バ唐太ハ露
 領トナラン

見分使派遣
 ムニ斡旋ヲ求

守備隊長宛
 使節ノ書翰

置
 守備兵ノ處

熟議ヲ請フ

之趣意ニ付、右趣意是迄追々申諭、使節おの、大畧ハ承伏候得共、右場所之義ニ付お、不
 容易申立も有之、守兵等差遣置候上ハ、此儘御打捨被置候お、同嶋之義も、魯西亞國に必定
 被相合可申哉、蝦夷地見分之義ニ付お、出立以前左衛門尉・土佐守に被仰渡候御趣意も御
 座候ニ付、右趣意を合、此方も見分之者丈ハ早々可差遣趣ニ懸合置候間、何とも當早春
 見分之もの出立被 仰付候様御取計有之度、扱右見分之者カラフト嶋に罷越候節、魯西亞守
 兵ニ出逢候段も必定も、双方心得違も萬一爭鬭およひ候様も、折角之御趣意も空敷相
 成可申ニ付、使節に申諭、彼守兵共見分之者に對し、聊無禮不法致間敷旨、使節も守兵に差遣
 候書面爲差出、別紙魯西亞文本書壹封、右譯之蘭文壹通共差進候間、魯西亞本書ハ、彼地見分
 之者に御渡被遣候様存候、

前文之通、カラフトニアニワ港ニ魯西亞守兵罷在候上も、當春旬季次第、松前伊豆守（松前伊豆守）ハ、人數彼
 嶋に差渡可申哉、兵力を以追拂候様も、容易之義も參る間敷、左候も、時月を延し候
 御趣意ニ差障り候義も勿論、此節無謀之兵革を動し、萬一差誤有之候も。御國威ニ相拘（伊勢守殿に被仰上
 り候義も出來可致哉、大切之場合ニ付、右等之處も、厚く御評議御座候様、伊勢守殿に被仰上
 可被下候、猶委細之儀も、一兩日中書面を以申上候心得ニ御座候得共、前文之次第暫時も難
 差延候間、急も申進候義ニ御座候、右可得御意如斯御座候、以上、

安政元年正月四日

正月四日

石河土佐守様
松平河内守様

〔露使應接掛筒井政憲等書翰〕

○永持德一所藏本
魯西亞始末所載

○正月四日長崎掛勘定奉行石河政平等宛

以剪紙致啓上候、然々魯西亞船之儀ニ付、追々申上候趣も有之候處、此程懸合之上、先カラフト・エトロフ二嶋之儀を、前々之通懸合方も居合可申處、カラフトアニワ港に渡來之魯西亞人と、松前家之人數と、此節鬭爭等及ひ候るを、御趣意も空敷可相成と懸念仕候間、右之趣松前伊豆守へ被仰渡御座候様いゝ度、且又魯西亞使節を差出候御國見分之者に對し、彼方之者とも決る不法等致間敷旨之書付、使節を差出候處、右々大切之品ニ付、定便宿次浅以差進候積、尤右和解(安二收ム)一册今便差進候間、伊勢守殿へ可然被仰上、夫々御取計有之候様致度存候、委細左衛門尉(所見ナシ)内狀浅以申進候間、右ニ御承知可被下候、右可得御意如此御座候、已上、

松前崇廣へ
ノ諭示

一三八

古賀謹一郎
荒尾土佐守
川路左衛門尉
筒井肥前守

正月四日

石河土佐守様
松平河内守様

左衛門尉内狀、本文と大同小異、但追啓は、中村爲彌別格骨折之趣、并通詞森山榮之助同様骨折有之、同人々御用濟之上、出府可爲致との儀認有之、右内狀窃ニ見る哉得候故、其大略茲認置候、○魯西亞始末

(通航一覽續輯)

〔露國使節フウチャーチン書翰〕

○永持德一所藏本
魯西亞始末所載

○嘉永六年十二月二十八日アニワ港露國守備隊長宛

○同日、露使掛へ提出ス

アニワ港出張魯西亞勢之首長に

我と日本政府之重御役人之談判ひて、魯西亞國と日本之境界之儀ニ付、此冬中、日本御役人カラフト嶋アニワ港に、其地日本人住所見分としる被差遣、此書翰其許に相渡可被申候、我を其許に相頼候と、此御役人其他隨從之御方も候ハ、叮嚀に招待被致、其地見分之儀無差支様可被取計候、右之外差の申述候儀も無之、春に相成折浅得候ハ、我を其地に可罷越、

日本側見分
使到ラバ町
嚙ニ應待ス
ベシ

事記外編

安政元年正月四日

一三九

安政元年正月四日

一四〇

又々我船々之内差越候様可致候、

於日本、

魯西亞帝之全權

アジュダント・ゲネラル、エンファイーセ・アドミラル

エ・ポウティヤティ子名

猶以相頼候也、アニワ港に差遣候人々也、日本政府御役人ニ有之候間、相應ふ叮嚀被盡候様有之度候、

曆數千八百五十四年正月十四日

嘉永六年丑十二月廿八日

於長崎、

フレガット船バルラス號

右之通文意和解差上申候、以上、對話

丑十二月

西 吉 兵 衛
森 山 榮 之 助
楠 林 榮 七 郎

○欄外記事

彼國冬ト云ハ、我邦ノ春小當ル、下文春ト云ハ、則夏也、

(崎陽對話)

○次ニ掲グル露國使節書翰ハ本書ノ異譯ニシテ、天文臺出勤蕃書和解御用市川齊宮等ニ依リ、江戸ニ於テ譯出サレシモノナリ。

〔露國使節プウチャーチン書翰〕

○東京帝國大學所藏本
樺太境界談判一件所載

○嘉永六年十二月二十八日アニワ港露國守備隊長宛

横文字和解

アニワ港の中魯西亞軍役の支配人ニ與ふ、

魯西亞と日本の境界の事ニ就て、予日本官府の全權と商議を成し、其故由ニ就て、當年冬の
間、日本をとり「セガリエン」島掛りの一役人を「アニワ」の港ニ遣るる、是其地ニ在る所
の日本の領分を見分る爲ニあり、而して右の役人、此書翰を汝ニ渡さる、

右の役人及ひ附屬の人々を最も懇切ニ接待し、而して「セガリエン」の地ニ於て、彼の見分を
許さんことを請ふ、
當春ニ於て予暇日を得む、予自ら「アニワ」ニ到るを、然らざむ、予ニ伴ふ一船を其地ニ
送るを、

帝國日本の全權の爲ニ書き、

「アジュダント、ゼネラル」名兼「ヒーセ、アドミラル」名「エ、ポウチアチン」名

二白、「アニワ」名ニ遣る人々、日本官府の一役人あり、第百七十一號ある汝、按に魯西亞軍役の
支配人の番號歟、

安政元年正月四日

一四一

安政元年正月四日

一四二

右役人ふ相應の禮儀を以て接まをきことを請ふ、

千八百五十四年正月十四日 我嘉永六年丑十
二月二十八日

長崎ふ於て、

「フレガット」名「バルラス」號船

高須松亭
高松讓菴譯
市川齊宮

筒井等ノ報
告書

〔水戸藩士原田成徳日記〕○公爵徳川
圖順所藏本

正月十八日、○中

同日、長崎詰筒井肥前守・川路左衛門尉（千七百）公邊へ申上ル、其旨、異船至極穩之由、御國耻ニ不相成様、唐太エトロフ半地ツ、境界取極之見分、惣方々指出、いつと三五ヶ年過候上ならてハ、日本之土地りおろしやの地と、睨と取極候儀ハ難及挨拶旨、双方熟談取極候、尙又右之趣、おろしやハ唐太等指出置候夷人共申遣、異論申間敷旨、睨と申遣置候と申義、證據之爲、書付をも爲指出候間、近々歸帆ニも可相成模様之由、御老中方申上候事、但、當月五日仕出之分、昨十七日着、老公へ阿部（四カ）申上候事、

○正月十二日ニ至リ、政憲等、舊臘二十四日以降ノ應接經過ヲ幕府ニ報ジ、特ニ樺太境界見分使派遣ノ急務ナルヲ陳ズ。同十三日ニ至リ、幕府、松前藩主松前崇廣ニ令シ、不日境界見分ノ吏員ヲ樺太ニ派遣スベキヲ以テ、特ニ同地上陸ノ露人ヲ穩便ニ處置セシム。各條參看スベシ。

熊本藩在府家老有吉頼母立等、藩命ヲ以テ相模警備地ノ視察ニ赴ク。尋デ、萩藩在府家老浦靱負元等、同ジク相模警備地ノ、岡山藩江戸留守居村上小四郎等、同ジク安房・上總警備地ノ視察ニ赴ク。靱負等七日、小四郎等十四日、各江戸ヲ發ス。

〔熊本藩在府家老小笠原備前書翰〕○肥後藩相州御備
場御用一件所載
○正月二十日在國家老・中老宛
以別紙申達候、頼母方相模國御備場見分として、去ル四日ハ被遊御差越候、且又右一同被差越候面々、左之通、

志水新亟
田中八郎兵衛

安政元年正月四日

一四三

有吉頼母等
相模視察ニ
赴ク

安政元年正月四日

一四四

荒木甚四郎
 後藤尉右衛門
 財津勝之助
 池部彌一郎
 余田三右衛門
 覺兵衛弟 庄林曾太郎
 萩原隆平
 永原甚助
 右田長左衛門
 御城使 一人
 外使 二人
 御留守居方物書 一人
 御勘定所物書 二人
 小笠原備前

右之趣爲可申達如是御座候、以上、

正月廿日

御家老 老充
御中老 老充

〔萩藩主毛利慶親申渡〕

○毛利家編輯所蔵本
綴込記録所載

○正月五日家老浦鞆負へ

相模警備地
視察ヲ命ズ

右相州御備場地理爲見分、彼地差越候、

寅正月五日、於

御前御直々被仰渡之、

御次第之儀、前日記録所に授之、

○正月五日家老毛利能登へ

當役座用向
取計ヲ命ズ

右浦鞆負御留守中、當役座用向取計申付候、

寅正月五日、於

御前御直々被仰渡之、

御次第之儀、前日記録所に授之、

〔萩藩達〕

○綴込記
録所載

安政元年正月四日

浦鞆負

毛利能登

一四五

安政元年正月四日

○正月四日藩士木原源右衛門等へ

一四六

相模警備地
視察ヲ命ズ

右相模國海岸地理見分として、來ル七日出足、彼地被差越候事、

木原源右衛門
小倉源五右衛門
中井次郎右衛門
中川宇右衛門
赤川太郎右衛門

湯原右門

森重政之進

千平嫡子
郡司覺之進

右同斷、

寅正月四日、御手廻組證人に渡之、

杉梅太郎

右相模國御備場爲見分、木原源右衛門被差越候付、一同被差越候事、

寅正月四日、矢倉方に渡之、

浦靱負歸邸

〔萩藩綴込記録〕

○毛利家編
輯所蔵本

靱負殿相模國御備場地理爲見分被差越候ニ付、留守中、能登殿に當役座御用被成御聞候處、靱負殿今曉被致歸府候間、其段岩國屋鋪番に御達之事、

寅正月十三日、公儀所に渡之、

〔萩藩浦元襄日記〕

○維新史料編
纂會所蔵本

正ノ三日、天氣、○中
略、

一相州御備場追々御内用其外爲見分罷越候へ共、不究之廉計ニ付、拙者見分ニ參候るハ如何可有之哉之段、御直目付を以內窺仕候處、可然段被仰出候間、六日七日頃々參る道理ニ致決著候事、

正ノ五日、天氣、○中
略、

一御座之間御著坐、拙者被召出、相州御備場爲見分被差越候段、被仰聞候、左候る能登殿被召出、記録所披露、御椽頼著坐、拙者移り、御間之内へ被參候、拙者留守中、當役坐御用御聞を被成候段、被仰聞候、相濟退席、拙者も下候事、
一當役留守中、江戸加判御用御聞を被成候例段々有之、此度も其例ニ被仰付候、御用所に出勤ニお、都合本役同様之萬事取行ニ御坐候事、

安政元年正月四日

一四七

相州警備地
視察ヲ内願
ス

出張ノ命ヲ
受ク

安政元年正月四日

一四八

供人數

正ノ六日、雨天、節分、○中略

一明朝七ツ之供揃ニシテ、正六時出立之筈ニシテ御坐候、備左之通、

士 士 士

鎗

具足箱

宿夫二人

士 山駕籠

陸尺四人

手小人

兩掛 宿

合羽籠

士 士 士

傘

同

同

同

目籠

本馬壹疋

口付

牽馬

沓籠

宿夫一人

當役 鐘 秋良 敦之助

用人 鐘 岡 與一 右衛門

供 頭 田 中 豐

同 世木 又右衛門

松 村 幸 輔

白 井 小 輔

芥 川 三 九 郎

芥 川 重 右 衛 門

有 田 求 馬

中 間 八 人

以 上

正ノ七日、朝曇天、晝後小雨無間止、

江戸藩邸出立

一今朝六ツ時出立、木原源右衛門・中井次郎右衛門・中川宇右衛門・赤川太郎右衛門・杉百合嫡

梅太郎・賀來四郎兵衛固屋迄參候、孰も相州罷越候、公儀人小倉源五右衛門・同所筆者も一

人參候、御内用掛り湯原右門・森重政之進・郡司覺之允も參候、筆者佐々木忠右衛門參候、

直横目貞右衛門小遣(カ) 參候、頃日、高繩御臺土持相成候付、高繩往來雨ニ付、いざらこ之

方々御殿山之後口通り、品川之宿へ罷出候、昨日雨降候故道至る悪く、大ニ手間取候、小休

釜屋方、日雇頭長門屋豊後屋送りニ出候間、下ニ酒出候由、大森小休、晝休川崎萬年屋半

七方、雨少々降出候、生麥加奈川小休、雨止候、暮前戸塚著、大金子屋八郎右衛門方ニ致止

宿候事、

休泊附

江戸

八リ九丁

四リ半

川崎

三リ半九丁

安政元年正月四日

一四九

戸塚止宿

安政元年正月四日

正月七日
程ヶ谷

九

五
金
澤
四
内三
リ舟

一五〇

八
浦
賀

臺場廻り 四

九
上
宮
田

十
三
日

十一
日

江ノ嶋に行戻ル

十二
日

十三
日

十四
日

十五
日

十六
日

十七
日

十八
日

十九
日

以上

大津村著泊

正ノ八日、天氣、

一今朝六過出足、關村小休、金澤、米倉丹後守様御領壹萬二千石大坂御定番、右之所、川越様、押地下役道案内罷出候、晝休吾妻屋安右衛門方ニ候、野嶋船ニ大津村邊迄參答之處、潮落候ニ付、横須賀迄參ル道理ニ相成、船用意宜註進之上、野崎迄駕籠ニ參り、夫乗船、引船ニ横須賀迄凡海上貳里計、此邊石山ニ、品川御臺場石を取候、誠ニ仰山之事ニ付、諸國廻船へ 被仰付候由ニ候、此御方御米船も、先達御用懸り候處、至極迷惑筋有之、御歎申出候間、相州御備場器械等積廻候間、被差除候様被仰出、漸御免相成候、七ツ時分大津村へ著候、此所川越候御陣屋有之候、此邊浦賀組同心道家源右衛門・大久保猶右衛門出迎、茲々案内いゝ宿迄參候、宿兼御用意相成居候ハ手狭之由ニ、俄ニ取替相成、叶大明神別當叶院と申眞言宗へ、日入時分著いゝ候、井伊掃部頭様御家來御預り所掛り兼他所應對役手附川村儀助・北川織之助と申仁宿へ參り、敦之助へ致應對、何ソ用事有之候ハ、可承段申、引取候由ニ候事、

一木原源右衛門・小倉源五右衛門御用所中も追々參り、致相對、明日之義、都合申合候事、

一明朝六ツ半時分、奉行役宅に勤候筈ニ、源五右衛門申合候事、

正ノ九日、折々微雪風、

安政元年正月四日

一五一

浦賀奉行役宅ニ出頭

製造中ノ幕府軍艦ヲ見

安政元年正月四日

一五二

一今朝六半時分、奉行役宅へ小倉源五右衛門同道ニ罷越、用人に致相對姓名申入、今度御備場御用被仰付候ニ付、御固筋萬端御腹藏かく被仰合被下度御頼、時候御見舞旁參上仕候段申入、口上書をも相渡候、用人引取、暫くいさ候罷出、御口上之趣申聞候處、御念入之義ニ候、宜御答申候様申付候、御苦勞と致相拶候、早速引取候、用人式臺下ノ板之間迄送候、昨夜源五右衛門參候節ハ送り不致由、少々案居候處、都合宜候事、

一公儀軍艦御製造相成、過半成就ニ浦賀湊へ繫キ、内造作最中ニ御坐候、與力同心同道ニ候、船ニ見物ニ參り、階掛候漸彼艦へ乗り、委敷致見分候、長サ貳拾余間、幅七八間と申事ニ候、中段居所、上段炮門有之、下段荷物等置所哉、中段ハ左右戸棚之如くして、雜人之居所と申事ニ候御坐候、帆柱三本、都合西洋船之形ニ候事、

一右相濟陸へ上り、ハッテイラ二艘出來、船屋ニ入有之分致見分候、西洋方之小テンマ三四も出來居、是ハ海中へ一艘下り、六挺之櫂ニ漕候、至極速ニ候、我朝之帆船位ニ航候、

カアラ木四寸角位、夫ヨリ板ヲハリ出シ、片頬三枚位輕便ノ仕方ナリ、



上宮田著泊
秋良白井二人浦賀ニ殘ル
臺場ニツキ批評

夫々又々船へ乗り、明神崎之御臺場物見いさ、役所らき所へ上り、煙草給候船乗り、船屋形へ付き、是ハ陸へ上り、合樂製場へ見分ニ參り、此道筋、井伊様御家人罷出居候、合樂場相濟、平野山臺場、千代崎御臺場致見物候、井伊様ハ十分足輕等出案内いさ候、十口之内食事時ニ相成候間、浦賀町屋倉田大三郎方ニ上下并筆者中食認候、井伊様ハ先拂道案内地下人・足輕兩人出候、栗濱一見、千代崎御臺場致見物候、此所遠見番所も有之、十口之内幕ニ及ひ、箒山ハ臺場あり、大炮二挺小やニ入有之候、夜五ツ半過上宮田著、十劫寺と申浄土宗之寺へ致止宿候、秋良敦之助・白井小輔ハ用事有之、浦賀へ殘置候、今夜、木原源右衛門・小倉源五右衛門・中井次郎右衛門・中川宇右衛門・赤川太郎右衛門・湯原右門・森重政之進・郡司覺之允孰も拙者宿へ集り、臺場彼是之評議いさ候、井伊様留守居拙者宿へ見舞候様申様子ニ付、源五右衛門ハ斷々候事、

一明日ハ上宮田御陣營拜見之筈、其節、御彼方御家老・用人・物頭、拙者へ致相對候様子ニ相聞候事、

野田北村
長澤村
津久井村

安政元年正月四日

一五三

安政元年正月四日

一五四

上宮田村
菊名村

上宮田村
郷宿

榮次郎
又兵衛

御預所中

御案内

小網代村

名主仁右衛門

坂へ下村

名主久四郎

三崎町

二町谷村

御本陣役人

大田和村

名主

淺葉仁右衛門

松輪村役人

赤羽根村

飼葉屋五郎右衛門

上宮田村

萬屋辰五郎

相州浦賀

鎌倉屋傳六

右之面々、追々伺ニ罷出候事、

一今晚、井伊様方御賄ニ酒飯被下候、獻立左之通、

置菓子糖類其外色々

吸物結ひ魚

硯蓋

煮海老
九蓮根
年母

鉢
作り身取合

鉢
中鯛鹽焼

安政元年正月四日

一五五

甘 酢魚 取合
取作り合身 汁豆腐

小 皿 香物

千代口鮑 飯

平 椎老白藻

一 士分、一汁二菜酒肴三種、中間以下、一汁壹菜酒肴二種之事、
正ノ十日、曇天、折々微雪、

一 宮田陣屋築立之時、土中ちち甲壹鉢堀出候由ゆ、十劫寺ニ神ニ祭有之、見分い候、大ニ
朽候る鐵氣無之、處々虧候事、

一 六半時分、小倉源五右衛門を致物音候間出立い候、御陣屋前馬場ニ孰も待合候間致下乘
いい候、同道ニる陣門に入候處、役人段々御門内に出起居候、役人案内ニる諸陣屋廻見
いい候、御茶屋御玄關ニる刀の供ニ持ち揚り候、役人誘引ニる御座之間二之間へ通ち候、茶
まま盆干菓子等出候、物頭兩人・御用人・御家老順々罷出致相對候ニ付、及相應候、木原
源右衛門・小倉源五右衛門の別座敷へ通ち候、菓子へ彼方を包候る供へ渡し候、歸り候節、
御家老・御用人・物頭・留守居下之板ノ間迄送り候、夫を殘る諸陣屋廻り、相濟罷出候、迎ひ

上宮田陣屋
見分

罷出候面々、送りい候事、

劍崎松輪兩
臺場見分
三崎著泊

一 劍崎御臺場・松輪村御臺場致見分候、松輪村ニる晝休、鈴木作兵衛と申方ニる中食認候、原
之陣屋・三崎之陣屋へ致見分不申候、八ツ時分少々雨氣之處、無程雨晴申候、七ツ過、三崎二
町谷村へ著、石渡源右衛門方に致止宿候事、

一 井伊様が道案内宮下榮藏・平塚和藤太と申足輕罷出候事、

一 彦根藩他所應對役宇津木六之丞宿へ參候間致相對、及相應候事、

堀内村役人

甚 太郎

上宮田村 役人

其外村々 役略之

右孰も伺ニ罷出候事、

一 宿が鯛壹尾致獻上候とて差出候、返し金百疋遣候、鯛の鹽をいい取歸候事、

一 敦の助・小輔、今日松輪村之先を供い候事、

一 今晚も都合昨夜之通り、井伊様が御賄有之候事、

正ノ十一日、朝曇天少雨、晝前が晴、

城ヶ島臺場
見分

安政元年正月四日

一五八

異船渡來

一五ツ時分出足、船場迄參り、夫々槍傘計ニシテ井伊様御用船に乗候、孰も城ヶ島に渡、御臺場致見分候、役人出會候、遠見番所有之候、相濟、以前之通り歸り候、小網村眞光院と申寺ニシテ休候處、異船渡來之様子、地下向大ニ騒キ候ニ付、白井小輔聞繕ニ遣候處、三崎彦根候之御陣屋ニシテ、荒都合承り書取ニ歸候、左之通、

小田原

長松船

水主

吉

五郎

葦山代官ノ
報知

右ハ御代官江川太郎左衛門殿カ小田原へ申來候次第、左之通、

一ありはろ沖ニ

三艘

一松崎沖ニ

四艘

右之通異船渡來致候趣ニ付、早々三崎表へ注進可致旨、所役人共申付候寄申出候趣、前書吉五郎只今申出候、

三崎陣屋

五月十一日九ツ時認

山下軍治

長州様

御役人衆中

異船渡來注
進ノタメ中
川赤川ヲ歸
邸セシム

一長井村鈴木丈吉と申方ニシテ中食認、手子中も打寄評定いゝゝ、何レ歸府可然、尤其内爰許之御註進、中川宇右衛門カ赤川太郎右衛門先に返シ申候事、

横須賀ヨリ
陸路金澤ニ
赴ク

一七ツ時分長井村立候、横須賀カ船之積ニシテ歸候、公郷村百姓家源次兵衛と申方ニシテ辨當認候、夜五ツ前ニシテ候、供中疲候ニ付、酒給させ候、夜通シ横須賀出船宿鈴木屋小兵衛と申方へ著いゝ候處、風相ニシテ船不相揃候由ニ付、陸通り金澤に曉七ツ過出候、少々休足いゝ候事、

正ノ十二日、晚付雨、夜雪、

金澤出立

一今朝六半時分金澤出足、小休ニシテ江戸カ之御用狀到來、都合御靜謐異船退帆之義申來候事、

十三日早朝
江戸藩邸著

一晝休程ヶ谷、小休加奈川、此先カ及暮候、夜四ツ前川崎著、大津屋小兵衛方よて茶漬認いゝ候、夜八ツ時分品川著、釜屋ニシテ休候、中井次郎右衛門酒飯差出申候、下にも振舞候由、曉七ツ時分、漸江府罷歸候事、

正ノ十三日、天氣、

一五ツ前致出勤候事、

一五九

安政元年正月四日

一 今日御出有之候、御小座敷ニ御目通り被仰付候事、
一 晝時分被遊御歸候事、
一 下り、御裏に御伺ニ罷出候事、

〔萩藩 來原良藏君日載寫〕○毛利家編 輻所藏本

正月七日、上邸へ行、周布を訪、先鋒隊拾五人著府、鞞負殿其外御用所、相州巡見、
〔實次郎〕(無考) (三巻)
吉田・宮部・永島、相州へ出足、

○元萩藩士吉田寅次郎・熊本藩士宮部鼎藏等ノ相模海岸視察ニツイテハ、正月是月ノ條參看スベシ。
〔岡山藩達〕○侯爵池田宣政所藏本 房總警備所藏

○正月三日江戸留守居村上小四郎等へ

村上小四郎〔朱書〕
江戸留守居
岩田勇五郎同

安房上總國御預所御役人兼帶被 仰付候、

〔岡山藩房總警備〕○侯爵池田宣政所藏本

正月十四日、

兼る伺濟ニ付、房總御備場爲見分、左之面々、今晚出立、船路出立、

公儀使 村上小四郎
船奉行 石黒後藤兵衛
貝太鼓奉行 瀧川萬五郎
并下役御徒共

村上小四郎
等出立ス

○參考

〔柳河藩江戸日記〕○伯耆立花 徳徳所藏本

正月十八日、 勘助、

一 今般上總表 御備場御用被蒙 仰候ニ付、左之面々、於 御前右御用懸被 仰付候、

矢鳥隼人
大村主馬
佐野八兵衛
幸丸勘介
吉弘加兵衛

○嘉永六年十一月十四日、幕府ハ彦根・川越ニ藩ノ相模警備ヲ熊本・萩ニ藩ニ、會津・忍ニ藩ノ安房・上總警備ヲ柳河・岡山ニ藩ニ變更スルノ令ヲ發シ、本年三月十五日、以上諸藩ニ各警備地ノ授受ヲ命ジタリ。各條參看スベシ。尙、柳河藩ノ上總警備地視察ニ關スル史料ハ所見ナシ。

安政元年正月四日

柳河藩上總
警備地御用
懸ヲ任命ス

五日^乙 露國軍艦「ヴォストーク」Восток、長崎ヲ去リ、上海^清ニ向フ。

〔川路聖謨長崎日記〕^{○宮内省圖書寮所藏本}

露汽船出帆
上海ニ向フ

正月五日 雨 宅調 今日魯西亞船之内。蒸氣船上海へ向出帆あり。

〔川路聖謨魯使應接日記〕^{○宮内省圖書寮所藏本}

中村爲彌露
船ニ試乗ス

殘留ノ露船
十日前後ニ
出帆セン

正月五日、雨、^{○中}蒸氣船出帆ニ付、中村爲彌を密に船みて見せし遣候處、魯人早くも見附候て、よき序也、内乃からくも御覽あるごとく、達の申啣、蒸氣船も乃せ、悉ふ其様子をミせて、香焼と申所之近所迄參候る、ハツテイラふ乗せ候る、日本船に送るぬ、使節其外殊之外之喜ひふて、殊ふしてやう候よ、^{元來左衛門尉も密に一覽之積りし、參り不申、見附られ候以斷りたるとも有、}旁、爲彌歸候る、申聞ふ、^{ハ、參り不申候る、不相成、以前招き候と、重役之譯を參らしてよろし、}今日魯人よ書付を出し、其外早々出帆いふ度、七日ニ離盃被下候計、一言も申はし、通詞に申候る、昨日之一條にて、至る柔ニ成さるや、^{（崙山通詞）}榮之助なぞ大い喜候、此躰ふて、十日前後ふ出立疑羽かふる、^{可怪と、蒸氣船を早く出し、且詞餘ふ甘過と、アメリカ・イキリスなぞ、申合をふ、と恥き様り致度ものなり、}

〔古賀増西使日記〕^{○世良本一所藏本}

正月初五、朝陰午晴、^{○中}今日火船去港、中村與夷使同乘、駛到港口而回、從來火船我邦未成、

^{（前卷）}革帶阮甫等、或欲探此等機括也、且此船爲埋輪新式、最宜仿製者、躊躇間遂去、衆惜焉、

〔大澤秉哲日記〕^{○大日本古文書館末外國關係文書所藏}

正月五日、

一蒸氣船今日出帆、爲彌參り、乘試等有之由候、已上刻出、夕方見隱、

〔箕作阮甫西征紀行〕^{○子爵箕作詳一所藏本}

露船上海ニ
向フ

正月五日、竟日雨、黄昏晴、^{○中}今朝黎明比、中村爲彌バルラス名號フレガット船、即布恬延の乗れ船に抵るに、今朝螺機水蒸船發程比よしみて、煙笛已に烟を吐くを見ぬるの、早く中村を見付け、強て水蒸船に乗らるをさり、頃ふて、螺機動た出し、徐に船進む、高鉾比邊まで抵れ、船行くくと頗急あり、高鉾にて中村を卸して、別を敍せりと云々、此船ハ上海に抵るよし申せりとぞ、羨やくたふと、甚と懊惱あぬ、

〔水戸藩士原忠成西遊記〕^{○維新史料編纂會所藏本}

正月五日、晴、是朝、蒸氣船一艘出帆、晚ニ及んで帆影見えず、

〔平戸藩主松浦曜届書〕^{○内閣記録課所藏本通航一覽編輯所藏}

○正月八日老中へ

此度再渡之魯西亞蒸氣船壹艘、去ル五日長崎沖致出帆候旨、彼地差置候私家來之者に、水野

安政元年正月五日

安政元年正月六日

一六四

(忠實長崎奉行) 筑後守申聞候通相達、承知仕候ニ付、此段申上候、以上、

正月八日

松浦壹岐守

○正月二十一日、琉球那覇ニ至リ、尋デ、「マニラ」ニ向フ。同二十三日ノ條參看スベシ。

六日^{丙午} 露使應接掛筒井政憲等、勘定組頭中村爲彌ヲ露艦「バルラダ」ニ遣シ、開港通商・利益均霑ニ關スル覺書及樺太境界劃定ニ對スル答書ヲ使節「フウチャーチン」ニ交付ス。

〔長崎露使應接書〕

○東京帝國大學所藏本
蝦夷地國境談判應接記所載

正月六日、中村爲彌、魯西亞船ニ罷越候節對話、

但、御徒目付長坂半八郎・御普請役・御小人目付相越、

爲彌

一此程手覺書を以申談候書付、(次ニ收ム)并右譯之漢文・蘭文とも相渡候、

使節

一御書付落手いゝ候、此方々之書面、(次ニ收ム)早速相認差出可申候、(○有所不齊
難ニナシ)

爲彌

唐太境界ニ
關スル答書
ヲ交付ス

境界劃定ノ
件

一カラフト地境之義ニ付、(次ニ收ム)書面相渡候、(○有所不齊
難ニナシ)

使節

一地境之義、五十度と有之候得共、何と之國ニ取極候と申ニも無之、此方ニある、南寄之方而已と存居候處、書面之通御申越シ有之、當所おいて、度數之處決兼候間、何とニも御立會之上ニ致度候間、早々御取極有之度候、

爲彌

一カラフト境之儀、日本所屬ハ、南寄之方ニ少く計有之旨申立候ハ不相當之義、五十度又ハ半島を境といゝ候様ニ、外國之地圖ニも相見候程之義、此段を一ト通告置候事ニ候、

使節

一每度申述候通、境を定候と、交易を通候と之兩條、一同ニ御取極ニ無之候と、貴國之御爲ニも不可然事ニ候、

爲彌

一今日被申聞候趣、罷歸、兩人に可申聞候、扱近日出帆もいゝ候ニ付るハ、御料理被下候間、明日被罷出候様存候、

使節

中村使節ニ
明日來訪セ
ン事ヲ請フ

安政元年正月六日

一六五

安政元年正月六日

一六六

一 忝奉存候、明日九ツ時頃可罷出候、

爲彌

一 上陸人數承度候、

使節

一 凡士官二十五六人、七八人程罷出度、尤禮式ハ略候罷出度候、

一 使節願筋有之、兼通辯官申立置候通、長崎市中出帆前見物仕度候、

爲彌

一 長崎奉行進退之場所ニ付、挨拶難及候、

使節

一 此儀之幾重ニも相願候、○有所不爲
難ニナシ

爲彌

一 難相成國法ニ有候、○有所不爲
難ニナシ

使節

是迄種々御談話も致候處、ケ様之小事何故御斷有之候哉、

爲彌

使節市中見
物ノ許可ヲ
請フ

國禁ニテ受
諾シ難シ

一 此儀之何様被申談候とも、逆も難出來筋ニ候、尤一應之長崎奉行其外へも可申述置候、

使節

一 肥前守様（前非政等）左衛門尉様へも御申述、何事ニも見物相成候様、御取計被下度候、

爲彌

一 兩人へ申聞とも、此義之難整筋故、左様可存候、

本文、長崎市中見物之儀之、翌七日使節西役所に罷出候節、肥前守より申諭、納得爲仕候

儀ニ御座候、○有所不爲
難ニナシ

（魯西亞始末 有所不
爲齋雜錄 柯大覽覽）

〔露國使節プウチャーチン書翰〕○永持德一所藏本
魯西亞始末所載

○正月五日露使應接掛宛

正月五日、差出ス、

但、同様之文意、蘭文ニ有一通差出ス、

此書面、翌六日、差返候事、

此通之答書遺吳候様との儀ニ有、是之、此方之答書案と一有遣候事、○魯西
亞始末

此書ハ、明日、此趣意之御懸合差出候間、其節之御挨拶書、此通之意味ニ御認可被下との儀ニ有、此方之答
書案之積を以差出候事、此書ハ、翌六日、返却致候、○外國
書

安政元年正月六日

一六七

安政元年正月六日

一大日本國、將來若決定開港口准貿易、魯西亞國即應首唱開市各別國以前、
一大日本國、將來若決定不論於何國互市、將通商之利益及諸項另外之方便、別國一得、魯西亞國因交界之故、自然同時亦應得矣、

(外國事件書 樺太境界談 判一件 有所不爲齋雜錄)

〔露國使節應接掛書翰〕○永持德一所藏本 露西亞始末所載

○正月六日露國使節「プウチャーチン」宛

〔朱書〕正月六日、彼船へ持參相渡は、昨魯船が差出候答書案之趣も有之候に付、其好に任じ、左之通、漢字・國字兩通相認め遣は、尤下札之答同様之ものを二付、姓名を記さば、

後來我邦若有開市之日、須以魯西亞先乎列國、

後來我邦若有與列國互市之日、魯西亞因交界之故、准其商利諸事同列國、

此末我邦於る、若通商差許にも相成候は、貴國茂以えめと取はべし、

此末我邦も外國々と通商いふ候時もあら、貴國と土壤相接はる之國ゆへ、交易筋并其外とも、外國同様り取扱へた心得に候、

〔露國使節「プウチャーチン」書翰〕○魯西亞始末所載

○正月七日露使應接掛宛

〔朱書〕正月七日、昨六日渡置候答書案之趣、彼方なる取直し、此方な態と申開候様之振合に認取、差出は、
去年十月、一聞知

貴國派、欽差大臣、前往長崎、本大臣想、其必有權、會同議定兩國界互市通信三事、惟二位

貴大臣首相會日、即言曰、是未奉此大權、是以本大臣繕條約之大略、遞

貴國老中、請寬開決定、今據二位、

貴大臣非一決言、曰

貴國款待魯西亞國、於別諸國、有大異、即請二位貴大臣、堅定本月初四相會日所說之語曰、

一大日本國將來若決定開港口准貿易、魯西亞國即應首唱開市各別國以前、

一大日本國將來若決定不論於何國互市、將通商之利益及諸項另外之方便、別國一得、

魯西亞國因交界之故、自然同時亦應得矣、此外請無推延決定即開市以前本國人於貴

港備需物應何如、何處酬價、盼望二位、

貴大臣、即必遞貴執政、無推延定互市者、是爲緊要兩相有大益之事也、因相會時

費心眞待厚有誠心大禮、實所合知理之人又一同理應酬謝、

安政元年正月六日